The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	GLOCOL 年報　2014
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

GLOCOL
GLOBAL COLLABORATION CENTER

年　報
2014

大阪大学グローバルコラボレーションセンター

GLOBAL COLLABORATION CENTER

OSAKA UNIVERSITY

目　次

page

はじめに ---------- i

Ⅰ．組織の概要 ---------- 1
　１．沿革 ---------- 1
　　１）設置の目的 ---------- 1
　　２）設置と発展 ---------- 1
　２．運営体制 ---------- 1
　　１）運営組織 ---------- 1
　　２）スタッフ ---------- 3
　　３）オフィス ---------- 3
　３．学内の協力体制 ---------- 4
　　１）兼任教員設置の目的 ---------- 4
　　２）兼任教員一覧 ---------- 4
　４．学外との連携体制 ---------- 5
　５．運営経費 ---------- 6

Ⅱ．教育活動 ---------- 8
　１．海外体験型教育企画オフィス（FIELDO） ---------- 8
　　１）沿革 ---------- 8
　　２）体制 ---------- 9
　　３）活動 ---------- 9
　２．海外フィールドスタディ・プログラム一覧 ---------- 22
　３．GLOCOL 提供大学院等高度副プログラム ---------- 27
　　１）「グローバル共生」 ---------- 28
　　２）「人間の安全保障と開発」 ---------- 29
　　３）「司法通訳翻訳」 ---------- 30
　　４）「現代中国研究」 ---------- 30
　　５）「グローバル健康環境」 ---------- 31
　　６）「国連政策エキスパートの養成」 ---------- 31
　　７）「東アジアの地域環境」 ---------- 31
　４．「グローバルコラボレーション科目」と高度教養プログラム「知のジムナスティックス」 ---------- 32

Ⅲ．研究活動 ---------- 34
　１．地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS） ---------- 34
　２．科学研究費補助金 ---------- 37
　３．その他外部資金 ---------- 38
　４．国際研究交流 ---------- 39
　　１）学術交流協定の推進 ---------- 39
　　２）海外からの招へい研究員 ---------- 39
　５．GLOCOL　FD セミナー ---------- 40
　６．スタッフの研究活動（個人研究） ---------- 42

Ⅳ．実践支援活動 64
１．東日本大震災支援活動関連 64
２．JICA 連携事業 64
３．学生支援活動 65

Ⅴ．学内連携事業 66
１．未来戦略機構との連携 66
１）超域イノベーション博士課程プログラム 66
２）未来共生イノベーター博士課程プログラム 66
２．全学教育推進機構との連携 66
３．兼任教員会議 67
４．フィールドスタディに関する学内連携 68
５．セミナー 68

Ⅵ．学外連携事業 73
１．社学連携 73
１）足もとの国際化連続セミナー 73
２）ワン・ワールド・フェスティバル 74
２．他機関との連携 75
３．学会役員、民間団体役員など 77
４．セミナー・イベントなど 78

Ⅶ．出版、情報発信 84

Ⅷ．資料 86
１．セミナー、シンポジウム等開催一覧 86
２．海外出張一覧 92
３．活動記録 96

はじめに

グローバルコラボレーションセンター・センター長
平田收正

大学のグローバル化の流れは急流であり、大阪大学においてもグローバル化への対応を推進しています。2012 年に発表された「大阪大学未来戦略（2012-2015）－22 世紀に輝く―」の中にも「深い専門性と多様性を有するグローバル人材の輩出」、「教育のグローバル化を強く推進する」、「地球規模での多様な人材により構成されるグローバルキャンパスの早期実現」などの表現が見られます。2007 年に設置されましたグローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）のミッションの一つは「国際協力やグローバルな問題に個別に取り組む大阪大学の部局や組織を、文系・理系にかかわらず広く有効に連携させ、文理協働の研究（教育）を行う」ことです。その核となるものが、大阪大学内のグローバル化のハブとしての機能であることは言うまでもありません。そのために各部局や未来戦略機構より GLOCOL 兼任教員を派遣していただき、一方で GLOCOL の教員が各部局や未来戦略機構などの兼任教員として参加する体制を確立してきました。

GLOCOL の成果は大阪大学内のみならず日本の大学全体に大きな影響を与え、グローバル化の先陣を切ってまいりました。このように活動できましたのも、大阪大学の関係者をはじめとして多くの皆様のご支援、ご指導のおかげと感謝いたします。

以下は、2014 年度の主な活動を要約させていただきます。

教育活動

海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）も設置後 5 年目を迎え、本格的に活動しています。2014 年度にはさまざまな助成プログラムを活用して、合計 8 本の海外フィールドスタディ・プログラムを実施しました。本年度の海外フィールドスタディの参加者は合計 58 名で、インドネシア、バングラデシュ、ラオス、タイ、イタリア、東ティモール、オランダ、中国と多地域にわたり実施しました。海外インターンシップでは、海外インターンシップ助成でカタールに 1 人、海外プレ・インターンシップ助成（派遣期間が 1 か月未満）でアメリカ、韓国、タンザニア、フランスへ 4 名を派遣しました。また大阪大学未来基金グローバル化推進事業助成の採択をうけて、フィリピンへ 1 名、カリフォルニア大学へ 7 名を派遣いたしました。

大阪大学の全学的な取り組みである大学院等高度副プログラムを今年度は 7 プログラム開講いたしました。2009 年度以来、のべ 680 名以上の学生が GLOCOL の提供する高度副プログラムを受講申請しており、学生の所属も分野を横断した広範囲であることが GLOCOL の提供する高度副プログラムの特徴です。

また GLOCOL では、大阪大学の教育目標の一つである「国際性」を強化するためのグローバルコラボレーション科目を全学の学部生や大学院生に提供しています。これらの科目は全学教育推進機構と連携をとりながら、GLOCOL 科目の一部を「知のジムナスティックス」として提供しています。

大阪大学では未来戦略機構と全学教育推進機構を中心として教育に関する改革が進んでいます。GLOCOL のミッションの一つはグローバル教育を全学的に提供していくことです。これまでもこれらの機構の活動には多くの GLOCOL 教員が参画してまいりました。2014 年度は未来戦略機構の第一部門には 3 名の教員が、第五部門には 2 名の教員が兼任教員として参加いたしました。また、全学教育推進機構にはセンター長が海外教育部門長として、また 3 名が大学院横断教育部門、海外教育部門、教育学習支援部門に兼任教員として参画しております。今後、GLOCOL の保有する情報や知識を大阪大学全体に展開をしていくために、これらの機構との関係はますます重要になっていくと思います。

研究活動

GLOCOL は「国際協力と共生社会に関する研究をさまざまな学問分野で推進し、国際性を備えた人材養成のための教育を開発すること」を目的としています。GLOCOL が行う教育の基盤は各教員の研究成果であり、GLOCOL はその設立以来、教員の研究推進に努めてまいりました。学内の部局、研究科や学外の民間機関、国際機関、NGO などと協働して研究やセミナー開催など活発におこなってきました。各教員は科学研究費やその他の外部資金に積極的に応募し、研究資金を獲得しています。

独立行政法人科学技術振興機構（JST）と独立行政法人国際協力機構（JICA）が共同で実施している SATREPS（Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development）は 2011 年に採択され、ベトナムとの間で 2012 年度から 2016 年までの予定で「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」の研究を実施しています。

本年度はベトナムの 5 か所の研究拠点と日本側とで本格的な調査研究が実施され、重要な成果が得られました。

実践支援活動

GLOCOL は東日本大震災直後より支援活動として学外 NPO 法人と連携、協力しながら、少数者への視点にこだわった支援を展開しており、「多言語情報発信」「コミュニティラジオ」「移民コミュニティ」を三本柱に活動を行っています。また、これらの活動を学生の教育プログラムとして活用しています。今年はその集大成として 3 月に仙台市で開催された国連防災世界会議に参加し、ワークショップやパブリックフォーラムを企画・実施しました。

例年どおり、阪大生の JICA 関西での夏期インターンシップ派遣など、大学における社会連携活動を行いました。また個々のプロジェクトでは、「地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ」「ハロハロスクエア」（外国人児童生徒の学習支援に関する吹田市国際交流協会との共同事業）が、有償無償を問わず学生、大学院生のキャリア形成に資する目的でおこなわれています。

また、JST の日本・アジア青少年サイエンス交流事業さくらサイエンスプランで 2 本が採択され、11 月にベトナムのタイビン医科大学から院生および若手研究者 3 名を日本に招へいし、阪大や多岐の研究機関や施設を訪問しました。2015 年 1 月には、ベトナムホーチミン市のレ・クィ・ドン高校から生徒 9 名、教員 2 名を招へいし、日本の高度な環境技術について研修をおこないました。

2014 年度の人事については、上田晶子特任准教授が 9 月末で退職され、10 月より名古屋大学に着任されました。小河久志特任助教は今年度末で退職され、常葉大学に着任されました。中山達哉特任助教は今年度末で雇用任期満了となり、大阪府立大学に席を移されました。非常勤職員では、山本七重さんが 12 月末に退職されて新しいお仕事に就かれ、岡田比呂志さんは 2015 年 4 月より経済学研究科に異動になられました。みなさま、GLOCOL 活動に尽力していただきありがとうございました。より一層のご活躍を祈念しております。

私　平田は、大橋一友前センター長の後を受け、2014 年 4 月よりセンター長に就任いたしました。就任 1 年目である今年度は、何もわからないままセンター長としての責務を十分に果たすことなく過ぎてしまいましたが、GLOCOL 全体としては、2013 年度から続く運営費交付金（特別経費）の厳しい減額の中、諸活動の円滑かつ効果的な実施に向けて、引き続き事業の効率化を図ってまいりました。その結果として、本書に挙げさせていただきましたように、これまでの活動と同等以上の成果を得ることができました。センター教職員一同の獅子奮迅の活躍に感謝しております。GLOCOL への全学的な期待は大きく、特にグローバル社会の中で活躍できる人材育成を主導する GLOCOL にしかなし得ない活動に対しては非常に高い評価をいただいており、全学機構や他部局よりの GLOCOL への協力依頼は飛躍的に増大しております。一方で、GLOCOL の設置予定期間が 2016 年 3 月までとなっており、最終年度である 2015 年度を迎えるにあたり、これまで積み上げた成果を如何に今後の大阪大学におけるグローバル化のさらなる推進に活かすことができるかが大きな課題となります。このような GLOCOL の教育、研究及び実践支援活動に対して、多くのご支援、ご協力をいただきました関係者の皆様に心より御礼を申し上げますと共に、こういった課題に取り組む今後の GLOCOL の事業へのご理解と一層のご支援を何とぞよろしくお願い致します。

I. 組織の概要

1．沿革

1）設置の目的

グローバル化のなかで現代世界は、政治構造、経済格差、社会生活などあらゆる面で目まぐるしく変化している。貧困、環境、教育、感染症などの課題が地球規模で山積する一方、日本国内では「足もとの国際化」が急速に進んでいる。このような状況のなか、グローバル化した世界の現実について深く理解し、国際性をもって意思疎通し、課題に取り組むことができる有用な人材を養成することが求められている。大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下 GLOCOL という）は、こうした要請に応えるため、国際協力と共生社会に関する研究をさまざまな学問分野で推進し、国際性を備えた人材養成のための教育を開発することを目的としている。

具体的には、次の目標を掲げている。

1. 大阪大学の教育目標である「教養・デザイン力・国際性」のうち、「国際性」を強化し、国際社会に貢献する。
2. 国際協力やグローバルな問題に個別に取り組む大阪大学の部局や組織を、文系・理系にかかわらず広く有効に連携させ、文理融合の研究を行う。
3. 学内外との連携、国内外の連携を重視し、国際機関、政府開発援助（ODA）機関、大学研究機関、NPO、NGO などとの幅広い関係を築くとともに、官学連携、産学連携、社学連携に取り組む。

2）設置と発展

GLOCOL は、2007 年 10 月に実現した大阪大学と大阪外国語大学の統合に先立ち、両大学の研究教育資源を有効に活かしながら上記の目的を達成することをめざし、2007 年 4 月 1 日に設立された。設立年の 2007 年度には、組織的な基盤を固めつつ、学内外との連携の構築に努めた。当初はセンター長 1 名、特任教員 4 名、事務職員 4 名の小人数で中之島センターを本拠地として出発した。2007 年 9 月には、センター長室と事務局を吹田キャンパスのウエストフロント棟に移転し、大阪外国語大学との統合後新たに設けられた本部事務機構国際部国際連携課国際連携係が、GLOCOL の事務を担当するようになった。なお、現在は、本部事務機構総務企画部国際交流課国際連携係が担当している。GLOCOL は、その後人員を補充し、2014 年度末時点で、センター長 1 名、専任教員 3 名、特任教員 10 名、特任研究員 1 名が、53 名の兼任教員の協力を仰ぎつつ、事業推進にあたっている。

2．運営体制

1）運営組織

① グローバルコラボレーションセンター運営協議会

GLOCOL は、大阪大学全体の教育・研究・実践における国際性の強化をめざしている。このためグローバルコラボレーションセンター運営協議会（以下「運営協議会」という）は、国際交流担当理事を議長とし、センター長および大阪大学の全研究科長により構成されている。国際協力と共生社会に関する研究を推進し、研究成果にもとづく社会活動を実践し、それらの分野での人材養成を行うために、大阪大学として GLOCOL をどう活用するかなど、GLOCOL の管理運営に関する基本方針を審議している。今年度は 2015 年 2 月 18 日（第 14 回）に開催した。

2014 年度運営協議会委員

国際・広報戦略、社学連携担当理事・副学長	岡村康行
センター長	平田收正
文学研究科長	和田章男

人間科学研究科長	中道正之
法学研究科長	竹中　浩
経済学研究科長	大西匡光
理学研究科長	篠原　厚
医学系研究科長	金田安史
歯学研究科長	脇坂　聡
薬学研究科長	堤　康央
工学研究科長	掛下知行
基礎工学研究科長	河原源太
言語文化研究科長	我田広之
国際公共政策研究科長	村上正直
情報科学研究科長	井上克郎
生命機能研究科長	仲野　徹
高等司法研究科長	三阪佳弘
連合小児発達学研究科長	片山泰一

② グローバルコラボレーションセンター会議

運営協議会が決定した方針にならい、部局の意思決定を行い、センターの円滑な運営を図るためにグローバルコラボレーションセンター会議（以下「センター会議」という）が設置されている。センター会議は、センター長、副センター長、センターの教授、准教授、講師およびセンター会議が必要と認めた者などで構成される。センター会議では、センターの業務に関する重要事項、教員人事、予算に関する決定を行っている。

2014 年度センター会議委員

センター長・教授	平田收正
副センター長・教授	宮原　曉
センター准教授	住村欣範
センター講師	島薗洋介
センター特任准教授	上田晶子（2014 年 9 月まで）
センター特任准教授	思沁夫
センター特任准教授	本庄かおり
センター特任准教授	敦賀和外
センター特任准教授	常田夕美子
センター特任准教授	吉富志津代
微生物病研究所教授	堀井俊宏
工学研究科教授	長谷川和彦
文学研究科教授	片山　剛
オブザーバー（国際・広報戦略、社学連携担当理事・副学長）	岡村康行
オブザーバー（教育担当理事・副学長）	東島　清
オブザーバー（人間科学研究科教授）	栗本英世
オブザーバー（未来戦略機構特任教授）	小泉潤二
オブザーバー（医学系研究科教授）	大橋一友
オブザーバー（センター招へい教授）	宮本和久

③ スタッフ会議

業務の実務を調整し、実施のための協議を行う場として、定期的にスタッフ会議を開催している。スタッフ会議のメンバーは、GLOCOL の教員、研究員および事務職員から構成される。

④ 事務部

総務企画部国際交流課国際連携係が GLOCOL の事務を管轄している。係長、主任、特任事務職員 3 名、事務補佐員 3 名が

勤務し、業務管理、庶務、教務関連、セミナー・シンポジウム開催、ホームページ作成、海外体験型教育企画オフィス運営補助などにあたっている（2015 年 3 月 31 日現在）。

2）スタッフ

GLOCOL は、センター長のほか、准教授、特任教員、特任研究員、招へい教員・研究員、そして各部局からの兼任教員によって構成されている。この組織を大阪大学総務企画部国際交流課国際連携係、特任事務職員、事務補佐員が支えている（2015 年 3 月 31 日現在）。

センター長・教授	平田收正
副センター長・教授	宮原　曉（研究推進部門・グローバル共生グループ）
准教授	住村欣範（教育開発部門・国際協力グループ）
講師	島薗洋介（研究推進部門・グローバル共生グループ）
特任准教授	上田晶子（実践支援部門・国際協力グループ）（2014 年 9 月まで）
特任准教授	思沁夫（研究推進部門・国際協力グループ）
特任准教授	敦賀和外（海外体験型教育企画オフィス）
特任准教授	常田夕美子（教育開発部門・グローバル共生グループ）
特任准教授	本庄かおり（海外体験型教育企画オフィス）
特任准教授	吉富志津代（実践支援部門・グローバル共生グループ）
特任助教	安藤由香里（海外体験型教育企画オフィス）
特任助教	小河久志（海外体験型教育企画オフィス）（2015 年 3 月まで）
特任助教	大野光明（研究推進部門・国際協力グループ）
特任助教	小峯茂嗣（教育開発部門・国際協力グループ）
特任助教	中山達哉（研究推進部門・国際協力グループ）（2015 年 3 月まで）
特任研究員	福田州平（教育開発部門・グローバル共生グループ）
招へい教授	小泉潤二（未来戦略機構特任教授）
招へい教授	宮本和久
招へい教授	山本容正（地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」）
招へい教授	渡部宏臣（地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」）
招へい教授	星野和実
招へい研究員	上田宗平（地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」）
招へい研究員	木村　自
招へい研究員	山田真弓
国際交流課	満尾俊一課長、佐藤正子課長補佐
国際連携係	深井　明係長、中　美緒主任
特任事務職員	宮地薫子、片山　歩、畑中英理子
非常勤事務職員	岡田比呂志（2015 年 3 月まで）、青木　愛、大前　舞、山本七重（2014 年 12 月まで）

3）オフィス

GLOCOL は現在、吹田、豊中、箕面の 3 つのキャンパスにオフィスを構え、相互の緊密な連絡によって業務を遂行している。吹田キャンパス内ウエストフロント棟には、センター長室および事務機能を担う本部オフィスが置かれている。センター長室では、少人数での授業やミーティングができるようになっている。特任教員の研究スペースと GLOCOL 本体の事務機能の一部が、豊中キャンパスの全学教育推進機構 全学教育総合棟 I の 3 階フロアにある。同フロアには FIELDO および学生用自主学習スペース STUDIO が設置されている。箕面キャンパスには、学生指導用のスペースがおかれている。

センター本部

豊中オフィス（STUDIO）

３．学内の協力体制

１）兼任教員設置の目的

GLOCOL には、グローバルな協力と協働という広いテーマに個別に取り組む部局や組織を、文系・理系にかかわらず有効に連携させるシステムをつくり、新しい教育、研究、実践をする場として機能することが求められている。そのため各部局の教員に兼任教員を依頼し、今年度は、学内から 53 名の教員が GLOCOL を兼任した。2014 年 12 月 9 日に兼任教員会議を開催し、情報交換を行った（詳細は p.67）。

２）兼任教員一覧

石川真由美　　未来戦略機構教授
三田　貴　　未来戦略機構特任講師
石井正彦　　文学研究科　文化表現論専攻日本語学講座教授
竹中　亨　　文学研究科　文化形態論専攻世界史講座教授
片山　剛　　文学研究科　文化形態論専攻世界史講座教授
栗本英世　　人間科学研究科　人間科学専攻基礎人間科学講座教授
中川　敏　　人間科学研究科　人間科学専攻基礎人間科学講座教授
森田敦郎　　人間科学研究科　人間科学専攻基礎人間科学講座准教授
平沢安政　　人間科学研究科　人間科学専攻教育環境学講座教授
中村安秀　　人間科学研究科　グローバル人間学専攻人間開発学講座教授
千葉　泉　　人間科学研究科　グローバル人間学専攻人間開発学講座教授
澤村信英　　人間科学研究科　グローバル人間学専攻人間開発学講座教授
河森正人　　人間科学研究科　グローバル人間学専攻地域研究講座教授
岡田千あき　　人間科学研究科　グローバル人間学専攻人間開発学講座准教授
山本ベバリー・アン　　人間科学研究科　人間科学専攻先端人間科学講座教授
北村　亘　　法学研究科　附属法政実務連携センター教授
深尾葉子　　経済学研究科　経営学系専攻経営情報講座准教授
磯　博康　　医学系研究科　予防環境医学専攻社会環境医学講座公衆衛生学教授
杉本　央　　医学系研究科　予防環境医学専攻感染免疫医学講座感染防御学教授
大橋一友　　医学系研究科　保健学専攻統合保健看護科学分野生命育成看護科学講座教授

牧本清子　　医学系研究科　保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座教授
宇野公之　　薬学研究科　分子薬科学専攻生命分子化学講座教授
原田和生　　薬学研究科　附属実践薬学教育研究センター実践教育部講師
池　道彦　　工学研究科　環境・エネルギー工学専攻環境資材・材料学講座教授
原島　俊　　工学研究科　生命先端工学専攻生物工学講座教授
福井希一　　工学研究科　生命先端工学専攻生物工学講座教授
長谷川和彦　　工学研究科　地球総合工学専攻船舶工学講座教授
西田修三　　工学研究科　地球総合工学専攻社会システム学講座教授
尾方成信　　基礎工学研究科　機能創成専攻機能デザイン領域制御生産情報講座教授
真島和志　　基礎工学研究科　物質創成専攻機能物質化学領域合成化学講座教授
三宅　淳　　基礎工学研究科　機能創成専攻生体工学領域生物工学講座教授
ジェリー・ヨコタ　　言語文化研究科　現代超域文化論講座教授
大村敬一　　言語文化研究科　言語文化専攻現代超域文化論講座准教授
近藤久美子　　言語文化研究科　言語社会専攻アジア・アフリカ講座教授
星野俊也　　国際公共政策研究科　国際公共政策専攻システム統合講座教授
竹内俊隆　　国際公共政策研究科　国際公共政策専攻システム統合講座教授
山内直人　　国際公共政策研究科　比較公共政策専攻現代日本法経システム講座教授
松野明久　　国際公共政策研究科　比較公共政策専攻比較公共政策講座教授
蓮生郁代　　国際公共政策研究科　国際公共政策専攻国際公益システム講座准教授
尾上孝雄　　情報科学研究科　情報システム工学専攻情報システム構成学講座教授
堀井俊宏　　微生物病研究所　附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野教授
有末伸子　　微生物病研究所　附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野助教
東岸任弘　　微生物病研究所　附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野助教
八木康史　　産業科学研究所　知能システム科学研究部門複合知能メディア研究分野教授
西村謙一　　国際教育交流センター　日本語教育研究チーム准教授
仁平卓也　　生物工学国際交流センター長・教授
藤山和仁　　生物工学国際交流センター教授
高橋京子　　総合学術博物館　教育・研究部資料基礎研究系准教授
兼松泰男　　産学連携本部　イノベーション部教授
池田光穂　　コミュニケーションデザイン・センター　臨床＆フィールドコミュニケーションデザイン部門教授
林田雅至　　コミュニケーションデザイン・センター　安全コミュニケーションデザイン部門教授
岩井茂樹　　日本語日本文化教育センター准教授
高部英明　　レーザーエネルギー学研究センター　高エネルギー密度科学研究部門教授

４．学外との連携体制

GLOCOL は大阪大学内の連携のハブとなるばかりでなく、国内外の大学、研究機関、国際機関、官公庁・自治体、市民社会などとの幅広いネットワークを構築している。2014 年度は GLOCOL セミナーなどに、他大学や民間機関、大阪府警、外務省、国際機関、NPO などから多数の講師を迎えた。7 つの国際機関から人事・採用担当者が来日し、国際機関で働くための実践的な解説・アドバイスを行い、参加者と直接対話できるセミナーも開いた。また、海外フィールドスタディ 8 件が教育機関や NGO、海外拠点などの協力の下に実施された。海外インターンシップでは長期で 1 人、短期で 4 人を派遣し、未来基金グローバル化推進事業の助成を利用したプログラムとして、1 人をフィリピン、北米センターのバックアップのもとカリフォルニア大学へ 7 人を派遣した。活動 3 年目を迎える SATREPS では、ベトナムの 5 つの研究拠点での本格的な調査をすすめている。学術交流協定は 9 件が引き続き更新されている。

東日本大震災支援活動は複数の NPO と連携して活動を進めている。地域研究コンソーシアムを通じ国内研究機関との連携のものとセミナーや活動、足もとの国際化セミナー、市民団体との連携など学外機関との連携も順調に推進した。（詳細は pp.73-83）

５．運営経費

GLOCOL はプロジェクトの開始から 8 年目を迎え、プロジェクト期間の残りが 2 年を切るなか、2014 年度運営費交付金特別経費の査定額が要求額の 20%減となり、世界適塾の全体構想及び、未来戦略機構等他部局との連携を考慮しつつ、予算計画の策定を行った。その際、教育事業の維持を最優先課題に掲げ、同時に管理費の削減努力を行い、学内予算や外部資金への申請を積極的に行った。

管理費等の削減の主なものは、箕面居室の目的変更による維持費削減、教務関係は非常勤講師及びゲスト・スピーカーの可能な限り学内教員への切り替え等が挙げられる。

また、各グループ（国際協力、グローバル共生）の活動をより教育的な視点で企画した。特に 2015 年 3 月に仙台で開催された国連防災世界会議では GLOCOL 主催イベントに学部生及び大学院生を派遣して発表の場を設定し、旅費の一部を助成した。

教育活動については、大学院等高度副プログラムは 2013 年度と同様の 7 プログラム、グローバルコラボレーション科目は 47 科目が大学院等高度副プログラムおよび高度教養プログラムに提供、実施された。

海外体験型教育プログラムについては、昨年と比較すると若干規模は縮小したものの、インターンシップで 17 名の学生を派遣し、海外フィールドスタディを 8 本実施、58 名の学生を派遣した。

研究活動としては、SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）が順調に進捗しているほか、文部科研 16 件、受託研究／事業（SATREPS、JSPS 論博、さくらサイエンス）の実施、奨学寄附金の受入れ、実施の規模は 2013 年度と比較して大きく変わっていない。

実践支援活動として、GLOCOL セミナー及びシンポジウムを実施し、ブックレットを 1 種出版した。

以上の財源の収入内訳を示したのが図 1、経費別支出額を示したのが図 2 である。図 1 の収入額のうち、26,501 千円については 2015 年度に繰り越すこととなった（うち 22,175 千円が SATREPS）。

図 1：財源収入内訳
（合計：¥208,168,726）

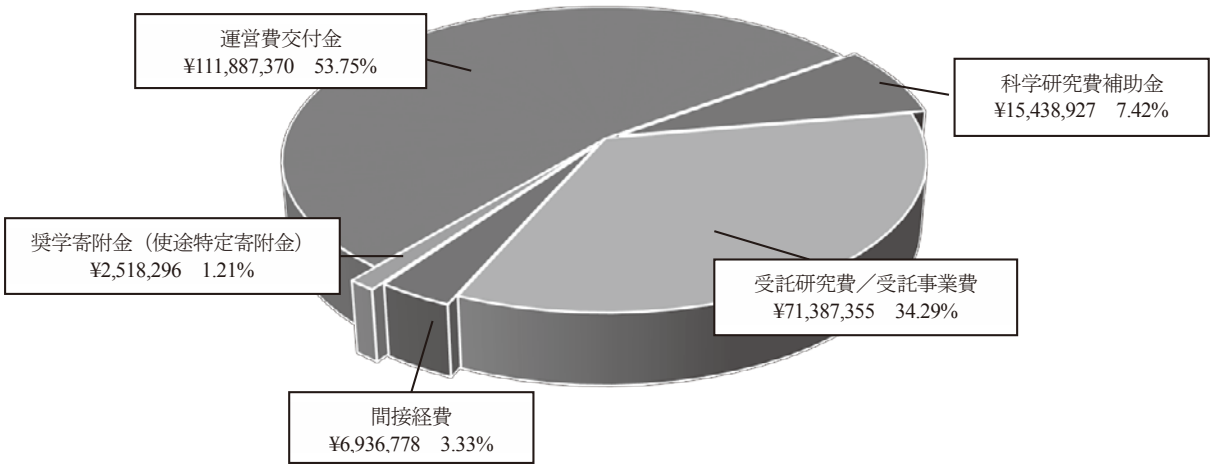
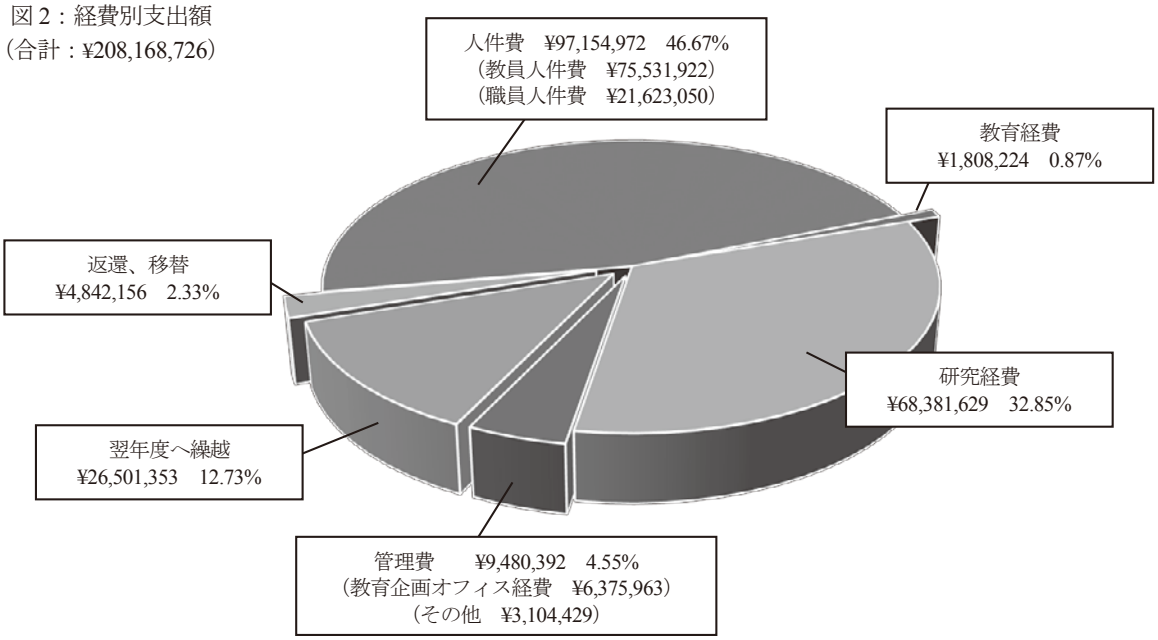


図 2：経費別支出額
（合計：¥208,168,726）



II.教育活動

1．海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）

1）沿革

GLOCOL では、海外での実地体験型学習と実践をサポートすることを目的とする「海外体験型教育企画オフィス」（FIELDO：Fieldwork, Internship and Experiential Learning Design Office）を 2010 年 8 月 1 日に設置し、運営している。

オフィスの目的は、大阪大学全学の学部学生、大学院生を対象とした海外インターンシップや海外フィールドスタディなどを、学内のさまざまな部局と協力しつつ企画し、グローバル人材、国際協力と開発の分野で活躍できる人材、および、共生社会の実現のために資する人材の育成をより一層推進することである。

Fieldwork, Internship and
Experiential Learning Design Office
GLOCOL, Osaka University

海外体験型教育の企画

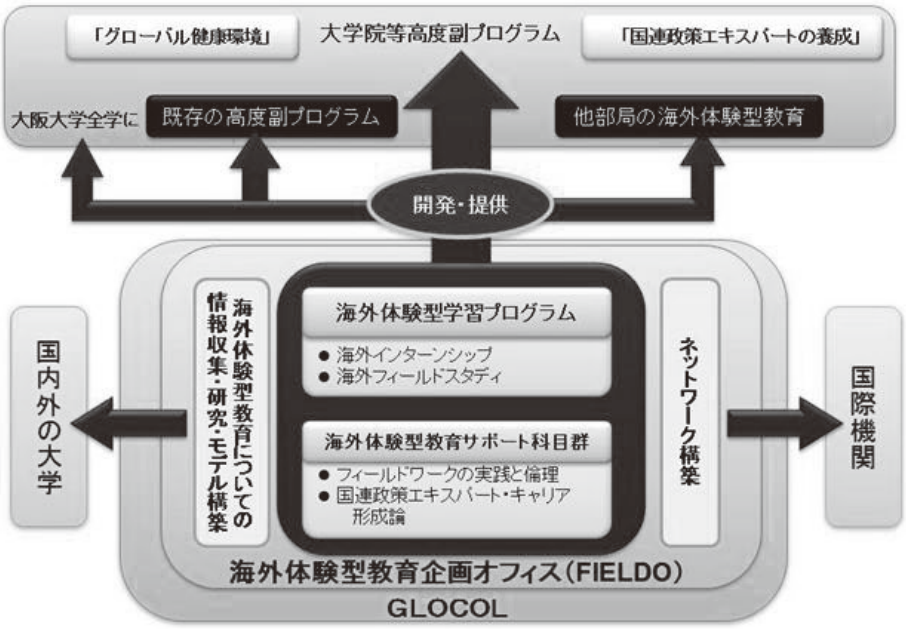
大阪大学全学の学部学生、大学院生を対象とした海外インターンシップや海外フィールドスタディなどを学内のさまざまな部局と協力しつつ企画する。また、そのために必要な調査研究を行う。海外体験型教育の企画にあたっては、GLOCOL で行われている研究や実践支援の経験と成果、および、そこで培われたネットワークを有効に活用する。

海外の大学や機関とのネットワーク形成

海外インターンシップと海外フィールドスタディの受け入れ先と、交渉、調整、提携をおこない、ネットワークを形成して、これを発展させる。

海外体験型教育プログラムの開発

海外インターンシップ、海外フィールドスタディなどの海外体験型教育プログラムをより安全で、現地との関係を考慮した形で行うため、海外リスク管理やフィールドワーク倫理に関する科目を整備し、提供する。また、グローバル健康環境や国連システムにおける実践的政策エキスパート養成など、海外体験型教育を有効に活用することのできる大学院等高度副プログラムを開発し提供する。



2）体制

① スタッフ

2012 年 4 月 19 日のスタッフ会議にて GLOCOL の新しい体制が承認され、現在は 4 名の教員および 1 名の事務スタッフで運営している（2015 年 3 月 31 日現在）。

特任准教授	敦賀和外
特任准教授	本庄かおり
特任助教	安藤由香里
特任助教	小河久志
特任事務職員	片山　歩

② オフィス

豊中キャンパス　全学教育総合棟 I-3 階に事務室を置き、2011 年 4 月より学生用自主学習スペース「STUDIO」を併設している。

3）活動

① 海外フィールドスタディ

本年度は科目の整理を行い「海外フィールドスタディ A」（大学院生対象、1 学期）、「海外フィールドスタディ B」（学部生・大学院生対象、2 学期）、「海外フィールドスタディ S」（大学院生対象、1 学期集中）を開講した。「海外フィールドスタディ A」では、インドネシア、バングラデシュにてフィールド実習を行った。また「海外フィールドスタディ B」では、ラオスにてフィールド実習を行った。さらに「海外フィールドスタディ S」ではタイでのフィールド実習を行った。

● 授業科目「海外フィールドスタディ」

FIELDO で開講していた大学院生対象の「海外フィールドスタディ」および学部生対象の「トランスカルチュラル・スタディ II」を統合整理し、「海外フィールドスタディ A」（大学院生対象、1 学期）、「海外フィールドスタディ B」（学部生・大学院生対象、2 学期）（各 2 単位）を開講した。この科目は、学生が海外フィールドスタディ実習に参加することにより、専門性を土台にしながら社会の諸問題に実践的に取り組む力を養うことを目的としている。履修学生は、海外フィールドスタディの準備から事後学習までの学習プロセスを主体的にデザインし実行することを通じ、調整力、コミュニケーション力、柔軟性といった、卒業後にプロフェッショナルとして自主的に活動し、他者や他機関の人びとと協働するために必要な資質を身につけることが期待されている。また、フィールド実習での実践的経験を通じ、多角的視点をもって社会を批判的に思考し行動する学生を育成することをめざしている。

この科目では、履修学生の課程に応じて到達目標を設定している。全学生共通の到達目標として、1）海外フィールドスタディの訪問先に関する情報を自ら収集し、課題を発見できるようになる、2）海外フィールドスタディの内容を検討、準備できるようになる、3）海外フィールドスタディ活動において、実践的な活動に積極的に参加することができる、4）海外において現地の人々や専門分野の異なる学生と経験を共有することにより、諸現象に対する多角的な視点を持ちながら協働できるようになるという 4 点を掲げ、さらに学部生には 5）海外フィールドスタディの意義を理解し、その経験をどのように活かすか思考できるようになる、また博士課程前期／修士課程の履修学生へは、5）海外での経験から学んだことをもとに、自身の専門分野における研究やその後のキャリアプランにどのように活かすか思考できるようになる、博士課程後期／博士課程の履修学生へは、5）海外での経験から学んだことをもとに、自身が持つ専門知識や技術を海外のさまざまな場で活かすことができるようになるという到達目標を定めた。

【事前学習】

各実習地域についての歴史や地域事情、テーマに関連する知識について学習を行った。また「フィールドワークの実践と倫理」においても現地での行動に関して留意する事項や、安全衛生情報についての指導を行った。

【現地実習】

担当教員の引率のもと、各実習地域とテーマに関連する機関などへの訪問、地域社会での聞き取り、施設見学などを行った。実習期間中は日々の学習活動のふり返りを参加者間で行い、また学習成果の発表の場を設けてプレゼンテーションなどを行った。

【事後学習】
事前学習と現地実習を踏まえ、報告書の作成や報告会などの場での発表を行い、学習を総括した。

● 授業科目「海外フィールドスタディ S」

「海外フィールドスタディ S」（1 単位）は、広い分野の学生に対応する汎用的プログラムである「海外フィールドスタディ」と同様の学習内容をある程度含みつつも、あらかじめ対象として想定する学生の専門分野や志向もコースごとに限定し、学生が実習後に実際の研究を展開するうえで、またキャリア形成のうえで必要と思われる特定のテーマに焦点を絞って実習を行うプログラムである。事前学習、現地実習、事後学習は「海外フィールドスタディ」と同様にプログラムごとに行った。

② 海外インターンシップ

● 授業科目

2011 年度より「海外インターンシップ I」（事前学習）および「海外インターンシップ II」（実習および事後学習）を開講している。今年度も「海外インターンシップ II」に（A）と（B）を設け、前期、後期にそれぞれ開講し、実習時期に応じていずれかを選択して履修することを可能とした。同科目の概要は以下のとおり。

【目的】
本科目は、学生が、国際機関や国際 NGO、研究所などの国際的な活動を行う組織において海外インターンシップを実施することを支援する。本科目の履修およびインターンシップに参加することにより、学生が自分の専門性を土台にしながら社会の諸問題に実践的に取り組む力を養い、将来のキャリアをデザインすることを志向することをめざす。

【目標】
(1)インターンシップの仕組みと意義、限界を理解し、自身のキャリアプランの中にどのように組み込むか思考できるようになる
(2)自身のインターンシップ受け入れ先に関する情報収集をし、行動プランを作成することができるようになる
(3)インターンシップに必要な準備を主体的に行えるようになる
(4)インターンシップを実施し実践的な経験をする（海外インターンシップ II を受講する学生）
(5)インターンシップの経験から学んだことをもとに、自身の専門分野の研究や将来のキャリアプランに新たな方向付けができるようになる（海外インターンシップ II を受講する学生）

【履修者】
12 名（経済学 1 名、人間科学 1 名、工学 3 名、基礎工 1 名、国際公共政策 6 名）

【講義内容】
4 月 15 日　オリエンテーション
4 月 22 日　履歴書・カバーレターの書き方
5 月 13 日　インターンシップ・セミナー
5 月 27 日　中間報告会、リスク管理
6 月 10 日　実務レッスン 1（note-taking）
7 月 1 日　実務レッスン 2（communication）
7 月 15 日　実務レッスン 3（communication）

● 海外インターンシップ助成

本助成は 2011 年度より実施しており、今年度も、インターンシップ期間が 1 か月以上の「海外インターンシップ助成」、1 か月未満の「海外プレ・インターンシップ助成」枠を設けて実施した。ただし予算の制約により、募集人数は大幅に減らさざるを得なかった。「海外プレ・インターンシップ助成」は 1 学期のみの募集となった。

【海外インターンシップ助成】
1. 助成額
1 か月以上 3 か月未満：20 万円

3 か月以上 6 か月未満：30 万円

2. 応募資格

1）大阪大学の大学院博士前期課程又は後期課程に在籍する学生（留学生を含む*）。

* 奨学金を受給している場合は、注意が必要なので事前に問い合わせること。

2）履修状況等が次のいずれかの者

・グローバルコラボレーション科目「海外インターンシップⅠ」を履修している者

・上記科目を 2013 年度までに履修済みの者

・上記科目の履修生以外の者であってもインターンシップの受入先が決定している者、もしくは交渉中の者*1*2

*1 応募時に既に実施している海外インターンシップへの助成は不可。

*2 応募者本人が、日本において GLOCOL 担当教員の事前指導を受け、保険加入及びその他の事務手続きを行うことができることを条件とする 。

3）応募にあたり、1 か月以上のインターンシップを行うことについて、事前に指導教員の了承が得られていること。

4）海外インターンシップ遂行に必要とされる英語もしくは当該国言語でのコミュニケーション能力を有する者。

5）当センターが指定する海外旅行傷害保険に加入すること。

6）学内の他の奨学金・助成金を受けていないこと。

7）同年度に下記 2. 海外プレ・インターンシップ助成を受給していないこと。

8）渡航先が、外務省が発表する危険情報における安全対策の 4 つのカテゴリーのうち、「渡航の是非を検討してください」、「渡航の延期をお勧めします」もしくは「退避を勧告します。渡航は延期してください」との指定がされている地域でないこと。

3. 2014 年度助成対象者

本年度の助成には 3 名が応募し、選考の結果 2 名（ともに工学）が助成対象となった。2 名の助成対象者のうち 1 名は受け入れ先が決まらなかったため助成辞退となり、最終的には 1 名のみが助成を受給しインターンシップを実施した。

4. 派遣先と研修期間

1）Qatar Petrochemical Company（カタール）　　2014 年 9 月 20 日～10 月 31 日

【海外プレ・インターンシップ助成】

1. 助成額

上限 15 万円（渡航先に応じて決定）

2. 応募資格

1）大阪大学の学部学生及び大学院生（留学生を含む*）。

* 奨学金を受給している場合は、注意が必要なので事前に問い合わせること。

2）履修状況等が次のいずれかの者

・グローバルコラボレーション科目「海外インターンシップⅠ」を履修している者

・上記科目を 2013 年度までに履修済みの者

・上記科目の履修生以外の者であってもインターンシップの受入先が決定している者、もしくは交渉中の者*1*2

*1 応募時に既に実施している海外インターンシップへの助成は不可。

*2 応募者本人が、日本において GLOCOL 担当教員の事前指導を受け、保険加入及びその他の事務手続きを行うことができることを条件とします 。

3）応募にあたり、1 か月未満のプレ・インターンシップ（短期プログラム）を行うことについて、事前に指導教員の了承が得られていること。

4）海外インターンシップ遂行に必要とされる英語もしくは当該国言語でのコミュニケーション能力を有する者。

5）当センターが指定する海外旅行傷害保険に加入すること。

6）学内の他の奨学金・助成金を受けていないこと。

7）同年度に上記 1. 海外インターンシップ助成を受給していないこと。

8）渡航先が、外務省が発表する「海外安全情報」レベルのうち、「渡航の是非を検討してください」以上の情報が発表されている地域でないこと。

3. 2014 年度助成対象者

本年度の助成には、5 名が応募し、選考の結果、4 名（外国語学部 1 名、法学部 1 名、経済学部 1 名、工学研究科 1 名）が助成対象となった。

4. 派遣先と研修期間

1）日米学生会議（アメリカ）	2014 年 8 月 2 日～24 日
2）OVAL Japan（韓国）	2014 年 8 月 9 日～18 日
3）ジャパンタンザニアツアーズ株式会社（タンザニア）	2014 年 8 月 19 日～9 月 13 日
4）LULI, Ecole Polytechnique（フランス）	2014 年 10 月 13 日～11 月 11 日

● GLOCOL 海外インターンシップ・プログラム

（大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」採択事業）

今年度より「海外研修プログラム助成金」へ海外インターンシップ事業（一つのプログラムにおいて、学生の渡航日程がそれぞれ異なる活動）も応募可能となったため、「GLOCOL 海外インターンシップ・プログラム」として 10 名分の助成を申請、採択された。

1. 助成額

各学生が提出する日程表、費用内訳に応じて、学生交流推進課が算出。

2. 応募資格

1）大阪大学の学部学生及び大学院生（外国人留学生を含む*）。

* ただし、国費外国人留学生は除く

2）インターンシップの受入先が決定している者もしくは交渉中の者[*1][*2]

[*1] 応募時に既に実施している海外インターンシップへの助成は不可。

[*2] 応募者本人が、日本において GLOCOL 担当教員の事前指導を受け、保険加入及びその他の事務手続きを行うことができることを条件とします 。

3）助成を希望する海外インターンシップの実施期間が、5 日以上 3 か月未満（移動日を除く）であること。

4）応募にあたり、3）の海外インターンシップを行うことについて、事前に指導教員の了承が得られていること。

5）海外インターンシップ遂行に必要とされる英語もしくは当該国言語でのコミュニケーション能力を有する者。

6）当センターが指定する海外旅行傷害保険に加入すること。

7）学内の他の奨学金・助成金を受けていないこと。

8）渡航先が、外務省が発表する危険情報における安全対策の 4 つのカテゴリーのうち、「渡航の是非を検討してください」、「渡航の延期をお勧めします」もしくは「退避を勧告します。渡航は延期してください」との指定がされている地域でないこと。

3. 2014 年度助成対象者

12 名が応募し、選考の結果 12 名全員（文学部 1 名、外国語学部 4 名、法学部 1 名、理学部 1 名、歯学部 1 名、法学研究科 2 名、高等司法研究科 2 名）が助成対象となった。なお 12 名のうち、4 名は GLOCOL が企画・実施した海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る」参加者であり、プログラムへの参加にあたり、同参加者である学部生への助言等インターンシップの要素を課して採用とした。また 7 名は同じく GLOCOL が University of California Education Abroad Program（UCEAP）大阪オフィス、大阪大学北米センターと連携して企画・実施した「カリフォルニア大学訪問プログラム」* 参加者として採用された。

* 2 月中旬から 3 月頭にかけての 1～2 週間、各参加学生がカリフォルニア大学（UC）10 キャンパスのうち、9 キャンパスを訪問して、UC から大阪大学への留学を促進するための PR 活動を行うと同時に、留学予定の学生たちと交流し、UC 生が大阪での生活に馴染めるようサポートを行った。

4. 派遣先と研修期間

1）特定非営利活動法人 JIPPO（フィリピン）	2015 年 2 月 4 日～3 月 24 日
2）カリフォルニア大学（アメリカ）	2015 年 2 月 17 日～23 日
3）カリフォルニア大学（アメリカ）	2015 年 2 月 17 日～3 月 1 日
4）カリフォルニア大学（アメリカ）	2015 年 2 月 19 日～28 日
5）カリフォルニア大学（アメリカ）	2015 年 2 月 19 日～3 月 4 日
6）カリフォルニア大学（アメリカ）	2015 年 2 月 21 日～3 月 2 日

7）カリフォルニア大学（アメリカ）　2015 年 2 月 22 日～3 月 2 日
8）カリフォルニア大学（アメリカ）　2015 年 2 月 22 日～3 月 2 日
9）～12）海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る」（オランダ）2015 年 3 月 14 日～23 日

③ WHO 神戸センターとの連携

WHO 健康開発総合研究センター（WHO 神戸センター）は、社会、経済、および環境の変化が及ぼす健康への影響、またそれらの保健政策への反映について研究を行っている。特に、保健行政や、緊急準備対応、都市部の健康（健康格差）を中心に、都市に公平な健康をもたらす政策立案に向けて、健康格差傾向の調査、および証拠の検証という側面から研究を推進している。

FIELDO では 2011 年度に WHO 神戸センターとの連携に関する会議を実施し、以下の事業において連携をしていくことを確認した。

1. インターンシップ派遣事業
2. WHO 神戸センターの見学スタディツアーの実施
3. セミナー、フォーラム、講義などで講師の相互派遣
4. 共同研究

上記に基づき本年度も以下の事業が実施された。

1）WHO 神戸センター訪問スタディツアー

WHO の活動と国際機関におけるキャリア・パスについて FIELDO では、世界保健機関（WHO）神戸センター（WKC）の協力のもと、WHO の活動とキャリア・パスについて学ぶセミナーを 2015 年 2 月 16 日に WKC を訪問し、現地で実施した。医学系研究科医学科・保健学科、医学部、外国語学部、法学部、生命機能研究科、情報科学研究科から 21 名が参加した。

セミナー：国際機関へのキャリア・パス
①WHO・WKC の概要
②WHO ならびに国際機関へのキャリア・パスについて
③WHO 神戸センターでのインターンシップについて
④WHO 神戸センターの活動
（健康危機管理、災害リスク管理：東日本大震災の健康・保健関連の回復に関する支援活動）
担当：世界保健医療人材連合　渉外情報官　野崎慎仁郎
WHO 神戸センター　コンサルタント　加古まゆみ
引率：敦賀和外、本庄かおり

2）WHO 神戸センターからグローバルコラボレーション科目：グローバル健康環境への講師派遣

WHO 神戸センターからテクニカル・オフィサー狩野恵美先生をグローバルコラボレーション科目「グローバル健康環境」の講師として派遣いただいた。

④ 高度副プログラム

● 高度副プログラム「グローバル健康環境」

近年、薬・食の安全性、新興・再興感染症や院内感染の問題、地球温暖化や大気・土壌・水質汚染といった地球規模での環境問題と、環境の変化が人間の心身の健康に及ぼす影響に関する懸念が高まっている。本プログラムは、貧困、経済格差などの世界的な経済問題、薬や食の安全性、新興・再興感染症の問題、地球温暖化、大気・土壌汚染などの地球規模の環境問題と変化が人間の心身にどのような影響を及ぼすのかを知り、その上でそれぞれの専門知識を活かしながら、その解決方法を自ら導くことのできる人材を育成することを目標として、2011 年度に開設された文理融合型高度副プログラムである。

地球規模での環境問題、グローバリゼーションによる社会環境・生活環境の変化等、人間の心身の健康に及ぼす影響に関する基礎的な知識を習得し、食環境、住環境、自然環境、社会環境を含めた環境の変化が人間の心身の健康に及ぼす影響を、グローバルな視点から具体的に考察することをねらいとした。

【実績】

健康が様々な要因の影響を受けていることは自明であり、現在世界で起きている環境問題・健康問題の解決には学際的なアプローチが不可欠である。そのため、本プログラムでは多様なバックグラウンドを持つ学生が集い、具体的に環境問題・健康問題の解決方法について議論することにより、お互いに「学び合い」ながら、思考を深めていくことを目的とした。本プログラムは必修科目「グローバル健康環境」と、25科目の選択必修科目、7科目の選択科目から構成され、8単位以上の履修を求めている。必修科目で、人間を取り巻く物質的・社会的環境とその健康影響に関して、基盤となる重要な知識を習得したうえで、受講生各々の興味に応じて選択必修科目を履修するように構成されている。選択必修科目には医学・保健学・薬学だけでなく、国際健康政策や国際協力に関するものから、環境工学、社会科学、国際公共政策学まで理系・文系の枠にとらわれず、幅広く履修できるように構成されている。

健康・環境という多様な要因の影響を受け、そして多様な影響を与える課題にとって、学際的なアプローチは必須である。参加する学生が、それぞれの専門性を基盤に多様な視点をもちながら意見を出しあうことで、課題をより多面的にそして立体的に捉えることできるようになると考える。本プログラムには、今年度、5 研究科（文学研究科、人間科学研究科、医学系研究科（医）、医学系研究科（保）、国際公共政策研究科）から、13 名の申請があった。

【参考】

プログラム名称	グローバル健康環境（Global Health Environment）		
プログラム実施部局	グローバルコラボレーションセンター		
連携部局	人間科学研究科、医学系研究科、薬学部、薬学研究科、工学研究科、 国際公共政策研究科		
修了要件単位数	8単位以上	履修対象者	学部5・6年生、修士、博士
標準履修期間	1～2 年	対象者制限の有無	無
履修資格・条件	資格や条件はありません。理系・文系を問わず全学からの参加を歓迎します。世界で起こっている健康問題・環境問題に対し積極的に取り組むことを目指す人、将来、国際機関でのキャリアを築くことを考えている人、また、健康問題や環境問題に関心がありグローバルな視点・学際的な視点を持ちたいと思っている学生にも向いたプログラムです。		
修了要件	本プログラムが指定する必修科目、選択必修科目、選択科目を合わせて 8 単位以上取得することとします。ただし、必修科目と選択必修科目で 6 単位以上取得してください。必修科目は、最初に履修してください。		

【講義内容】

・グローバル健康環境

4 月 10 日　講義の説明とオリエンテーション（GLOCOL 本庄かおり）
4 月 17 日　健康指標と社会的健康決定要因（GLOCOL 本庄かおり）
4 月 24 日　貧困病としての寄生虫病とマラリアワクチン開発（微生物研究所 堀井俊宏）
5 月 8 日　国際保健政策概観（東京女子医大 遠藤弘良）
5 月 15 日　途上国における母と子の健康（長崎大学国際健康開発研究科 松山章子）
5 月 22 日　発展途上国の環境と健康　パラオ（未来戦略機構　三田 貴）
5 月 29 日　グローバリゼーションと健康（WHO 神戸センター 狩野恵美）
6 月 12 日　地球環境と健康（薬学研究科　平田收正）
6 月 19 日　地球を救う植物バイオテクノロジー（薬学研究科　平田收正）
6 月 26 日　発展途上国の環境と健康　モンゴル（GLOCOL 思沁夫）
7 月 3 日　発展途上国の環境と健康　タイ・ベトナム（GLOCOL 住村欣範）
7 月 17 日　後悔にもいろいろあるけど：「何もしなかった」vs「やってしまった」
（FIELDO グローバル・エキスパート連続講座として開催　詳細は p.16）
（奥村順子　長崎大学熱帯医学研究所　国際保健学分野）

● 高度副プログラム「国連政策エキスパートの養成」

国連システムは、平和と安全、開発、人権の分野から、保健、環境まで多様な分野の専門機関も含め構成されており、ニューヨーク、ジュネーブ他の本部および全世界のフィールドで活動している。現在、国連への財政貢献に関し日本はアメリカに次いで第二位となっているが、その財政貢献に比較し国連で働く日本人職員の数が増えていないことがかねてから指摘されている。

国連では、多くの場合、経験を積んでいる専門家が即戦力として求められており、学生が卒業後直後に国連で働ける機会は非常に限られているが、大学時代はキャリアの方向性を定める重要な時期であり、関心分野の知識を深め、大学卒業後もその分野で実務経験を積むことによって、将来的に国連においてキャリアを得る可能性が高まる。

本プログラムは、将来的に国連をはじめとする国際公共セクターでのキャリアを志向する学生に対し、諸課題の基礎知識、実践的ノウハウおよび海外インターンシップの機会を提供し、理系・文系を問わない幅広い教養とグローバル化した世界の現実に対する深い理解を涵養するための教育を行い、将来的に国連をはじめ国際公共セクターにおいて専門家として活躍できる人材の養成を目的とする。

【実績】

2011 年度に開講された「国連政策エキスパートの養成」プログラムは、人間科学研究科、医学系研究科、薬学研究科、国際公共政策研究科、環境イノベーションデザインセンターの協力を得て、将来国際機関や NGO などで活躍する人材に分野横断的に座学および実践型の科目を提供している。

同プログラム開講にあたり、国際公共セクターにおけるキャリアについて学ぶ「国連政策エキスパート・キャリア形成論」を国際公共政策研究科と共同開発し、同プログラムの必修科目とした。そのほか公共政策、国際貿易、環境、安全保障、保健、教育などの分野の選択科目を提供するとともに、実践科目として FILEDO が実施する海外インターンシップおよび海外フィールドスタディに関する科目を組み込んだ。

本年度は昨年度同様 7 研究科から計 15 名の学生が申請した。他のプログラムの履修登録が減少したなかで履修者数を維持できたことは、本プログラムに対する関心を維持できたことの表れであり、評価できよう。2011 年に開設した「国連政策エキスパート・キャリア形成論」では、複数の研究科から 19 名*の学生が受講し、昨年度（12 名）より増加した。今年度は、予算の制約がありゲスト・スピーカーを招へいすることができなかったが、国際公共政策研究科教員と連携し、国連行政、政策立案、プロジェクト・マネジメントなど実践的な学びの機会を提供することができた。また、昨年同様「国連政策エキスパート・キャリア形成論」と「海外インターンシップ」（p.10 参照）の両科目を受講した学生が多く、座学から実

践への連続性のある学習が可能となり、国際公共セクターにおけるキャリアの第一歩となるインターンシップに学生を派遣することが実現できた。
＊ 同一科目である国際公共政策研究科開講「特殊講義（国連政策エキスパート・キャリア形成論）」の履修者数含む。

【講義内容】
4 月 14 日　オリエンテーション
4 月 21 日　講義：国連行政の概要と実務（国際公共政策研究科　蓮生准教授）
5 月 12 日　講義：国連のキャリア（敦賀特任准教授）
5 月 26 日　講義：国連による平和構築（敦賀特任准教授）
6 月 9 日　講義：国際金融機関の役割とキャリア（国際公共政策研究科　山田准教授）
6 月 30 日　ワークショップ：実務能力を身に付ける①（プロジェクト・マネジメント）
7 月 14 日　ワークショップ：実務能力を身に付ける②（プロジェクト・コンテスト）
7 月 28 日　まとめ：「自分のキャリア・パスを描く」

⑤ セミナーなど

・FIELDO グローバル・エキスパート連続講座

今年度も国内外において国際的活動の第一線で活躍されている実務者を招き、実践的な活動を学ぶことやさまざまなキャリア・パスを知ることを目的として開催した。そのうち 1 件は、外務省国際機関人事センターと共催で実施した「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」であり、7 つの国際機関から人事・採用担当者が来日し、国際機関で働くための実践的な解説・アドバイスを得た。

● GLOCOL セミナー（114）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（22）
後悔にもいろいろあるけど：「何もしなかった」vs「やってしまった」

【講演者】
奥村順子（長崎大学熱帯医学研究所エコヘルスユニット准教授）
【開催日・場所】
2014 年 7 月 17 日、医学部保健学科第 3 講義室（吹田キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
長崎大学熱帯医学研究所の奥村先生をお招きしグローバルヘルス分野におけるキャリア・パスについてご自身のご経験を含めてお話いただいた。病院、フィールド、研究所、大学とさまざまな場所で、薬剤師、ボランティア、JICA 専門員、研究者、大学教員...とさまざまな立場で仕事をされてきた奥村先生にしかお伺いすることの出来ない貴重なセミナーとなった。
※「グローバル健康環境」の授業を一般公開とした。

【講師紹介】
1956 年福岡県生まれ。1979 年福岡大学薬学部卒業後、同大学病院薬剤部にて 5 年間勤務。マラウィ、トンガなどで通算 5 年間ボランティアとして活動後、JICA ジュニア専門員となるも公衆衛生の重要性に目覚め、ミシガン大学公衆衛生大学院にて MPH、引き続き東京大学大学院にて博士号を取得。Center of Excellence in Disaster Management & Humanitarian Assistance リサーチフェロー、東京大学大学院助手、金沢大学医歯薬保健研究域准教授を経て現在にいたる。グローバルヘルスのフィールドで活動する傍ら、国内外における災害現場での活動経験も有する
【備考】
主催：GLOCOL

● GLOCOL セミナー（117）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（23）
国際機関合同アウトリーチ・ミッション

【開催日・場所】
2014 年 10 月 22 日、基礎工学国際棟シグマホール（豊中キャンパス）
【言語】
英語（通訳なし）
【概要】
7 つの国際機関から人事・採用担当者が来日し、国際機関で働くための実践的な解説・アドバイスを行い、参加者からの質問には人事・採用担当者が直接回答した。また個別に相談をうけるセッションも設けた。複数の国際機関に一度に出会うという貴重な機会となり、国際機関に強い関心を抱いたり、留学を予定している学部生や大学院生だけでなく、高校生や社会人の方にも参加いただいた。
【参加機関】
国連事務局人的資源管理部（UN secretariat OHRM）、国連開発計画（UNDP）、国連児童基金（UNICEF）、国連人口基金（UNFPA）、経済協力開発機構（OECD）、国際連合教育科学文化機関（UNESCO）、国連人道問題調整事務所（OCHA）
【備考】
共催：外務省国際機関人事センター、GLOCOL

● GLOCOL セミナー（122）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（24）
英語もダメ、大学も不合格だった私が、子育てしながら、国連職員へ

【講演者】
藤井まい（元：WHO 東南アジア地域事務所　ユニバーサルヘルスカレッジ（UHC）担当官）
【開催日・場所】
2015 年 2 月 13 日、医学部保健学科第 3 講義室（吹田キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
世界保健機関（WHO）本部での勤務経験もある藤井先生をお招きして、仕事、学業、育児についてご自身のご経験を含めて、お話いただいた。国連職員、3 児の母、ダブル修士、日本で教育を受けて英語力をいかに上げたかなど…さまざまな切り口でお話いただき、貴重なセミナーとなった。
＜当日の参加者の感想＞
・将来について考える中でパートナーとの問題など悩むこともありますが、直接的な答えではなくても何か大切なものをいただいた思いです。
・向上心をかきたてられるお話でした。
・学部卒業前にお話を聞くことで、就職・結婚・家庭を築くという人生のイメージしかなかったのが、選択肢を広くもってキャリア形成を考えていきたいと思えました。
・自分自身やりたいことに向かって動いている一方、周囲からの反対もあり悩んでいたところなので勇気をもらえ

ました。等身大のお話がすごく良かった。

・仕事、家庭、学業を両立するために「無理をしない」という考え方が参考になりました。国連の仕事が思いのほか短期間であることに驚きました。

【講師紹介】

福島県出身。琉球大学医学部保健学科卒業。大学卒業と同時に婚約、半年後に結婚。沖縄県で看護師をしながら、米軍基地内の夜間大学院（ミシガン州立大学院）に通学、修了。第 1 子出産後、夜勤ができず、看護師を退職。阪神淡路大震災の翌年より、兵庫県の保健所で保健師として勤務。その後、夫の海外転勤のため退職、マレーシアへ。マレーシアで 2 つ目の修士号取得へ向けて勉強し、修士課程 2 年目で第 2 子出産。マレーシアで主婦をしながら第 3 子も生まれ、子育てをする。その後 10 年程、保健アドバイザーとしてのボランティアや、JICA 健康管理員、大学教員等を経て、2005 年度、外務省主催の JPO 試験に合格。2007 年 1 月、世界保健機関（WHO)本部に派遣される。その後、WHO の正規職員として本部、東南アジア地域事務所(インド）にて勤務。仕事の他、学業と家事、育児などを行ってきた。修士号取得（ミシガン州立大学と東京大学)。2010 年博士号取得（東京大学)。3 児の母。Twitter: @MaiFujii

【備考】

主催：GLOCOL

・FIELDO ブラウンバッグランチ（BBL）セッション

昼休みを利用して、大阪大学教員などを囲む勉強会を開催した。

● FIELDO BBL セッション（13）
海外渡航時の健康管理について

【リソースパーソン】

大橋一友（医学系研究科保健学科教授）

【開催日・場所】

2014 年 7 月 17 日、テクノアライアンス棟 1F アライアンスホール（吹田キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

夏季休暇に、海外フィールドスタディや海外インターンシップ、留学、旅行など海外へ出かける際、日本とは違う慣れない環境の中でも、元気に充実した時間を過ごすために、自身の健康管理について学ぶ機会を設けた。本セッションでは、医師でもある医学系研究科保健学科の大橋教授より、病気の基本的な知識もふまえてお話しいただいた。

● FIELDO BBL セッション（14）
将来に活きるインターン・短期留学への挑戦

【リソースパーソン】

国際公共政策研究科博士前期課程 1 年

千坂知世：イギリス・British Council

工学研究科マテリアル生産科学専攻博士前期課程 1 年

田村直也：カタール・Qatar Petrochemical Company（IAESTE プログラム）

国際公共政策研究科博士前期課程 1 年
　　栗山智帆：イギリス・エセックス大学語学研修
国際公共政策研究科博士前期課程 1 年
　　加藤千春：日本・消費者庁

【開催日・場所】
2014 年 11 月 14 日、STUDIO（豊中キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
海外インターンシップ・短期留学に行きたいけど、ちょっと自信ないな、いったいどうやって探せば良いのだろう…の素朴な疑問に答えて、大阪大学の大学院生で、海外インターンシップ・短期留学の経験者が、自らの体験談を交えて紹介した。

● FIELDO BBL セッション（15）
語学力を活かして警察で働くとは

【リソースパーソン】
田島達也警部（大阪府警教養課 通訳センター 課長補佐）・通訳センター女性職員
【開催日・場所】
2014 年 12 月 4 日、STUDIO（豊中キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
これまでに経験した海外留学、在外日本国大使館での勤務など、語学との出会い、外国語を生かした警察の仕事を、自らの体験談を交えて紹介していただいた。

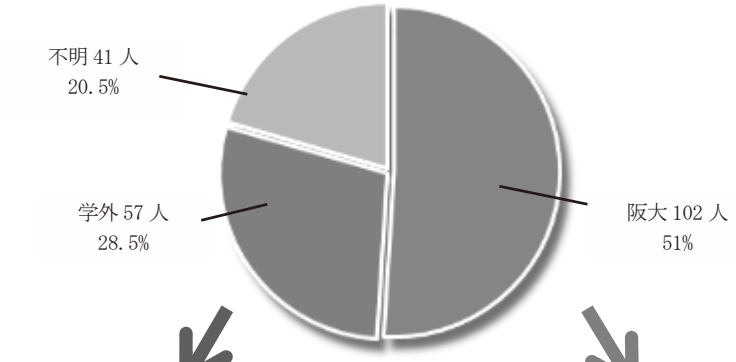
● FIELDO BBL セッション（16）
海外渡航時の健康管理について

【リソースパーソン】
大橋一友（医学系研究科保健学科教授）
【開催日・場所】
2015 年 1 月 14 日、STUDIO（豊中キャンパス）

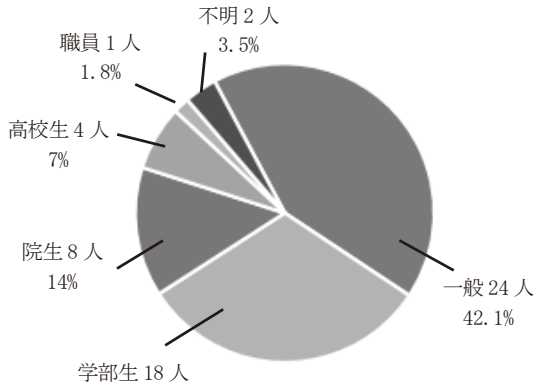
【言語】
日本語
【概要】
春季休暇に、海外フィールドスタディや海外インターンシップ、留学、旅行など海外へ出かける際、日本とは違う慣れない環境の中でも、元気に充実した時間を過ごすために、自身の健康管理について学ぶ機会を設けた。本セッションでは、医師でもある医学系研究科保健学科の大橋教授より、病気の基本的な知識もふまえてお話しいただいた。

2014 年度 FIELDO グローバル・エキスパート連続講座 参加者の所属内訳
【総計：総参加者数 200 人／3 回】

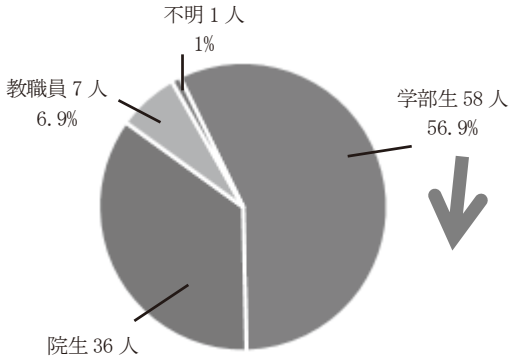
参加者数（200 人）内訳



学外参加者内訳



学内参加者内訳



大阪大学院生　参加者内訳（人）

保健学	国際公共政策	医学系	人間科学	理学	情報科学	薬学	経済学	言語文化	工学	生命機能	不明	計
8	6	6	4	3	2	2	1	1	1	1	1	36

大阪大学学部生　参加者内訳（人）

外国語学部	法学部	保健学	人間科学部	医学部	基礎工学部	歯学部	工学部	不明	計
19	14	11	6	2	2	2	1	1	58

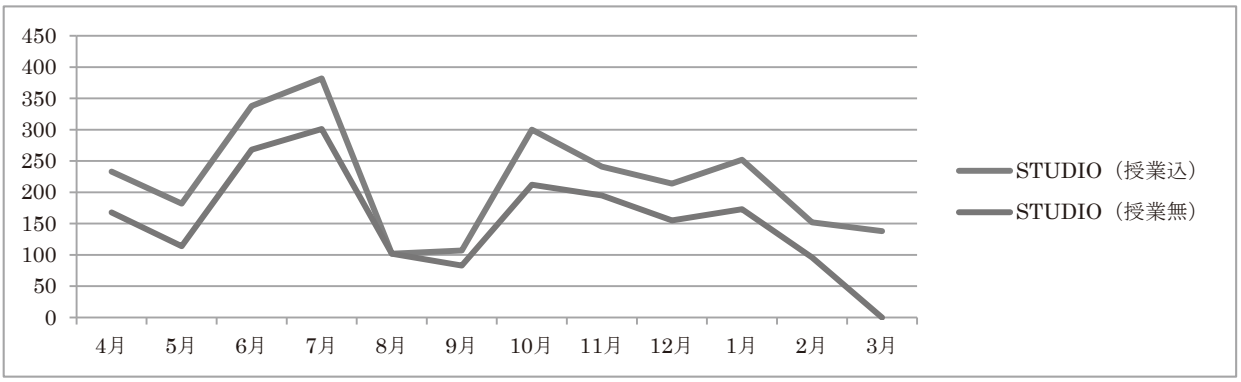
⑥ FIELDO 学生用自主学習スペース（STUDIO）

2011 年 4 月より、全学教育総合棟 I-3 階の FIELDO オフィス内に、海外体験型学習のための学生用自主学習スペース「STUDIO」を開設している。このスペースは、学生が以下の目的で利用するためのものである。

・海外インターンシップ、海外フィールドスタディに関する図書閲覧
・インターネットでの情報検索
・インターンシップ、フィールドスタディ経験者、教職員による相談
・海外インターンシップ、海外フィールドスタディの企画立案に関する情報収集や研究
・海外インターンシップ、海外フィールドスタディの事前事後学習、グループ学習

2014 年度の利用状況：利用者数月平均は、昨年度とほぼ同数であり、引き続き STUDIO が活用されいてる。

2014 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	平均（人）
STUDIO（授業込）	233	182	338	382	102	107	300	241	214	252	152	138	220
STUDIO（授業無）	168	114	268	301	102	83	212	195	155	173	96	0	155



⑦ 学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究（課題番号 : 26590209、補助事業期間 : 2014～2015 年度）を得て、学生海外渡航時のリスク管理についての研究を進めた。危機管理体制に関するアンケート調査を、2013 年度に日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（短期派遣）に採択された 555 プログラムを対象に行い、383 プログラムより回答を得て分析を進めた。また学生に対するリスク予防教育法の開発の一環として、GLOCOL およびリーディング大学院にて行った海外フィールドスタディ科目において、リスク管理に関する事前学習を行うとともに、その効果を図るための自己効力感に注目した質問紙を作成して、事前学習前後に学生へ配付、記入させ、その結果を分析した。また、7 月 29 日には教職員が参加して危機管理シミュレーションを行い、緊急時対応の課題を挙げるとともに、その改善策を検討した（詳細は pp.40-41）。シミュレーションから抽出された改善策をふまえ、緊急時対応モデルマニュアルも作成した。さらに、大学本部、他部局教職員との情報交換の場を設けるとともに、学外でのポスター発表を行った。最終年度に向けて、各種アンケート調査のさらなる分析、議論を進めている。

2．海外フィールドスタディ・プログラム一覧

2014 年度、GLOCOL では計 8 本の海外フィールドスタディ・プログラムを実施した。内訳としては、科目「海外フィールドスタディ A」として実施したプログラムが 2 つ、「海外フィールドスタディ B」として実施したプログラムが 1 つ、「海外フィールドスタディ S」として実施したプログラムが 1 つ、その他科目とは関係なく実施したプログラムが 4 つ（すべて派遣）である。また、この 8 本のプログラムでは、さまざまな助成プログラムを活用して、派遣・受入学生に渡航費の一部補助を行った。その一覧は以下のとおりである。

プログラム名	「科目名」/ 科目外	助成金財源
インドネシア 「コミュニティ防災ー命を守るためのつながりを学ぶー」	「海外フィールドスタディ A」	日本学生支援機構「2014 年度海外留学支援制度（短期派遣）」 GLOCOL 運営費交付金
バングラデシュ 「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」	「海外フィールドスタディ A」	大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」
ラオス 「開発と社会・環境変化」	「海外フィールドスタディ B」	大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」 GLOCOL 運営費交付金
タイ 「生物資源と環境」*1	「海外フィールドスタディ S」	日本学生支援機構「2014 年度海外留学支援制度（短期派遣）」 大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」
イタリア 「国際機関研修プログラム」*2	科目外	大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」
東ティモール 「東ティモールにおける適正技術の可能性」	科目外	GLOCOL 運営費交付金
オランダ 「国際司法・平和の現場を知る」	科目外	大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」 GLOCOL 運営費交付金
中国 「観光化と地域の維持性」	科目外	大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」 GLOCOL 運営費交付金

*1 留学生の受け入れも含むプログラムである。受入については、日本学生支援機構「2014 年度海外留学支援制度（短期派遣）」にて 11 名を受入れ、残り 6 名は GLOCOL 外の予算にて受け入れた。

*2 引率教員無しで学生のみが渡航するプログラムであった。

● **インドネシア**

海外フィールドスタディ A「コミュニティ防災ー命を守るためのつながりを学ぶ」

派遣：2014 年 8 月 31 日～9 月 9 日　参加学生：4 名

本コースでは、インドネシアを訪問し、ガジャマダ大学およびインドネシア現地 NGO の COMBINE Resource Institution（COMBINE）と連携してプログラムを実施した。コミュニティラジオを活用した情報提供／共有、ファーストエイドやメンタルヘルスケア、子どもたちの防災／環境教育、復興過程のコミュニティビジネス、記憶を語り継ぐ活動など、地域共生のためのコミュニティ防災活動を、多くの自然災害の経験から先進的な取り組みを進めているインドネシア／ジョグジャカルタ周辺地域から学んだ。またその過程を通して、グローバルな視点から諸課題をとらえる姿勢を養うとともに、大学、地域コミュニティ、非政府団体（NGO）との協働により諸課題に取り組む人材の育成につながった。

● **バングラデシュ**

海外フィールドスタディ A「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」

派遣：2014 年 9 月 3 日～13 日　参加学生：7 名

本コースは、バングラデシュの農村において、農作業の負担を軽減し、所得向上に貢献するプロダクトの考案、改良、普及を進めるものであった。そのために、住民への聞き取り調査や研究機関・NGO からの意見聴収などを行い、途上国が抱える貧困と開発の問題について参加学生が深く理解できるようにプログラムをデザインした。現地では国立研究機関である Bangladesh Rice Research Institute（BRRI：バングラデシュ稲作研究所）の協力を得た。BRRI は参加学生たちにバングラデシュの稲作、BRRI による農業機械製作の現状についての講義を行い、また学生が考案した、適正技術による農機具（籾乾燥機）の制作と試行も BRRI の工房で行った。

● **ラオス**

海外フィールドスタディ B「開発と社会・環境変化」

派遣：2015 年 2 月 8 日～17 日　参加学生：8 名

本コースは、急速な開発の進展にともない近年、人々の生活やそれを取り巻く自然環境が大きく変化しているラオスで実施した。その目的は、ラオスをフィールドに、学生が自身の専門分野を通して、開発というグローバルな現象がローカルな社会や自然環境に与える影響の実態を把握するとともに、開発をめぐる課題やニーズを探求することであった。現地ではまず、開発をする側に関する調査活動として、ラオスで開発プロジェクトを実施する世界銀行と JICA の現地事務所、現地日系企業を訪問して、関係者からレクチャーを受け、質疑応答を行った。また、開発をされる側に関する調査活動として、JICA の開発プロジェクトの対象地であるサラワン県ラオガム郡にあるカトゥ族村落で、村民宅にホームステイしながら、各自が設定した調査テーマにもとづき、関係者へのインタビューや参与観察を行った。以上の調査活動のまとめとして成果報告会を開催し、JICA の専門家をはじめとする様々な背景を持つ方々から、発表コメントや質問をいただき、議論を深めた。

● **タイ**

海外フィールドスタディ S「生物資源と環境」

派遣：2014 年 8 月 4 日～9 月 8 日　参加学生：16 名

受入：2014 年 8 月 29 日～12 月 29 日　参加学生：17 名

このプログラムは、GLOCOL と大阪大学生物工学国際交流センター（ICBiotech）が共同し、タイの複数の大学・教育機関（マヒドン大学／モンクット王工科大学トンブリ校／カセサート大学／チュラロンコン大学）と連携して構築した海外フィールドスタディ・プログラムである。「生物資源と環境」に関連するテーマについて学ぶ日本およびタイの博士前期・後期課程の学生を対象として、フィールドワークとラボワークを含む実習を中心としたプログラムの中で、それぞれの実習の場における高度な技能を身につけ、日本と東南アジアの交流先国の間の関係性について理解することを目的として行った。

大阪大学の学生は、8 月から 9 月にかけてタイを訪問し、1 か月以上滞在して、フィールドスタディを行った。到着後、カセサート大学で共通の研修を受けた後、4 つの大学に数名ずつ分散して、自分自身が設定した研究テーマに従って研究

を行った。研究はラボワークを中心として、設定したテーマに従って、現地大学の受け入れ教員が指導を行った。研究成果については、研修終了前に現地で報告会を開催し、英語でプレゼンテーションを行った。また、ラボでは、タイ人の教員や学生と英語でコミュニケーションをとることにより、コミュニケーション能力と国際的感覚を涵養した。

一方、タイの学生は、2014 年 8 月末以降大阪大学を訪問し、生物工学国際交流センターを中心としたラボでのラボワークとフィールドスタディを約 1〜2 か月間行った。この過程で、それぞれのテーマについて、専門的知見や技術について能力の向上を図るとともに、日本とタイとの違いや国際的な視点からの「生物資源と環境」について理解を深めた。また、タイの学生との交流は、大阪大学の学生が主体となって行うことにより、学生同士で国際的な感覚を養い、大阪大学の学生がタイから帰国した後も、派遣先大学の学生との交流を深めることができた。

上記により、参加学生は、生物資源と環境に関してグローバルな視点から理解を行うことができたとともに、プログラムを通じて相互交流を行い、当該分野における国際協力の必要性について認識を深めた。

● イタリア

海外フィールドスタディ「国際機関研修プログラム」

派遣：2014 年 11 月 22 日〜12 月 4 日　参加学生：6 名

本プログラムでは、プログラムを通じて「国際機関に関する理解を深め、食糧農業問題などの地球規模課題について幅広く学び、グローバルな課題解決に主体的に取り組むことのできる人材を涵養すること」を目的とした。引率なしで学生のみが渡航し、模擬国連世界大会に参加し世界各国の大学生と議論を行った。学生たちは各分野の専門知識だけでなく、多国間会議を模した形で議論することにより、語学力の必要性だけでなく、積極的なファシリテーションによって議論を主導することの大切さも学んだ。また、模擬国連世界会議に参加後、FAO の職員である小野俊明氏他を訪問し、模擬国連での成果を報告するとともに、FAO の扱っている世界の食糧問題についてブリーフィングを得るとともに、意見交換を行った。加えて、小野氏ほかから、国連ほか国際機関でのキャリア・パスについて助言を得た。

● 東ティモール

海外フィールドスタディ「東ティモールにおける適正技術の可能性」

派遣：2015 年 3 月 2 日〜11 日　参加学生：2 名

本プログラムでは、大阪大学における適正技術教育研究の一環として、See-D コンテスト事務局の協力を得て東ティモールを訪問し、適正技術普及の現状を検証し、今後の技術開発・普及の発展可能性、研究課題の抽出、東ティモール住民へのインパクト評価手法の開発を目的とした。現地では、東ティモール大学工学部のマーフィム・グイマライス教授の協力を得て、東部のピティレティ村を訪問した。参加学生たちはホームステイを通じて地元住民の生活を観察する機会を得た。その他 NGO やコミュニティラーニングセンター（CLC）、専門学校を視察し、適性技術の普及に向けた課題を考察し、今後の継続的な関与について議論を重ねた。東ティモールからの帰途、インドネシア・バリ島にある NPO 法人コペルニクの本部を訪問し、東ティモールでの活動報告を行うとともに、適性技術普及に関する意見交換を行った。

● オランダ

海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る」

派遣：2015 年 3 月 14 日〜23 日　参加学生：8 名

本プログラムでは、旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所（ICTY）、国際刑事裁判所（ICC）、国際司法裁判所（ICJ）、常設仲裁裁判所（PCA）、欧州安全保障協力機構少数民族高等弁務官事務所（OSCE/HCNM）等、国際司法・紛争解決の分野で重要な取り組みを進めているオランダのハーグを中心として各機関を訪問し、国際司法の現場について深く学ぶとともに、大阪大学の協定校であるグローニンゲン大学で国際刑事司法・平和についての講義を受講し、現地の法学生との交流をとおして、国際的な紛争の解決手段としての生の司法について学んだ。学部 1 年生から高等司法研究科の学生まで参加者の属性は幅広かったが、各人が得意分野を発揮し、得意でない分野を相互補完し合い学びの効果を上げていた。

● **中国**

「観光化と地域の維持性」

派遣：2015 年 3 月 22 日〜31 日　参加学生：7 名

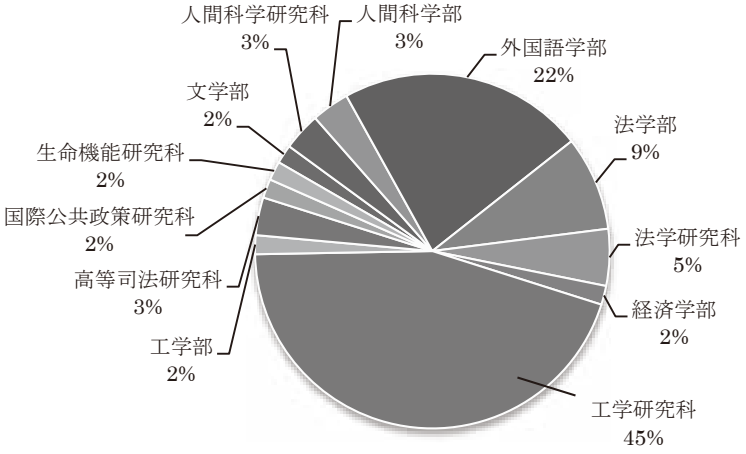
本プログラムでは、世界的にも有名な観光地の一つであり、かつ世界でも例をみない、人間と自然が作り上げた巨大な持続的なシステムをもつハニ棚田を訪問し、これらの地域的特徴から、自然環境を全体としてとらえる方法論および分析手法を学ぶこと、観光化によって地域が直面しているさまざまな環境問題を学際的・国際的に考えること、さらに、考え方をまとめる学際的方法を学習することを目的とした。事前学習では、コミュニケーションやディスカッション手法を学び、またそれぞれの専門性と関心に沿って課題を具体化した。現地実習では、紅河県および元陽県にて調査を行い、また紅河学院大学にて、ハニ族の文化に詳しい現地の専門家の指導を得た。さらに、現地の教員の支援を得て、昆明市にある藤沢友誼会館で、現地の学生と交流し、意見交換を行った。

2014 年度海外体験型教育プログラム 実施関連データ

海外フィールドスタディ参加者内訳

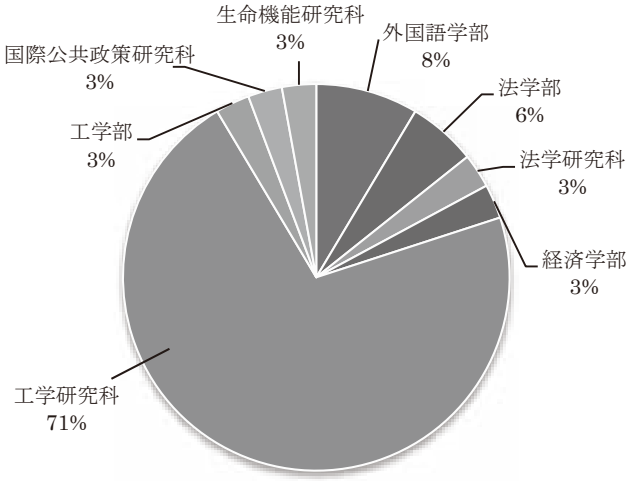
【全体（科目・科目外含む）】

文学部	1
人間科学研究科	2
人間科学部	2
外国語学部	13
法学部	5
法学研究科	3
経済学部	1
工学研究科	26
工学部	1
高等司法研究科	2
国際公共政策研究科	1
生命機能研究科	1
合計	58



【科目のみ】

外国語学部	3
法学部	2
法学研究科	1
経済学部	1
工学研究科	25
工学部	1
国際公共政策研究科	1
生命機能研究科	1
合計	35

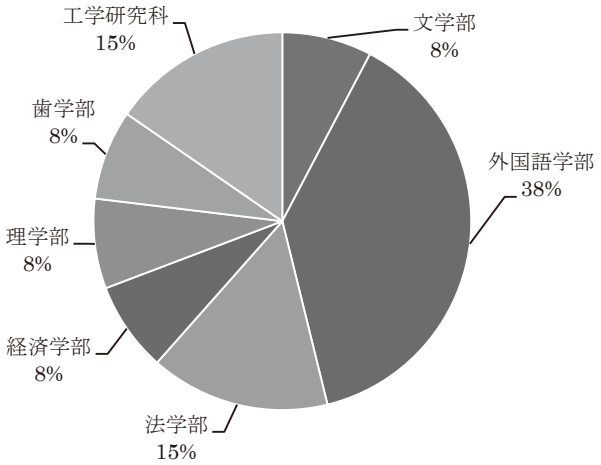


海外インターンシップ参加者内訳

【全体（海外インターンシップ／海外プレ・インターンシップ）】

文学部	1
外国語学部	5
法学部	2
経済学部	1
理学部	1
歯学部	1
工学研究科	2
合計	13

※オランダ 4 名除く



助成財源内訳

※未来基金：大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム等助成」

【海外フィールドスタディ】

	派遣人数	助成額	助成額財源の内訳			派遣先
			GLOCOL 運営費交付金	JASSO 留学生交流支援制度	未来基金	
授業科目での実施	35	3,020,000	422,000	1,820,000	778,000	インドネシア、バングラデシュ、ラオス、タイ
授業科目外での実施	23	1,150,000	670,000	0	480,000	イタリア、東ティモール、オランダ、中国
計	58	4,170,000	1,092,000	1,820,000	1,258,000	

【海外インターンシップ】

	人数	助成額	助成額財源の内訳			派遣先
			GLOCOL 運営費交付金	JASSO 留学生交流支援制度	未来基金	
海外インターンシップ（1 ヶ月以上）	1	200,000	200,000	0	0	カタール
海外プレ・インターンシップ（1 ヶ月未満）	4	456,660	456,660	0	0	アメリカ、韓国、タンザニア、フランス
海外インターンシップ・プログラム（未来基金）	12	801,000	0	0	801,000	フィリピン、アメリカ、オランダ
計	17	1,457,660	656,660	0	801,000	

3．GLOCOL 提供 大学院等高度副プログラム

今日、大学には、多様化する国際社会においてリーダーシップを発揮することのできるプロフェッショナルの育成が求められている。そうした人材の育成には、各学部、研究科での専門教育とともに、それらを異なる専門性と結びつけ、実践的な課題に即して深める座標軸が必要である。GLOCOL では、大阪大学の複数の研究科との連携により、これまで 8 つの高度副プログラムを開発することで、全学の大学院生、5、6 年次の学部学生にこうした座標軸を提供してきた。

その歴史をひも解けば、2009 年度から、「グローバル共生」「人間の安全保障・社会開発」「司法通訳翻訳論」の 3 つの高度副プログラムの試行を行い、2010 度には、これらの 3 つのプログラムを正式に実施するとともに、新たに「現代中国研究」が加わった。また、同年度より「人間の安全保障・社会開発」は、「人間の安全保障と開発」に名称を改めた。そして 2011 年度には、「医療通訳」「グローバル健康環境」「国連政策エキスパートの養成」の 3 つの高度副プログラム、さらに 2013 年度には、「東アジアの地域環境」が新たに始まった。

GLOCOL の高度副プログラムは、GLOCOL が独自に提供するグローバルコラボレーション（GLOCOL）科目をコアとし、多数の部局との連携のもとに開発、実施されている（プログラムごとの連携部局については、p.28 を参照）。また GLOCOL 科目は、必修科目や選択科目として、他の高度副プログラム、副専攻にも提供されている。

これまでにプログラムを受講申請した学生は、680 人を越え、修了した学生の数も 229 人に達している。またプログラムの受講申請をしている学生の所属も、多様なものになっており、科目の配置だけでなく、学生の構成の面でも分野を横断した教育が実現されている（下記の表を参照）。

大学院等高度副プログラム申請者数及び修了者数（2014 年度までの累計）

プログラム名	受講対象者	課程		文学	人間科学	法学	経済学	理学	医学系（医）	医学系（保）	歯学	薬学	工学	基礎工学	言語文化	国際公共政策	情報科学	生命機能	高等司法	連合小児	小計	合計	※26年度
グローバル共生	B5.6 M・D	M	申請者	6	43	1	3	2	4	9			10	1	24	7	2	1			113	(128) 39	(11) 9
			修了者	2	15		1	1	1	2			1		12						35		
		D	申請者	1	5		1		1						5			1			15		
			修了者		2										1			1			4		
人間の安全保障と開発（旧人間の安全保障・社会開発）	B5.6 M・D	M	申請者		45	2	6	2	7	7		4	17	3	6	18	4	1			122	(138) 49	(12) 4
			修了者		29		3		2	3			1			5		1			44		
		D	申請者		5		1	2	3	2			1		1	1					16		
			修了者		2					1			1		1						5		
司法通訳翻訳（旧司法通訳翻訳論）	B5.6 M・D	M	申請者	4	33	24	1		1			1		1	44	5					114	(142) 54	(8) 10
			修了者	2	16	7						1			18	1					45		
		D	申請者		9	2			1						13	3					28		
			修了者		2	2									5						9		
現代中国研究	M・D	M	申請者	8	18	9	11	1		1			3	1	12	4					68	(74) 17	(15) 2
			修了者	3	8	1	1							1	2						16		
		D	申請者		1		1					1			3						6		
			修了者												1						1		
国連政策エキスパートの養成	M・D	M	申請者	2	11	1	7		3				6	1	2	27	2	2			64	(73) 19	(15) 3
			修了者		1		3		1						1	10	2				18		
		D	申請者				1		2				1		1	4					9		
			修了者										1								1		
グローバル健康環境	B5.6 M・D	M	申請者	1	16	1			13	19		5	3			5		1			64	(69) 33	(13) 12
			修了者		7				10	11		2	3								33		
		D	申請者						4						1						5		
			修了者																		0		
医療通訳 ※平成24年度までの数値（平成25年度からは社会福祉へ移管）	M・D	M	申請者	1	11		1		2	11				1	15						42	(53) 16	他部局
			修了者	1	5				2	5					3						16		
		D	申請者		3				2	1					4	1					11		
			修了者																		0		
東アジアの地域環境	B5.6 M・D	M	申請者	1	3								3			1					8	(10) 2	(5) 2
			修了者										2								2		
		D	申請者				1						1								2		
			修了者																		0		
合計		B	申請者						0		0	0									0	(666) 229	(79) 42
			修了者						0		0	0									0		
		M	申請者	23	180	38	29	5	30	47	0	10	42	8	103	67	8	5	0	0	595		
			修了者	8	81	8	8	1	16	21	0	3	7	1	36	16	2	1	0	0	209		
		D	申請者	1	24	2	5	2	13	3	0	1	3	0	28	9	0	1	0	0	92		
			修了者	0	6	2	0	0	0	1	0	0	2	0	8	0	0	1	0	0	20		
		計	申請者	24	204	40	34	7	43	50	0	11	45	8	131	76	8	6	0	0	687		
			修了者	8	87	10	8	1	16	22	0	3	9	1	44	16	2	2	0	0	229		

B･･･医学部、歯学部、薬学部（6年制課程）の5･6年次
M･･･博士前期課程、修士課程、生命機能研究科博士課程1･2年次、法科大学院の課程
D･･･博士後期課程、博士課程、生命機能研究科博士課程3年次以上

2014 年度　GLOCOL 大学院等高度副プログラムへの科目提供部局

	グローバル共生	人間の安全保障と開発	司法通訳翻訳	現代中国研究	グローバル健康環境	国連政策エキスパートの養成	東アジアの地域環境
人間科学研	19	10（1）	5（2）	8	1	4	1
人間科学部		5					
法学研	2（2）		5	4			
法学部			6				
経済研		2		2			2
医学系研		2（1）			7（1）	1	
薬学研		2			5（1）	1	1
薬学部					3		
工学研		2			2		1
言文研	8（4）		18（12）	2			
OSIPP	7（1）	3	1	2	2	10（1）	
CSCD	5	1				1	
全学教育		1					
計	41（7）	28（2）	35（14）	18	20（2）	17（1）	5

*（　）は外数で 2014 年度不開講科目を示す。

大阪大学の特色ある教育プログラムの一つとして、GLOCOL の高度副プログラムは、一定の成果をあげている。2011 年度に提供を開始した「医療通訳」は、2013 年度に人間科学研究科、2014 年度には医学系研究科に移管され、さらに充実したプログラムとなっている。GLOCOL の存続が不可能となった場合、今後 2 年の間に GLOCOL が育てた各プログラムは、順次、他部局への移管や、廃止の検討をせざるを得ない。たとえそうなったとしても、これまでに 7 つのプログラムを通して GLOCOL が全学に提供してきた機能が継承され、大阪大学にしかできないグローバル人材の育成に資するよう努めていきたいと考えている。

1）「グローバル共生」

「グローバル共生」プログラムは市民や何らかの専門的知性や技能をもった人たちが、社会という現場でさまざまな利害を超えて協働し、グローバル共生社会のデザインを描くための理論と実践方法について学ぶプログラムである。参加型・対話型・現場でのトレーニング型（OJT）などの先進的な教育手法を通して、対話と協働の重要性について、身体と感覚を働かせながら学ぶことを主眼としている。高邁な理念や理想の学習だけでなく、現実の行動原理に結びつき、具体的な成果を生むための一歩を踏み出す学生を後押しするのが本プログラムの目的である。

2009 年に設置された本プログラム（初年度は試行）では、必修のコア科目である「グローバルコラボレーションの理論と実践」が、現代社会を生きる上での心構えを考えさせる基礎的な科目として、多くの高度副プログラムの選択科目として採用され、GLOCOL の看板科目の一つとなりつつある。また「多言語共生社会演習」では、「やさしい日本語」の概念に関する基礎的な学習に加え、2012 年度からはより応用的、実践的側面を強化し、地方自治体の外国人向け「暮らしのガイド」の作成を想定した実習を行っている。今後は、非日本語母語話者による「やさしい日本語」を用いたコミュニケーションをも視野に入れ、演習の充実を図っていこうとしている。

「グローバル共生実習演習」では、グローバル共生に関わる医療現場や保健現場、教育現場等におけるオンサイト教育を実施し、教育的な効果のみならず、実践的な面でも大きな成果をあげている。今年度は、5 研究科から 11 人の学生が、本プログラムの申請を行った。

本プログラムは、一大学の教育プログラムとしての段階から、大学を起点とした実践活動を展望する段階に達したと言える。

今後は、本プログラムを Community Extension Research の一環として位置づけ、学部学生、大学院生に加え、本学の卒業生等の社会人との連携を図り、「市民としての社会的責任」という本プログラムがめざす方向性の浸透をすすめていきたい。

２）「人間の安全保障と開発」

「人間の安全保障と開発」プログラムは、学生各々の専門知識を生かしながら、紛争や貧困、そしてそれらに付随するさまざまな問題の解決に、能動的に関わることのできる人材の育成を目的としている。開発や援助の舞台で求められる人材は、医療・保健、環境、土木や建築、エネルギー、法制度、教育など、多様であるが、各々の専門性に開発学の視点を加えることで、広い視野をもって問題を読み解き、解決に結びつけることができる能力を身につけることが本プログラムのねらいである。

本プログラムは、2 科目の選択必修科目と、38 の選択科目から構成され、8 単位以上の修得を求めている。選択必修科目は、「Theory and Practice of Human Security and Development」と「特殊講義（紛争研究概論）」の 2 科目である。

選択科目は、課題別科目群、地域言語科目群、フィールド実践・研究推進・評価科目群に分けられる。課題別科目群（29 科目）では、開発と人間の安全保障が幅の広いアプローチを必要とすることから、文系・理系から多くの選択科目を用意し、学生各々が専門性と興味にあう科目を履修できるようにした。

また、フィールドでの実践活動の手法を習得し、インターンシップやボランティアの経験のなかで使ってみることも重要であり、フィールド実践・研究推進・評価科目群では、このような内容のものを 7 科目用意した。

本プログラムのもう一つの特徴は、英語で提供されている（あるいは、履修可能な）科目だけでも、プログラムの要件を満たし、修了できるように組まれている点である。開発・援助の舞台で必要な英語の能力を伸ばすことができると同時に、留学生も履修しやすくなっており、授業もさまざまな学生が違った視点を提供することで、活発に意見交換ができるようになった。

本プログラムには、7 研究科から、今年度新たに 12 名の登録があり、継続の登録者を含む総登録者数は 7 研究科から 29 名となっている。

本プログラムを履修した学生からは、「自分の専門分野が、実際に地域や社会の中の問題とどのように関連しているかを考えるよい機会であった」といった理系の学生からの感想や、「さまざまな国からの留学生や研究科の人、異なったバックグラウンドをもつ人たちの意見を聞けて、たいへん刺激になった」という感想が寄せられた。

選択必修科目授業内容：

「Theory and Practice of Human Security and Development」は、開発・援助に携わっていくには、多くの場合、英語の能力が必要とされることに鑑み、すべての授業が英語で行われ、文献や課題等も英語でこなすことが求められた。本科目は、開発学の理論と開発援助のなかでの主要な課題（ジェンダー、参加型開発、環境、グッドガバナンスなど）について、講義とディスカッション、文献の購読や課題に取り組むことによって、理解を深めることを目的とした。

「特殊講義（紛争研究概論）」は、紛争分析、紛争解決、紛争後平和構築といった、紛争の各局面に関する研究の全体像を理解することを目的とした。紛争の研究は一つの体系的分野というよりも、政治学、歴史学、社会学、人類学、地域研究など複数のアプローチが学際的に行われている分野である分野の特性を理解し、同時に、国際社会のさまざまなアクター（国際機関・政府・市民社会等）が紛争の解決・予防に取り組んでいることも学んだ。

3）「司法通訳翻訳」

グローバル化の時代にあって、日本にも多くの外国人が来日・在住するようになっている。それに伴い、日本語を十分に解しない外国人が、刑事・民事・家事事件に関わるケースや、出入国管理や難民認定での手続などに臨む事案が格段に増えており、司法通訳翻訳の重要性が増している。

司法通訳翻訳とは、法廷での審理、警察による捜査、弁護士による接見など、さまざまな司法ないしは行政機関や団体の実務場面で必要とされる通訳や翻訳の総称である。本プログラムは、法学部と外国学部を併せ持つ大阪大学としての強みを生かし、高度職業人としての司法通訳翻訳人の養成を主眼とするものである。特に、法律的手続、司法通訳翻訳人の役割や行動基準、コミュニケーションの 3 つに関する知識の習得や、スキルの向上の機会を提供し、また、司法通訳翻訳の在り方について考察する場を与えようとするものである。

カリキュラムとしては、実務通訳翻訳の基礎理論に関する科目群（A）、司法領域の実務や手続に関する科目群（B）、そして特定言語組合せによる通訳翻訳実習の 3 つの科目群（C）の中から、各自の必要と関心に合わせて履修することができるようになっている。また、専門的な通訳翻訳の訓練を受ける機会は限られているため、本プログラムでは、プログラムの構成科目以外にも、受講生が法廷で実際の通訳業務から学ぶ機会を提供している。具体的には、大阪地方裁判所の協力を得て、要通訳事件の日程の案内を作成し、本プログラムを履修する学生に提供している。学生は、裁判傍聴と傍聴日誌の作成を通じて、司法通訳翻訳の現場に触れ、通訳翻訳のスキルを学ぶことができる。

受講生は、科目群（A）と（C）をとおして、通訳翻訳一般、司法通訳翻訳の技能や知識を習得することができる。本プログラムの特徴の一つは、科目群（B）の「法務省・検察庁における通訳翻訳実務論」、「警察通訳翻訳実務論」、「グローバル化時代の弁護実務」である。これらの科目は、法務省、検察庁、大阪府警、大阪弁護士会から講師を招聘して授業を行った。また、大阪地方検察庁、法務総合研究所国際協力部、更生保護施設、大阪入国管理局関西国際空港支局、大阪刑務所、大阪少年鑑別所、大阪府警察本部などでの実地見学も行った。これらの施設訪問はその前後の教室での講義（知識）を補強する意義があり、受講生全体に高く評価された。また、上記の科目は、法学部の特別講義科目として学部生も履修できるようになっており、将来の法曹ないしは国家・地方公務員を目指すものも含めて、多くの学部生（主として法学部 3，4 回生）に貴重な実務家から学ぶ機会を提供している。

例年、受講生はバラエティに富んでおり、さまざまな研究科所属の大学院生がいる。本プログラムの履修をとおして、裁判所、検察庁、警察本部などに通訳人として登録できた者もいる。このことは、本プログラムが、学生の実践への関心および社会的要請に応えるものであることを裏付けている。本プログラムは、来年度以降、法曹やその近接領域で国際的教養とコミュニケーション能力を持ったグローバル人材の育成も視野に入れ、カリキュラムや構成科目の授業内容の改善を図るつもりである。

4）「現代中国研究」

1990 年代以降の中国市場の突出した存在感は、中国社会の変容のみならず、中国をとりまく東・東南アジアの政治的、経済的、文化的環境を大きく変容させている。こうした中国と中国をとりまく国際社会の変化を正しく理解するためには、中国近現代史や国際政治、経済学など複数の視点の獲得と、中国や台湾との国際的な学術交流ネットワークを通した現象理解が不可欠である。高度副プログラム「現代中国研究」は、「中国」に関わるさまざまな学問領域を中国近現代史のコンテクストのなかに位置づけるとともに、領域間の多角的な対話とネットワークを生み出す契機を提供することをめざしている。

本プログラムは、オムニバス講義「現代中国研究」（法学研究科・提供）および「中国文化コロキアム」の二つのコア科目によって構成されている。

オムニバス講義「現代中国研究」では、【第１部】20 世紀中国の射程と【第２部】21 世紀の中国と東アジアの２部構成となっており、第１部では、20 世紀に至る中国と東ア

ジアの歴史を複眼的な視点から説き起こす。また第２部では、21 世紀の中国をとりまく課題を、東アジア地域が共有する課題としてとらえ、文系的な視点のみならず、自然科学的な視点も交えつつ議論してきた（http://www.law.osaka-u.ac.jp/c-forum/box4/kogi.htm 参照）。

一方、2014 年度の中国文化コロキアムでは、「政治文化システム」「中国と東アジアの近代」「華僑華人と『少数民族』」をテーマに、東アジアの政治空間の現状と歴史的な生成過程に関するつきつめたディスカッションを実施した。

高度副プログラム「現代中国研究」は、現代中国と東アジアに関する旧大阪外国語大学と旧大阪大学の知的リソースが結実することで生み出された。こうしたリソースの結実に、プラットフォームとして GLOCOL が果たした役割は小さくない。旧大阪外国語大学と旧大阪大学が統合し、新たな大阪大学が誕生した翌年の 2008 年、GLOCOL では、共同研究プロジェクト「現代中国学の新たなプラットフォーム」を発足させ、2009 年には、第 3 回「現代<中国>の社会変容と東アジアの新環境」の開催をサポートした。2013 年、国際セミナーは第 7 回を数え、高度副プログラム「現代中国研究」の参加教員を研究組織とする「21 世紀課題群と中国」が、未来研究イニシアティブに採択された。

GLOCOL は、高度副プログラム等の教育プログラムや Community Extension Research 等の実践的枠組みを用意することで、学内の様々な教員が参加し得る共同研究を生み出すプラットフォームとして機能している。しかし、こうした共同研究をもとに、真に学際融合的な知を生み出すプラットフォームとなり得るかは、大学全体にとっての今後の課題でもある。

なお、今年度は、5 研究科から 15 人の学生が本プログラムの申請を行った。

５）「グローバル健康環境」

本プログラムの詳細については、pp. 14-15 を参照。

６）「国連政策エキスパートの養成」

本プログラムの詳細については、pp.15-16 を参照。

７）「東アジアの地域環境」

2013 年度から提供している本プログラムは、ローカルとグローバルの 2 つの視点から東アジアの地域環境を捉える方法論を学び、実践を通じて知識を検証し、そして最終的には自分の認識、価値観を再検討する、再構築することを目標にする。

東アジア地域は、世界経済の“成長センター”と言われ、世界経済を牽引していると同時に、それ自体が巨大な市場を形成しつつある。しかしながら、その一方で、東アジアが抱える環境問題は深刻化、複雑化、そして多様化してきている。そして、東アジア地域と世界、地域内の関係は、依存と協力、対立と衝突という相反するメカニズムによって、流動化と複雑化を深めている。

本プログラムでは、地域環境をキーワードに東アジアの地域環境と社会および地域環境と社会の形成との関係を俯瞰的 ― 構造的に理解する。また、地域内で抱える様々な環境問題を地域研究及び学際的な研究によって示された多様で具体的な事例を通じて学び、地域環境の特徴、特質が近代化という理念、プロセスとの因果関係を把握することを目指す。さらに、現地調査、地域の人々との交流、学生同士、学生と教員との討論などを通じて、より現実に近い形で問題、課題を把握し、実践を通じて環境問題を解決する可能性と方法を習得する。

4.「グローバルコラボレーション科目」と高度教養プログラム「知のジムナスティックス」

GLOCOL では、高度な専門性と、専門性を超えた人的ネットワークのなかで専門性を発揮し得る力を兼ね備え、地球規模の諸課題について現場の視点に立って取り組むことのできるグローバル人材を育てるために、グローバルコラボレーション科目を全学の学部、大学院生に提供している。

私たちが知の最前線にたどりつき、将来、そうした知を生み出すためには、段階をひとつひとつ踏んで学習を進めることが、たいへん重要である。グローバルコラボレーション科目では、理論から実践へ、①理論と方法論、②地域の多様性に関する知識、③現場で学ぶ視点の涵養、④実践による多角的な学び、の 4 つの段階を用意し、私たちの生活世界の実践にむすびついた知の最前線へと受講者を導く。

もちろん、知の最前線への接近の仕方は、いくつもの仕方があるが、GLOCOL では、全学教育推進機構と連携をとりつつ、一部の科目を教養教育的な「知のジムナスティックス」として提供しながらも、リベラル・アーツの発想とは多少距離を置き、現象の個別性に充分配慮した実践的な課題解決への道を探ろうとする。

グローバルコラボレーションセンター科目提供一覧（「知のジムナスティックス」プログラムの一部を (*)）

第 1 科目群：国際問題と多文化共生社会の基礎理論

Theory and Practice of Human Security and Development (*)、グローバル健康環境、開発援助における評価の理論と実践、難民問題から世界を見る、開発の政治経済学、Gender and Development、グローバルコラボレーションの理論と実践 (*)、グローバル共生実践演習、多言語共生社会演習 (*)、グローバルコラボレーション言語Ⅰ、グローバルコラボレーション言語Ⅱ、公益通訳翻訳論演習Ⅰ、公益通訳翻訳論演習Ⅱ、通訳翻訳学特論 A、通訳翻訳学特論 B、通訳翻訳演習（英語）、通訳翻訳演習（韓国・朝鮮語）、通訳翻訳演習（中国語）

第 2 科目群：地域の多様性を読み解く

中国文化コロキアム (*)、東アジアの環境の現状と未来、東南アジア社会文化ケーススタディ A、東南アジア社会文化ケーススタディ B、オセアニアのグローバリゼーション A、オセアニアのグローバリゼーション B

第 3 科目群：現場で学ぶ視点の涵養

フィールドワークの方法Ⅰ、フィールドワークの方法Ⅱ (*)、トランスカルチュラル・スタディⅠ、アカデミック・スキルズ、現代ジャーナリズム論、国連政策エキスパート・キャリア形成論 (*)、リサーチ・プロポーザル作成演習、エスノグラフィを読む、エスノグラフィを書く、環境問題への回路Ⅰ、環境問題への回路Ⅱ、環境問題への回路Ⅱ実践演習、環境問題への回路Ⅲ、Food Security, Globalization and Sustainability、フィールドワークと開発、マイノリティとグローバリゼーション、Global Competency and Internship Abroad

第 4 科目群：実践による多角的な学び

海外フィールドスタディ A (*)、海外フィールドスタディ B (*)、海外フィールドスタディ S、海外インターンシップⅠ (*)、海外インターンシップⅡ（A）(*)、海外インターンシップⅡ（B）(*)

グローバルコラボレーション科目の中には、授業の一環として、以下のように一般公開したセミナーがあった。

● GLOCOL セミナー（114）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（22）
後悔にもいろいろあるけど：「何もしなかった」vs「やってしまった」

※「グローバル健康環境」の授業を一般公開した。（詳細は p.16）

● GLOCOL セミナー（118）
リアリティを記述する方法としてのエスノグラフィーの可能性

【講演者】
岩谷洋史（神戸大学国際文化学部非常勤講師・国立民族学博物館外来研究員）
【開催日・場所】
2014 年 11 月 15 日、STUDIO（豊中キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
エスノグラフィーは、ある社会・文化を詳細に記述するための手法であり、二重の意味がある。一つは、参与観察を中心にしたフィールドワーク、及び、それによってもたらされる資料の分析や解釈といったプロセスであり、もう一つは、プロセスを経てもたらされる生産物としての記述されたそのものである。文化人類学では、エスノグラフィーは、クリフォードとマーカスの編集で出版された『Writing Culture』（1986）（邦題『文化を書く』）以来、批判にさらされ、様々な試みがなされるようになっている。発表では、系譜学的にエスノグラフィーの発展をたどり、現在の位置づけを確認するとともに、発表者自身の視覚的なエスノグラフィーの試みも紹介した。
【講師紹介】
京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学。 現在、神戸大学国際文化学部非常勤講師・国立民族学博物館外来研究員。これまで、主に、日本における酒造業を対象にして、現場で働く人々の技能の学習についての人類学的な研究に取り組んできた。近年、文化人類学の方法論にも関心を広め、研究活動に取り組んでいる。
【備考】
主催：GLOCOL
※「エスノグラフィを書く」の授業を一般公開した。

Ⅲ. 研究活動

1．地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）

SATREPS（サトレップス）とは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST*）と独立行政法人国際協力機構（JICA）が共同で実施している、地球規模課題（一国や一地域だけで解決することが困難であり、国際社会が共同で取り組むことが求められている環境・エネルギー問題、自然災害（防災）、感染症・食糧問題など）の課題解決のために日本と開発途上国の研究者が共同で研究を行う 3〜5 年間の研究プログラムである。GLOCOL では以下の研究課題を 2012 年度より実施している。
（*2015 年より当プログラムである感染症分野が JST より日本医療研究開発機構（AMED）に移管）

研究課題名：「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」
相手国：ベトナム社会主義共和国
相手国参加機関：ベトナム国立栄養院、タイビン医科大学、ニャチャン・パスツール院、ホーチミン市公衆衛生医療院、ビンディエン卸売市場、カントー大学
実施年度：2012〜2016 年度

本研究のテーマである薬剤耐性菌の問題は、ローカルな特定の状況での薬剤の使用や食品の生産・流通・消費によって発生し、地域の人々の健康への脅威となっている一方、難治性の感染症の原因であると同時に抗生物質そのものの使用と開発全般にも関わる世界的に重要な課題となっている。また、ベトナムにおける食品の残留抗生物質と薬剤耐性菌の発生は、日本とベトナムの貿易関係の強化において、食物検疫の枠組みの中でも考えられなければならない問題である。GLOCOL は、グローバルな状況を見据えたローカルな研究、文理の枠を超えた多様な分野の協働、そして、高度な研究成果の実践への還元を目指しており、本研究テーマの広がりと重要性は GLOCOL の研究活動の趣旨に十分見合うものであることから、本研究課題を申請し、2011 年度に採択されるにいたった。

【研究代表者】
山本容正（GLOCOL 招へい教授・大阪府公衆衛生研究所所長）（研究統括、耐性菌の解析全般）
【研究参加者】
宇野公之（薬学研究科教授）（環境薬物解析）
平田收正（GLOCOL センター長・教授）（環境薬物解析）
原田和生（薬学研究科講師）（環境薬物解析）
朝野和典（医学系研究科教授）（感染症解析）
大橋一友（医学系研究科教授）（人材育成）
住村欣範（GLOCOL 准教授）（人類学的解析）
上田晶子（GLOCOL 特任准教授）（開発学的解析）
本庄かおり（GLOCOL 特任准教授）（公衆衛生解析）
中山達哉（GLOCOL 特任助教）（遺伝子解析）
李　俊遠（GLOCOL 招へい研究員）（水産物に関する人類学的解析）
高橋　章（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授）（食品微生物）
下畑隆明（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部助教）（食品微生物）
山本眞由美（岐阜大学保健管理センター教授）（保健衛生解析）
大山卓昭（国立保健医療科学院主任研究官）（感染疫学解析）
長谷　篤（大阪市立環境科学研究所研究員）（モニタリングマニュアル作成）
久米田裕子（大阪府立公衆衛生研究所課長）（研究統括、モニタリングマニュアル作成）
河合高生（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品微生物解析）
神吉政史（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品微生物解析）
河原隆二（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品微生物解析）

起橋雅浩（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（食品検査）
小西良昌（大阪府立公衆衛生研究所主任研究員）（残留抗菌剤検査）
余野木伸哉（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（食品微生物解析）
陳内理生（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（食品微生物解析）
山口貴弘（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（食品検査）
内田耕太郎（大阪府立公衆衛生研究所研究員）（残留抗菌剤検査）
上田宗平（大阪府立公衆衛生研究所特任研究員）（食品微生物解析）
井澤恭子（大阪府立公衆衛生研究所非常勤作業員）（食品微生物解析補助）
落海育美（大阪府立公衆衛生研究所非常勤研究補助員）（成績解析補助）
山崎伸二（大阪府立大学生命科学研究科教授）（研究統括、マウスモデル作成）
日根野谷　淳（大阪府立大学生命科学研究科助教）（影響因子解析）
平井　到（琉球大学医学部保健学科教授）（遺伝子解析）
Tran Thi My Duyen（薬学研究科 D1）（環境薬物解析）
割鞘美苗（薬学研究科 M1）（環境薬物解析）
浅山　恵（薬学部 B5）（環境薬物解析）
山根諒子（武庫川女子大学 M1）（食品微生物解析）
立川なお（GLOCOL 非常勤職員）（人類学的解析補助）（2014.8～）
＊事務担当：大前　舞（GLOCOL 非常勤職員）

【研究の目的】

近年、世界を震撼させているスーパー（薬剤）耐性菌の出現は難治性の感染症を引き起こし、その背景には医療に限らず、畜産や水産における抗菌剤の濫用が指摘されている。さらに、これらスーパー耐性菌の国境を越えた拡散は地球規模での対応を迫っている。特にベトナムでは、住民の耐性菌保菌率が著しく増加しており、その発生や蔓延に関与する諸因子の調査研究は喫緊の課題となっている。本研究では、薬剤耐性細菌発生機構の解析やその蔓延に関与する抗菌剤や関連諸要因を微生物学的、薬物学的、さらには当該国の社会・経済的背景を基にした人類学・開発学的視点より研究解明し、これを基盤とした耐性菌モニタリングシステムの構築を行う。

また、研究課題においては、当該テーマに関する研究とモニタリングシステムの開発・運営を持続的に行うために、高度な研究能力と専門性を備えた人材を育成するための研修も実施する。

【2014 年度の実施概要】

薬剤耐性細菌発生機構の解明と耐性菌蔓延に関与していると想定される食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発を目的として、これまでにベトナムの５つの地域、北部首都ハノイ地区（国立栄養院）、紅河デルタ地区（タイビン医科大学）、中部海岸地区（ニャチャン・パスツール院）、南部ホーチミン地区（ホーチミン公衆衛生医療院、ビンディエン卸売市場）、メコンデルタ地区（カントー大学）で耐性菌の検出とその性状の 1 次解析を行い、耐性菌分布状況の解析へと繋いだ（論文発表）。また、耐性遺伝子の詳細な高次解析を一部分離菌株において実施し、耐性遺伝子型、プラスミド型分布の解明を行った（論文発表）。加えて、人類学的視点からの分析を行ない、微生物学、薬学分野の解析結果と合わせて、プロジェクト 4 年目に予定されている包括的解析への基盤とした。調査対象地域住民の多くが（～60%）ESBL（extended-spectrum β-lactamase）産生薬剤耐性菌を保菌しており、また、日常消費する生鮮食材、特に鶏肉からは当該耐性菌が極めて高率（～90%）に検出され、ESBL 産生耐性菌の地域社会での蔓延が本プロジェクトの成果から明らかになった。また、農村世帯に対する調査結果からは、β ラクタム系を含む多種多様な抗生物質がヒトと家畜の両方に対して自己投与的に使用されており、一部食品から高濃度残留抗生物質が検出されている状況が明らかになった（論文発表）。同一世帯構成員間での耐性菌伝播に関しても分離耐性菌の解析を進めた。基礎的研究として、耐性遺伝子解析手法ならびに耐性菌蔓延の疫学的解析手法についてモデル研究を実施し、その成果の一部を論文投稿した。地域住民の耐性菌

保菌の機序解析に必要となる実験動物（マウス）を用いた感染モデルの構築に成功し、本モデルを用いた保菌状態の安定性に及ぼす諸因子の解析を行った結果、抗生物質の持続投与により腸管内での耐性遺伝子水平伝播を示唆する成績を得た。また、食品検査体制における耐性菌モニタリングシステムの構築を行うべくマニュアル（英語版、ベトナム語版）の作成とそれを基にした耐性菌モニタリングを 3 つの国立研究機関の参加により現在継続的に試行実施している。

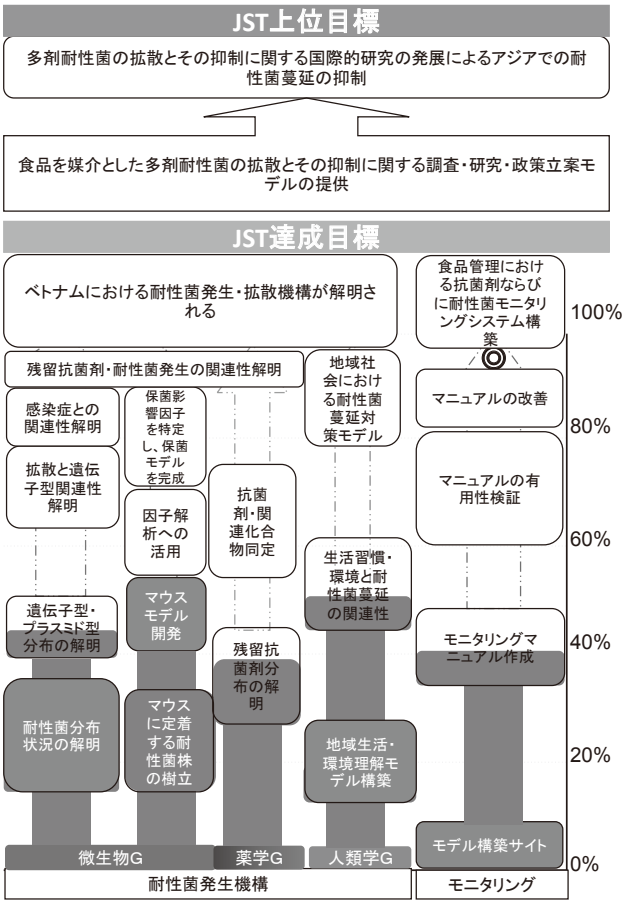
2015 年 2 月 7 日と 8 日に、関テレ扇町スクエアで開催されたワン・ワールド・フェスティバルにおいてブースを出展し、研究概要の紹介や資料の展示を行った。（詳細は p.74）

成果目標シート

研究課題名	薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発
代表研究者氏名（所属機関）	山本容正 国立大学法人 大阪大学グローバルコラボレーションセンター
研究期間	平成23年6月1日～平成29年3月31日
相手国名	ベトナム
主要相手国研究機関	国立栄養院

付随的成果

日本政府、社会、産業への貢献	・日本社会における耐性菌保菌の減少 ・耐性菌を指標とした新たな食品衛生管理による安全・安心の強化
科学技術の発展	・耐性遺伝子伝播解析手法の開発
知財の獲得、国際標準化の推進、生物資源へのアクセス等	・分離耐性菌株のデーターベース化
世界で活躍できる日本人人材の育成	・国際研究業務調整実務実績を有する日本人人材の育成 ・途上国で活躍できる若手研究者の育成
技術及び人的ネットワークの構築	・ベトナム国立公衆衛生分野研究機関との技術及び人的ネットワークの構築
成果物（提言書、論文、プログラム、マニュアル、データなど）	・レビュー付国際誌での論文発表 ・食品生産販売分野を対象とした耐性菌モニタリングマニュアルの作成



２．科学研究費補助金

科学研究費補助金は、人文・社会科学から自然科学までの全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビュー（専門分野の近い複数の研究者による審査）による審査を経て、独創的・先駆的な研究に対し助成されたものである。

GLOCOL 教員が代表者となり採択された研究課題と研究分担者となっている課題は以下のとおり。

【研究代表者】

・平田收正
「環境再生・食糧増産への応用に向けた強ストレス耐性緑藻由来低温応答遺伝子の機能解析」挑戦的萌芽研究
「ベトナムの２大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」基盤研究（B・海外学術調査）

・大橋一友
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究

・宮原　曉
「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」基盤研究（B・海外学術調査）
「東西交流史の新たな視覚：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」挑戦的萌芽研究

・住村欣範
「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」挑戦的萌芽研究

・島薗洋介
「代理懐胎の人類学：英国における代理懐胎の実態と当事者の語りの研究」若手研究（B）

・上田晶子
「ブータンの農村社会内における経済的格差の要因：稲作地域と畑作地域の比較研究」基盤研究（C）

・思沁夫
「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」基盤研究（C）

・本庄かおり
「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」基盤研究（C）

・常田夕美子
「現代インドにおける都市村落混住地域とグローカルネットワーク：社会空間の視点から」基盤研究（C）

・中山達哉
「経口ルートによる豚連鎖球菌感染症の発症メカニズムの解明」若手研究（B）

・大野光明
「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学：太平洋を横断するネットワークの視点から」若手研究（B）

・福田州平
「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」挑戦的萌芽研究

【研究分担者】

・平田收正
「ニチニチソウアルカロイドを高効率に生産する光制御技術の探索と開発」基盤研究（C）（研究代表者：玉川大学　兼子敬子）

・住村欣範
「ベトナムの２大最下流域における毒性化学物資による食品汚染に関する調査研究」基盤研究（B・海外学術調査）（研究代表者：平田收正）
「アジアの認知症高齢者の徘徊などの心理行動学的徴候と関連要因の国際疫学調査」基盤研究（B・海外学術調査）（研究代表者：牧本清子）

・思沁夫
「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：住村欣範）

・本庄かおり
「社会心理要因から循環器疾患に至るプロセス解明のための社会・健康科学融合研究」基盤研究（A）（研究代表者：磯　博康）

「オセアニア・南アジアの労働者・低所得者における生活習慣病の実態と社会的危険因子」基盤研究（A）
（研究代表者：名古屋大学　青山温子）
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）

・敦賀和外
「国連安保理改革の重層的研究：歴史、政治、投票力、実効性の観点から」基盤研究（B）（研究代表者：竹内俊隆）
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）

・小峯茂嗣
「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」挑戦的萌芽研究
（研究代表者：大村悦二）

・安藤由香里
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）

・小河久志
「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」挑戦的萌芽研究（研究代表者：大橋一友）

・大野光明
「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」挑戦的萌芽研究
（研究代表者：大村悦二）

・石高真吾
「東南アジアの華人慈善団体に関する人類学的研究：潮州系のエスニシティとネットワーク」基盤研究（C）
（研究代表者：茨城キリスト教大学　志賀市子）

３．その他外部資金

● 論文博士取得希望者に対する支援事業（論博事業）
・日本学術振興会（JSPS）（LUU Dam Ngoc Anh：ベトナム科学技術アカデミー環境生物資源研究所、日本側研究指導者：住村欣範准教授）

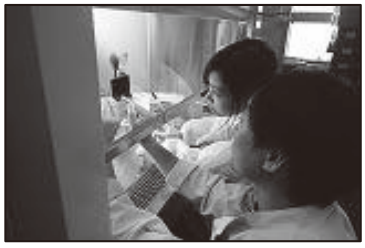
● 住村欣範准教授奨学金
・上野製薬株式会社（ベトナムにおける食品安全衛生に関する調査研究のため）

● 熱帯生物資源研究奨学金

● 思沁夫特任准教授奨学金
・公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団（「環境事業助成」：モンゴル国オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力行動のため）

● JSPS 外国人特別研究員事業
・BOFULIN Martina：スロベニア芸術科学アカデミー、受入研究者：宮原　曉教授

● JST　日本・アジア青少年サイエンス交流事業　さくらサイエンスプラン
・受付番号：E20140527102（B. 共同研究活動コース）　ベトナム、タイビン医科大学 3 名との共同研究



【概要】
ベトナムのタイビン医科大学より大学院生および若手の研究者を 2014 年 11 月 5 日から 25 日に招へいし、大阪大学、大阪府公衆衛生研究所、大阪府立大学などにて共同研究やセミナー参加し、日本の研究状況や研究を行うこと自体の意味について学んだ。ほかにも、老健施設や大阪市立科学館、大阪大学総合学術博物館などを見学し、科学技術の歴史やその応用の実際について学んだ。

・受付番号：E2014527103（A. 科学技術交流活動コース）ベトナム、レ・クィ・ドン高校との交流

【概要】

ベトナムのホーチミン市からレ・クィ・ドン高校の生徒 9 名、教員 2 名を 2015 年 1 月 11 日から 17 日に招へいし、メガシティである日本の高度な環境技術について研修を行った。大阪大学、水のめぐみ館アクア琵琶、大阪市下水道科学館、ダイワハウス工業総合技術研究所などを見学し、当該テーマに関する科学技術について、ベトナムとの関係を踏まえた講義を受けた。また、招へいした高校生が、将来に日本での研究や就職を想定して、阪大の留学説明会参加や、ベトナム人専門に高度な日本語教育を行っているファーストスタディー日本語センターでの模擬授業を受けた。6 月に茨木高校が野外実習でベトナムを訪問した際に高校間での交流を深めた経緯があり、それら生徒が一部の施設見学や講義に同行し、15 日には茨木高校を訪問して共同成果発表会を行い、親交を深めた。

４．国際研究交流

１）学術交流協定の推進

GLOCOL の教育、研究、実践のいずれの面においても、事業を展開するためには、海外の大学や機関と学術交流協定などの国際連携を確立することが望ましい。また、2011 年度から本格的に活動を行ってきた FIELDO の海外体験型教育プログラム（海外インターンシップ、海外フィールドスタディ）を安定的に推進するためにも、単に教育面での交流にとどまらない学術交流協定を締結することが必要となっている。2014 年度は、これまで海外フィールドスタディにて連携してきた Bangladesh Rice Research Institute（バングラデシュ）と工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻との三者で、交流協定の締結審議が続いていたが、最終的には協定の締結は行わないとの結論となった。ただし、今後もこれまでと変わらず連携し、プログラムを実施することで合意した。また、協定締結までには至っていないが、モンゴル国立医科大学と連携して健康問題の共同研究を開始するとともに、北京大学公衆衛生研究所と連携して PM2.5 についての研究を開始した。

２）海外からの招へい研究員・受託研修員

・招へい研究員

李俊遠（2011 年 8 月 1 日～2015 年 3 月 31 日）
（国立慶北大学非常勤講師）

・海外客員教授

Nguyen Vo Chau Ngan（2014 年 6 月 1 日～2016 年 3 月 31 日）
（カントー大学環境天然資源学部環境技術専攻主任講師）

Bumochir Dulam（2014 年 6 月 1 日～2016 年 3 月 31 日）
（モンゴル国立大学教授）

于干千（2014 年 6 月 1 日～2016 年 3 月 31 日）
（雲南省普洱学院大学副学長・教授）

・外国人招へい研究員

Bofulin Martina（2013 年 9 月 1 日～2014 年 12 月 31 日）
（スロベニア芸術科学アカデミー研究員）

Yoko Nitahara Souza（2013 年 11 月 1 日～2014 年 7 月 31 日）
（ブラジリア連邦直轄区教育省教員）
Hoang Hoai Phuong（2014 年 1 月 16 日～3 月 31 日）
（ホーチミン市公衆衛生医療院研究員）
Luu Dam Ngoc Anh（2014 年 11 月 13 日～12 月 18 日、2015 年 3 月 3 日～4 月 1 日）
（ベトナム科学技術院ベトナム国立自然博物館研究員）
Trinh Hong Son（2014 年 12 月 1 日～24 日）
（ベトナム国立栄養院栄養コミュニケーションセンターセンター長）

・外国人受託研修員
Le Quoc Phong（2014 年 5 月 7 日～10 月 12 日）
（ニャチャン・パスツール研究所研究員）
Bui Thi Kim Ngan（2014 年 8 月 24 日～10 月 12 日）
（ベトナム国立栄養院研究員）
Hoang Thi Ai Van（2014 年 8 月 24 日～10 月 12 日）
（ニャチャン・パスツール研究所研究員）
Nguyen Anh Thi Dao（2014 年 8 月 24 日～10 月 12 日）
（ホーチミン市公衆衛生医療院研究員）
Tran Thi Thu Suong（2014 年 9 月 4 日～2015 年 2 月 14 日）
（カントー大学講師）

5．GLOCOL FD セミナー

GLOCOL スタッフの研究、教育、実践支援の質向上および個々のスタッフの活動についての相互理解を深めるために、GLOCOL FD セミナーを実施している。2014 度は 6 回実施した。第 1 回は深井係長から個人情報保護と情報セキュリティについての周知説明があった。第 2 回は中山特任助教が、自身の研究について発表した。第 3 回は学生の海外派遣時のリスク管理のシミュレーションを行い、阪大内のリスク管理に関心のある教職員がオブザーバーとして参加した。第 4 回は深井係長から研究費の不正使用防止について周知説明をした。第 5 回は、前バンコクセンター長である関　達治先生をお呼びして、高大連携による人材育成に関連してタイでの教育事情について報告があった。大教大平野校舎の堀川副校長にも参加していただき、意見交換をおこなった。第 6 回は、GPA 導入に伴うシラバス上の成績評価基準について情報共有と意見交換をおこなった。

● **第 1 回　2014 年 7 月 8 日**
深井　明（国際連携係係長）「個人情報保護・情報セキュリティについて」

● **第 2 回　2014 年 7 月 15 日**
中山達哉「サイエンティストによる途上国研究へのアプローチ」

● **第 3 回　2014 年 7 月 29 日**
阪大教職員対象「学生海外派遣時のリスク管理シミュレーション」

【概要】
夏季休暇には、多くの海外研修プログラムが実施されるが、それに先立ち GLOCOL で、学生を海外に派遣する際のリスク管理シミュレーションを行った。ある事例を設定し、各担当に分かれて緊急時に担当者は何をすべきか、どのように対応すべきかなどのロールプレイを行った。主に GLOCOL 教職員を対象にしたが、学内の教職員にも呼びかけて、関心がある方々にオブザーバーとして参加いただいた。リスク管理はリスクの発生を抑える予防と、発生した場合の被害を最小限に抑える対策が重要であることが認識された。

＜内容＞

1. リスク管理シミュレーション参考 DVD 視聴（10 分）
2. リスク管理シミュレーションの実施（60 分）
3. 講評
4. 振り返り
5. ファシリテーターコメント
6. まとめ

● 第 4 回　2014 年 10 月 14 日

深井　明「不正使用防止計画推進への取り組みについて」

● 第 5 回　2014 年 11 月 13 日

関　達治（前バンコクセンター長、現モンクット王工科大学トンブリ校（KMUTT）研究顧問）

「最近のタイ王国の教育事情 － 高大連携によるグローバル人材育成のために」

● 第 6 回　2015 年 1 月 20 日

「GPA 導入に伴うシラバス上の成績評価基準について」

６．スタッフの研究活動（個人研究）

平田收正（ひらた　かずまさ）

----------センター長（2014.04-）・教授

【学歴】京都薬科大学薬学部生物学科卒業（1982）、大阪大学薬学研究科応用薬学専攻修士課程修了（1984）、大阪大学薬学研究科応用薬学専攻博士課程修了（1987）【職歴】大阪大学薬学部文部技官（1987）、大阪大学薬学部助手（1987-1992）、文部省在外研究員（ドイツ・ミュンヘン大学）（1992-1993）、大阪大学薬学研究科環境生物薬学専攻助手（1993）、大阪大学薬学研究科環境生物薬学専攻助教授（1993-1998）、大阪大学薬学研究科生命情報環境科学専攻助教授（1998-2006）、大阪大学薬学研究科附属実践薬学教育センター教授・センター長（2006-2012）、大阪大学薬学研究科副研究科長（2008—1012）、大阪大学薬学研究科附属薬用植物園長（2013-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター長（2014-）【学位】薬学博士（1987 大阪大学）【専攻・専門】応用環境生物学、グローバル健康環境

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014 松浦秀幸、村岡未彩、平田收正「重金属用バイオメタルセンサー ― 遺伝子組換え酵母を用いたバイオセンサー」『地球を救うメタルバイオテクノロジー』成山堂書店、pp.191-197.

2014 Takayama K, Morisaki Y, Kuno S, Nagamoto Y, Harada K, Furukawa N, Ohtaka M, Nishimura K, Imagawa K, Sakurai F, Tachibana M, Sumazaki R, Noguchi E, Nakanishi M, Hirata K, Kawabata K, Mizuguchi H. “Prediction of interindividual differences in hepatic functions and drug sensitivity by using human iPS-derived hepatocytes.” *Proc Natl Acad Sci U S A*., 25, 111, 16772-7.

2015 Matsushima K, Kaneda H, Harada K, Matsuura H, Hirata K, “Immobilization of enzymatic extracts of Portulaca oleracea cv. Roots for oxidizing aqueous bisphenol A” *Biotechnol*. Lett., 37, 1037-1042.

2015 Yamaguchi T, Okihashi M, Harada K, Uchida K, Konishi Y, Kajimura K, Hirata K, and Yamamoto Y. “Rapid and Easy Multiresidue Method for the Analysis of Antibiotics in Meats by Ultrahigh-Performance Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry.” *Journal of Agriculture and Food Chemistry*, 63, 5133–5140.

2015 Takahiro Yamaguchi, Masahiro Okihashi, Kazuo Harada, Yoshimasa Konishi, Kotaro Uchida, Mai Hoang Ngoc Do, Huong Dang Thien Bui, Thinh Duc Nguyen, Phuc Do Nguyen, Vien Van Chau, Khanh Thi Van Dao, Hue Thi Ngoc Nguyen, Keiji Kajimura, Yuko Kumeda, Chien Trong Bui, Mai Quang Vien, Ninh Hoang Le, Kazumasa Hirata, and Yoshimasa Yamamoto. “Antibiotic Residue Monitoring Results for Pork, Chicken, and Beef Samples in Vietnam in 2012-2013.” *Journal of Agricultural and Food Chemistry*, 63, 5141–5145.

◇講演

2014 年 7 月　割鞘美苗、浅山恵、原田和生、平田收正　「固層抽出カートリッジに吸着した抗菌性物質の保存安定性の解析」生物工学若手研究者の集い、兵庫県・神戸市立神戸セミナーハウス。

2014 年 7 月　網野伸哉、松島和樹、金田洋和、原田和生、松浦秀幸、平田收正　「園芸植物 portulaca oleracea cv.　由来内分泌撹乱物質代謝酵素の固定化」生物工学若手研究者の集い、兵庫県・神戸市立神戸セミナーハウス。

2014 年 7 月　棚田恵介、田中聡、野澤紗彩、松浦秀幸、宮坂均、平田收正　「海産性緑藻 Chlamydomonas W80 由来のストレス誘導遺伝子の機能解析」生物工学若手研究者の集い、兵庫県・神戸市立神戸セミナーハウス。

2014 年 7 月　那須雄大、原田和生、鈴岡万季、長澤沙弥、黒野友理香、岡澤敦司、平田收正　「放線菌 Streptomyces ficellus による寄生植物発芽種子阻害剤ノジリマイシンの生産」生物工学若手研究者の集い, 兵庫県・神戸市立神戸セミナーハウス。

2014 年 7 月　岸田百世、高橋弘喜、御田洋介、加藤晃、平田收正、松浦秀幸　「高温ストレス条件下の植物における転写開始点と mRNA 翻訳状態の網羅的解析」生物工学若手研究者の集い、兵庫県・神戸市立神戸セミナーハウス。

2014 年 7 月　御田洋介、尾形卓哉、松田悠里、松浦秀幸、原田和生、平田收正　「緑藻カロテノイド酸化ストレス耐性機構の解析」生物工学若手研究者の集い、兵庫県・神戸市立神戸セミナーハウス。

2014 年 7 月　Momoyo Kishida, Hiroki Takahashi, Yosuke Onda, Ko Kato, Kazumasa Hirata, Hideyuki Matsuura “Global analysis of transcription start sites and translation states of mRNA in plants under heat stress conditions”　第 16 回日本 RNA 学会年会、愛知県・ウインク名古屋。

◇教育活動

大阪大学薬学研究科応用環境生物学特別講義
大阪大学薬学部環境安全学
大阪大学薬学部機能食品学
大阪大学薬学部健康管理学
大阪大学薬学部実務実習（薬局）
大阪大学薬学部生物化学 I
大阪大学薬学研究科発展途上国における感染症の現状と対策

◇社会活動、センター外活動

薬学教育評価機構評価委員長
薬学教育協議会薬学教育者 WS 実施委員長

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「環境再生・食糧増産への応用に向けた強ストレス耐性緑藻由来低温応答遺伝子の機能解析」研究代表者
科学研究費補助金　基盤研究（B・海外学術調査）「ベトナムの２大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」研究代表者
科学研究費補助金　基盤研究（C）「ニチニチソウアルカロイドを高効率に生産する光制御技術の探索と開発」（研究代表者：玉川大学　兼子敬子）研究分担者
公益財団法人小林国際奨学財団「照葉樹林地域のセンターにおける有用植物資源の探査と機能性に関する研究」研究代表者
Long Range Research Initiative「メコン川流域における複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証」研究代表者
地球規模課題対策国際科学技術協力事業「薬剤耐性最近発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」（研究代表者：山本容正）研究分担者

◇海外調査活動

2014 年 7 月 5 日～9 日（ベトナム）LRI「複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証（メコン川流域をモデルケースとして）」
2014 年 8 月 4 日～6 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る中間評価会議に参加するため
2014 年 11 月 14 日～20 日（中国）雲南大学、普洱学院との共同研究及び学生引率

宮原　暁（みやはら　ぎょう）

----------副センター長・准教授（-2014.11）・教授（2014.11-）（グローバル共生グループ）
【学歴】大阪外国語大学外国語学部インドネシア・フィリピン語学科卒業（1989）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程（社会人類学専攻）修了（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程（社会人類学専攻）中退（1997）【職歴】大阪外国語大学アジアⅡ講座専任講師（1997）、大阪外国語大学アジアⅡ講座助教授（1999-2007）、大阪外国語大学アジアⅡ講座准教授（2007-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授（2007-2014）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター副センター長（2010-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター教授（2014-）、【学位】博士（社会人類学）（2007 東京都立大学）【専攻・専門】社会人類学、華僑華人研究、親族研究

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014 「法人類学のあらたな可能性にむけた試論 ― 法文化・法システム・司法通訳・文化的抗弁」『アジア太平洋論叢』20 号 pp.103-122　。

2015 宮原　暁（編）GLOCOL ブックレット 17『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場：フィールドワークを問う』大阪大学グローバルコラボレーションセンター。

2015 「Displacement の素描」、GLOCOL ブックレット 17『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場：フィールドワークを問う』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、pp.89-101。

◇講演・口頭発表

2014 年 5 月 18 日　"Chinese Exchange": A Historical Overview and Issues. IUAES Inter-Congress 2014 (Chiba) 分科会：Population Movement and Diasporic Space: Anthropological Study on Chinese Overseas in East and Southeast Asian Countries.

◇教育活動

大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡaC」Ⅰ期
大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡbC」Ⅱ期
大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡaD」Ⅰ期
大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジア社会文化演習ⅡbD」Ⅱ期
大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジアフィールドワーク a」Ⅰ期
大阪大学外国語学部外国語学科「東南アジアフィールドワーク b」Ⅱ期
大阪大学人間科学部「地域研究概論」Ⅰ期（オムニバス）
大阪大学人間科学部「国際フィールドワーク論」Ⅱ期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特講 II」I 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定演習 I」I 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定演習 II」II 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定研究 I」I 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特定研究 II」II 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別演習 I」I 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別演習 II」II 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別研究 I」I 期
大阪大学人間科学研究科「超域地域論特別研究 II」II 期
大阪大学人間科学研究科「地域研究特講」（オムニバス）II 期
大阪大学グローバルコラボレーションセンター・高度副プログラム「グローバル共生」
　　「グローバルコラボレーションの理論と実践」「多文化共生社会論」「多言語共生社会演習」
大阪大学グローバルコラボレーションセンター・高度副プログラム「現代中国研究」
　　「現代中国研究」「中国文化コロキアム」
京都外国語大学外国語学部「比較文化論 2」II 期

◇社会活動、センター外活動

日本華僑華人学会常任理事
地域研究コンソーシアム運営委員長

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「東西交流史の新たな視角：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」

研究代表者
科学研究費補助金　基盤研究（B・海外調査）「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」研究代表者

◇海外調査活動

2014 年 6 月 22 日～27 日（タイ）The 6th Asian Ministerial Conference on Disaster Risk Reduction の各セッションの議論に参加

2014 年 8 月 4 日～14 日（フィリピン）科研挑戦的萌芽研究「東西交流史の新たな視覚：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」の調査、資料収集及びワークショップ開催

2014 年 9 月 14 日～23 日（中国）科研基盤 B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の香港、広州、泉州での華僑出身地域における現地調査調査

2014 年 10 月 11 日～15 日（フィリピン）レイテ島での災害復興支援における現地調査

2014 年 11 月 9 日～16 日（アメリカ）カリフォルニア大学バークレー校を訪問し、今後の研究プロジェクトについて、Health Research for Action Center の研究者を含め研究打合せ

2015 年 3 月 24 日～4 月 4 日（ベトナム、フィリピン）科研基盤 B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の調査及び情報収集

住村欣範（すみむら　よしのり）

----------准教授（国際協力グループ）

【学歴】大阪大学人間科学部（1991）、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（1996）、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了（2000）、放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了（2008）【職歴】帝塚山大学短期大学部非常勤講師（2000）、大阪外国語大学外国語学部専任講師（2000）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤講師（2004）、関西大学社会学部非常勤講師（2004）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授（2007-）、大阪市立大学大学院文学研究科非常勤講師（2008）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター副センター長（2011-2012）【学位】学術修士（大阪大学 1996）、学術修士（放送大学 2008）【専攻・専門】人類学、ベトナム地域研究

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014　住村欣範監修、チャン ティ ヒエン編『日越・越日対訳：水環境用語集』大阪大学生物工学国際交流センター

◇講演・口頭発表

2015 年 3 月 5 日　「日本とベトナムの高等教育における連携」『国際産学連携シンポジウム 東南アジアにおける産学協働推進　第 1 回ベトナムの大学との連携』大阪大学グローバルコラボレーションセンター（大阪大学中之島センター）（詳細は p.72）

◇教育活動

大阪大学 GLOCOL 科目「環境問題への回路 I」（オムニバス）
大阪大学 GLOCOL 科目「環境問題への回路Ⅱ」（オムニバス）
大阪大学 GLOCOL 科目「東アジアの地域環境」（オムニバス）
大阪大学 GLOCOL 科目「グローバル健康環境」
大阪大学 GLOCOL 科目「グローバルコラボレーション言語 I・II」
大阪大学 GLOCOL 科目「海外フィールドスタディ S」
大阪大学全学共通教育科目「アジアの文化と社会を知る」
大阪大学外国語学部「ベトナム語 IVa」
大阪大学外国語学部「ベトナム語 IVb」
大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習Ⅱa（F）」
大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習Ⅱb（F）」

大阪大学人間科学部「地域言語基礎Ⅰ（ベトナム語）」
大阪大学人間科学部「地域言語基礎Ⅱ（ベトナム語）」
大阪大学人間科学部「地域言語基礎Ⅲ（ベトナム語）」
大阪大学人間科学部「地域知識論 II」
大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特講 II」
大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特定研究 I」
大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特別研究 II」
大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特定演習 I」
大阪大学大学院人間科学研究科「地域知識論特別演習 II」
大阪大学大学院薬学研究科「応用環境生物学特別講義」（オムニバス）

◇社会活動、センター外活動

大阪大学全学教育推進機構企画開発部兼任
大阪大学大学院人間科学研究科兼任
大阪大学人間科学部兼任
大阪大学外国語学部兼任
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター兼任
大阪大学生物工学国際交流センター兼任
大阪大学生物工学国際交流センター外部評価委員
大阪府立茨木高校野外実習活動（ベトナム）との高大連携活動

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」研究代表者
地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」（研究代表者：山本容正）研究分担者：人類学グループ、人材育成グループリーダー
科学研究費補助金　基盤研究（B・海外学術調査）「ベトナムの２大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」（研究代表者：平田收正）研究分担者
科学研究費補助金　基盤研究（B・海外学術調査）「アジアの認知症高齢者の徘徊などの心理行動学的徴候と関連要因の国際疫学調査」（研究代表者：牧本清子）連携研究者
Long Range Research Initiative「メコン川流域における複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証」（研究代表者：平田收正）研究分担者

◇海外調査活動

2014 年 4 月 16 日～21 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」にかかる、タイビン省における現地調査、ホーチミン市、メコンデルタ、ハノイにおける研究打ち合わせ
2014 年 5 月 31 日～6 月 5 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」にかかる、タイビン省における現地調査、ハノイ市での研究打ち合わせ、科学研究費補助金「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」にかかるメコンデルタでの予備調査、ホーチミン市でのセミナーのための打合せ
2014 年 7 月 4 日～9 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」LRI「複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証（メコン川流域をモデルケースとして）」
2014 年 7 月 27 日～8 月 5 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」科研 B「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」（薬学）
2014 年 8 月 31 日～9 月 4 日（ベトナム）科研挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」に係る現地調査、論文博士制度に係る現地指導
2014 年 10 月 19 日～24 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る打合せ、調査研究
2014 年 11 月 24 日～26 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」
2014 年 11 月 27 日～12 月 1 日（ベトナム）科研基盤 B「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」（薬学）

2014 年 12 月 24 日～28 日（ベトナム）ベトナムにおける産学連携の可能性に関する調査
2015 年 1 月 20 日～21 日（ベトナム）科研費萌芽的研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」
2015 年 1 月 22 日～24 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」の調査・情報収集のため
2015 年 3 月 17 日～21 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ

島薗洋介（しまぞの　ようすけ）

----------講師（グローバル共生グループ）

【学歴】早稲田大学第一文学哲学科社会学専修卒業（1997）、京都大学大学院人間環境学研究科修士課程修了（2000）、オックスフォード大学社会文化人類学研究所医療人類学修士課程修了（2003）、京都大学大学院人間環境学研究科博士課程指導認定退学（2009）、オックスフォード大学社会文化人類学研究所社会人類学博士課程修了（2013）【職歴】京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師（2007-2008）、多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師（2008-2012）、慶応大学先導研究センター非常勤研究員（グローバル人文 COE「倫理と完成にかんする先端的研究教育拠点」）（2111-2012）、金沢大学意訳保険研究域医学系生態医学・公衆衛生学研究員（内閣府・最先端次世代型研究開発支援プログラム「グローバル化における生殖技術の市場化と生殖ツーリズム：倫理的、法的問題」）（2011-2013）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター講師（2013-）【学位】人間環境学修士（京都大学 2000）、医療人類学修士 M. Phil Medical Anthropology（オックスフォード大学 2003）、社会人類学博士 D. Phil in Social Anthropology（オックスフォード大学 2013）【専攻・専門】社会人類学、医療人類学

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014「「商品」としての腎臓：フィリピンにおける生体腎移植の民族誌」『医学哲学　医学倫理』32：82-88，学術論文。
2015「繋がる、裂かれる、傷む：インドにおける代理懐胎のエスノグラフィー」GLOCOL ブックレット 17『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場 ―フィールドワークを問う』，大阪大学グローバルコラボレーションセンター，pp.33-50，ISBN: 978-4-904609。

◇講演・口頭発表

2014 年 9 月 8 日　「代理懐胎と痛みの民族誌 ― インドにおける代理懐胎の現場から」『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場 ― フィールドワークを問う』、大阪大学。
2014 年 11 月 21、22 日　“Kidneys as contested commodities: An anthropological reflection on paid kidney donation in the Philippines,” *Transfert de matières transplantation et fabrication du vivant : colloque interdisciplinaire*, Grand Amphithéâtre, Université Paris Descartes. Paris.
2014 年 11 月 23、24 日　“Exchanging the Incommensurable: An Anthropological Exploration of Commercial Kidney”, 2014 International Conference of the Japanese Association for Philosophical and Ethical Researches in Medicine, Toyo University, Hakusan Main Campus.

◇教育活動

大阪大学グローバルコラボレーションセンター高度副プログラム「司法通訳翻訳」
大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特講 I」
大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特講 II」
大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特定演習 I」
大阪大学大学院人間科学研究科「超域地域論特定演習 II」
大阪大学大学院人間科学研究科「地域研究特講」（オムニバス）
大阪大学大学院法学研究科「法務省・検察庁における通訳翻訳実務論 A」
大阪大学大学院法学研究科「法務省・検察庁における通訳翻訳実務論 B」

大阪大学大学院法学研究科「警察通訳翻訳実務論」
大阪大学大学院法学研究科「グローバル化時代の弁護実務」
大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIa
大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIIa
大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIb
大阪大学外国語学部「東南アジア社会文化演習」IIIb
大阪大学法学部「特別講義（法務省・検察庁における通訳翻訳実務論 A）」
大阪大学法学部「特別講義（法務省・検察庁における通訳翻訳実務論 B）」
大阪大学法学部「特別講義（警察通訳翻訳実務論）」
大阪大学法学部「特別講義（グローバル化時代の弁護実務）」

◇社会活動、センター外活動
フィリピン・台風ヨランダ被災地支援活動（大阪大学外国語学部フィリピン語専攻学生有志との協力）
第 18 回フィリピン研究全国フォーラム運営委員

◇外部資金による研究
科学研究費補助金　若手（B）「代理懐胎の人類学：英国における当事者の語りを中心とした研究」研究代表者

◇海外調査活動
2014 年 8 月 24 日～9 月 6 日（フィリピン）学生指導及び研究調査
2014 年 9 月 12 日～23 日（イギリス）科研費若手研究（B）「代理懐胎の人類学：英国における代理懐胎の実態と当事者の語りの研究」の調査
2014 年 10 月 11 日～15 日（フィリピン）レイテ島での災害復興支援における現地調査
2014 年 11 月 5 日～11 日（フィリピン）レイテ島での災害復興支援における現地調査
2014 年 11 月 20 日～23 日（フランス）フランス国立科学アカデミーより依頼を受け、国際コロキアム参加

上田晶子（うえだ　あきこ）

----------特任准教授（国際協力グループ）（-2014.09）

【学歴】学習院大学法学部政治学科卒業（1993）、ランカスター大学、国際関係学大学院ディプロマ課程修了（1994）、ロンドン大学東洋アフリカ学院、開発学修士課程修了（1995）、ロンドン大学東洋アフリカ学院、開発学博士課程修了（2001）【職歴】在インド日本国大使館専門調査員（2001-2004）、国連開発計画ブータン事務所、コーディネーションオフィサー（2004-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2007-2014）【学位】開発学博士（ロンドン大学 2001）【専攻・専門】開発学

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績
2014（掲載決定済）“The Impacts of Education and School in Rural Life in Bhutan”, D. Johnson and C. Robles (eds.) *Education, Culture and Modernisation in Bhutan*, Oxford.
2014（掲載決定済）Akiko Ueda and Tashi Samdup, “Chilli Transactions in Bhutan: An Economic, Social and Cultural Perspective”, S. Mullard (ed.) (title not confirmed) Austrian Academy of Social Sciences.

◇教育活動
大阪大学グローバルコラボレーションセンター「人間の安全保障論特講」Ⅰ期
大阪大学グローバルコラボレーションセンター「アカデミック・スキルズ」Ⅰ期
大阪大学薬学研究科「発展途上国における感染症の現状と対策」Ⅰ期
大阪大学リーディング大学院超域イノベーション博士課程プログラム、「超域イノベーション海外実習」Ⅰ期、Ⅱ期
大阪大学リーディング大学院超域イノベーション博士課程プログラム、「アカデミック・スキルズ」Ⅱ期
大阪大学リーディング大学院超域イノベーション博士課程プログラム兼任教員

◇社会活動、センター外活動

Wildlife and Poverty Research Centre, Bhutan 理事

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　基盤研究（C）「ブータンの農村社会内における経済的格差の要因：稲作地域と畑作地域の比較研究」研究代表者

地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」（研究代表者：山本容正）連携研究者

◇海外調査活動

2014 年 7 月 19 日～8 月 8 日（ブータン）科研基盤 C「ブータンの農村社会内における経済的格差の要因」に関する調査、超域プログラムのフィールドスタディの下見、調整

思沁夫（すちんふ）

----------特任准教授（国際協力グループ）

【学歴】内モンゴル自治区芸術学院大學卒業（1979）、中国国際政治大學第二総合学部（法律）卒業（1986）、金沢大学大学院文学研究科修士課程修了（1998）、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程卒業（2002）【職歴】内モンゴル自治区法律専門学校教師（1986-1989）、内モンゴル自治区行政幹部管理大學講師、弁護士（1989-1993）、金沢大学特別研究員／北陸大学非常勤講師（2002-2004）、ドイツ・ボン大学研究員（2004-2005）、ロシア・クラスノヤルスク国立大学特別要請研究員（2005-2007）、大阪大学サスティナビリティサイエンス研究機構特任研究員（2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2007-2010）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）【学位】学術博士（金沢大学 2002）【専攻・専門】文化人類学、生態人類学

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014　思沁夫［編］GLOCOL ブックレット 16『モンゴルの食と生業の現在』大阪大学グローバルコラボレーションセンター（査読有）

2014　『Health Environment Journal』創刊（大阪大学 GLOCOL 電子ジャーナル　http://www.healthenvironment-journal.net/）

2014　「日本からモンゴルへ、そしてモンゴルと」（上）モンゴル国営モンツァメ通信社『モンゴル通信』No.19（第 455 号）p.6.（査読無）

2014　「日本からモンゴルへ、そしてモンゴルと」（下）モンゴル国営モンツァメ通信社『モンゴル通信』No.21（第 457 号）p.6.（査読無）

2014　「ハニ棚田を訪ねて」東北文化研究センター『時空を駆ける、フィールドワーク　東北学 04』はる書房、pp.84-100.（査読有）

2014　塩谷茂樹編訳・著『モンゴルのことばとなぜなぜ話』大阪大学出版会、絵とコラム担当。

2014　「モンゴルの“ニンジャ”、モンゴルの環境」Capital 『KON BAINA UU』 2014.No.13. pp.12-13.（査読無）

2014　思沁夫監修『開発か伝統か、それとも…　技術者のための「エスノグラフィー」ー』ソヨンド・ブリチング出版社ウランバートル（原文：モンゴル語）（査読無）

2014　SI QINFU” From Nomads to Settlers:　A Concise History of the Aoluguya Ewenki (1965–1999) Reclaiming the forest: The Evenki Reindeer Herders of Aoluguya Berghahn Books（査読有）

2014　思沁夫「中国の環境問題―リスク、保護、協働―」大阪大学中国文化フォーラム編『東アジアリスク社会―発展・共識・危機―』アイジイ、pp.7-33.（査読有）

◇講演・口頭発表

2014 年 9 月 3 日、4 日　「森及び草原のエヴェンキ人との比較を通じたエヴェンキ人のアイデンティティ検討」中国民族社会学研究科主催『北方少数民族の社会変化とアイデンティティの再検討（構築）』中国・北京、論文提出。

2014 年 9 月 9 日、10 日　「シャーマンの道具から」サンクトペテルブルク大学歴史学考古学研究所主催　国際会議『物質文化から精神文化の検討』ロシア・サンクトペテルブルク。

2014 年 10 月 24 日　企画、発表、討論参加、コメント「東アジア『生命健康圏』構築に向けて　大気汚染と健康問題を考える日中国際会議」（主催：大阪大学未来研究イニシアティブ、研究提案代表者：田中仁）大阪大学会館アセンブリーホール。（詳細は pp.68-69）

2014 年 11 月 11 日　「モンゴル国オブルハンガイ県オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力活動」公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団　第 3 回シンポジウム『アジアの水と経済、地球の未来」大阪商工会議所国際会議ホール。

◇教育活動

大阪大学サステイナビリティ学教育プログラム・大阪大学人間科学研究科/人間科学部・グローバルコラボレーションセンター協力科目「環境と社会」/「環境と社会特講」Ⅰ期コーディネーター（オムニバス）

大阪大学大学院等高度副プログラム・GLOCOL 教育プログラム「グローバル共生」コーディネーター（オムニバス）

大阪大学グローバルコラボレーション科目「グローバルコラボレーションの理論と実践」、「環境問題への回路Ⅰ」「環境問題への回路Ⅱ」、「環境問題への回路Ⅲ」「環境問題への回路Ⅱ実践演習」、「Food security,globalization and sustainability」、「環境生物学特別講義/発展途上国における感染症対策」コーディネーター・担当

大阪大学グローバルコラボレーション科目「現代中国研究」「グローバル健康学」（オムニバス）

◇社会活動、センター外活動

法廷通訳（講演 2 回、モンゴル語による通訳 4 件、ロシア語 1 件）

中国環境保護 NGO「自然之友」理事

ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合　顧問

ロシアブリヤード共和国民間組織（NGO）「エヴェンキ文化保護・人材育成会」教員

ボン大学　特別要請研究員

北京大学　客員教授

中国農業大学　客員教授

普洱学院大学　特別要請教授

国立民族学博物館　共同研究員

総合地球環境学研究所　共同研究員

東北芸術工科大学東北文化センター　共同研究員

北海道立北方民族博物館　研究協力員

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　基盤研究（C）「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」研究代表者

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する研究」（研究代表者：住村欣範）研究分担者

WWF モデル事業「雲南白馬雪山自然保護区における林下資源の持続利用と自立・対話型コミュニティの構築」研究代表者

公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団環境プロジェクト助成事業「モンゴル国オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力行動」研究代表者

公益財団法人小林国際奨学財団「照葉樹林地域のセンターにおける有用植物資源の探査と機能性に関する研究」（研究代表者：平田收正）研究分担者

東北芸術工科大学　東北文化研究センター共同研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」『東アジアにおける民族と集落－生業の置換による集落機能の変容』共同研究者

国立民族学博物館　共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容：比較民族誌的研究」（研究代表者：国立民族学博物館佐々木史郎）研究分担者

◇海外調査活動

2014 年 5 月 31 日～6 月 9 日（モンゴル）りそなアジア・オセアニア財団環境プロジェクト助成事業「モンゴル国オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力行動」

2014 年 8 月 24 日～9 月 23 日（中国、ロシア）科研基盤 C「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」に関する研究調査及び情報収集、北京大学で開催の国際会議での発表

2014 年 11 月 14 日～21 日（中国）雲南大学、普洱学院との共同研究及び学生引率

2015 年 3 月 7 日～17 日（中国）中国大陸における少数民族の集落形成に関する研究調査及び情報収集
2015 年 3 月 21 日～31 日（中国）海外フィールドスタディ「観光化と地域の維持性（中国・雲南）」学生引率

敦賀和外（つるが　かずと）

----------特任准教授（海外体験型教育企画オフィス）
【学歴】国際基督教大学教養学部卒業（1993）、国際基督教大学行政学研究科修士課程修了（2002）【職歴】読売新聞社事業局文化事業部（1993）、国連開発計画アフガニスタン事務所プログラム・オフィサー（2002）、日本国際協力銀行バンコク駐在員事務所コンサルタント（カンボジア担当）（2007）、広島平和構築人材育成センター・プログラムマネージャー（就職支援担当）（2007）、国連日本政府代表部政務部一等書記官（2008）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）、大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム兼任教員（2012-）【学位】行政学修士（国際基督教大学 2002）【専攻・専門】国連研究、平和構築

【2014 年度の活動報告】
◇講演・口頭発表
2014 年 6 月 6 日　大阪大学基礎教育科目「21 世紀の難問を総合的に考える」（ゲスト・スピーカー）
2014 年 10 月 17 日　【学生主催企画】実際どうなの！集団的自衛権 ～PKO と集団的自衛権～（ゲスト・スピーカー）
2014 年 10 月 22 日　国際機関合同アウトリーチ・ミッション（企画・司会進行）（詳細は p.17）
2015 年 1 月 30 日　第 19 回超域スクール ― 海外経験の意味を問う（スピーカー）
2015 年 2 月 12 日　トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムオリエンテーション「海外インターンシップとは」（スピーカー）
◇教育活動
大阪大学グローバルコラボレーション科目「国連政策エキスパート・キャリア形成論」
大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外インターンシップⅠ」「海外インターンシップⅡ」
大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目「開発援助における評価の理論と実践」
大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目「Global Competency and Internship Abroad」
大阪大学国際公共政策研究科「プロジェクト演習（国連安保理研究ワークショップ）」
大阪大学国際公共政策研究科「プロジェクト演習（科学技術とソーシャル・エンタープライズ）」
大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム「超域イノベーション海外実習」
◇外部資金による研究
科学研究費補助金基盤研究（B）「国連安保理改革の重層的研究：歴史、政治、投票力、実効性の観点から」（研究代表者：竹内俊隆）研究分担者
科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）研究分担者
◇海外調査活動
2014 年 11 月 22 日～30 日（ミャンマー）国連フォーラム　ミャンマースタディプログラムに参加し、ミャンマーにおける国連の活動を視察、関係者との意見交換を行うとともに、ミャンマーにおける海外体験型教育プログラムの実施可能性を探る
2015 年 3 月 2 日～11 日（東ティモール）海外フィールドスタディ「東ティモールにおける適正技術の可能性」学生引率

常田夕美子（ときた　ゆみこ）

----------特任准教授（グローバル共生グループ）

【学歴】ロンドン大学東洋アフリカ学院日本語学科・言語学学科卒業（1987）、ロンドン大学東洋アフリカ学院社会人類学修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1997）【職歴】ロンドン商工会議所　特別研究員（1987-1988）、日本学術振興会特別研究員（DC）（1995-1997）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1997-2000）、フリーランス翻訳者（2002-2004）、京都大学人文科学研究所研究支援推進員（2004-2005）、京都大学人文科学研究所研究支援推進員（2006-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2007-2010）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）【学位】学術博士（東京大学 2000）【専攻・専門】文化人類学、南アジア地域研究、ジェンダー研究

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014 “Politics of Relations and the Emergence of Vernacular Public Arena: Global Networks of Development and Livelihood in Odisha” (co-author: Akio Tanabe), in T.A. Neyazi, A. Tanabe and S. Ishizaka eds, *Democratic Transformation and the Vernacular Public Arena in India*, Routledge, pp. 25-44.

2015「第 2 章　空間の再編と社会関係の変容―農村、都市、海外をつなぐ親密ネットワーク」三尾稔・杉本良男編『現代インド 6　環流する文化と宗教』、東京大学出版会、pp. 51-72.

2015「第 6 章　赤ちゃん工場、賃貸用の子宮―インドにおける代理出産をめぐって」檜垣立哉編『バイオサイエンス時代から考える人間の未来』勁草書房、pp. 147-177.

◇講演・口頭発表

2014 年 5 月 18 日 “Transformation of Anthropological Studies of South Asia in Japan from the Post-war Years to the Present”, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress、幕張メッセ。

2014 年 10 月 10 日「人類学的フィールドワークの葛藤と苦悩：参与観察はどこまで可能か？」追手門学院大学。

2014 年 11 月 3 日「インド・オディシャー州における村落女性のライフヒストリー」『生活世界の変容とジェンダー：インド高齢女性のライフヒストリーを通して』研究会、神田学士会館京大事務所。

2015 年 3 月 1 日 “Beyond the ‘Baby Factory’: Construction of Intimacy in Commercial Surrogacy Practices in India”, Intimate Lives of Intimate Laborers, A Workshop. Session 2 Mother-child intimacy in transition、早稲田大学。

◇教育活動（大阪大学および他機関における担当講義）

大阪大学大学院等高度副プログラム・グローバルコラボレーションセンター科目「グローバル共生実践演習」Ⅱ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目「海外フィールドスタディ（A）」Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目「海外フィールドスタディ（B）」Ⅱ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目 Global Competency and Internship Abroad　Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター科目／大阪大学 G30 プログラム　Gender and Development　Ⅱ期

◇社会活動、センター外活動（学会役員、民間団体役員など）

リエゾン・クリエイティブ・アカデミー、クリエーションサポーター

◇科研費による研究、その他の外部資金

科学研究費補助金　基盤研究（C）「現代インドにおける都市村落混住地域とグローカルネットワーク―社会空間の視点から」研究代表者

人間文化研究機構『現代インド地域研究』京都大学拠点メンバー

大阪大学最先端ときめき研究推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」研究メンバー

京都大学人文科学研究所「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究 ― 物語からモニュメントまで」共同研究班員

◇海外調査活動

2014 年 8 月 1 日～9 月 4 日（インド）科研費基盤 C「現代インドにおける都市村落混住地域とグローカルネットワーク ― 社会空間の視点から」の調査・資料収集

2014 年 11 月 8 日～15 日（バングラデシュ）JICA パートナーシップセミナーへの参加

2014 年 12 月 20 日～29 日（インド）オディシャー州における女性の口頭伝承の調査および資料収集

2015 年 2 月 1 日～26 日（インド）科研費基盤 C「現代インドにおける都市村落混住地域とグローカルネットワーク ― 社会空間の視点から」の調査・資料収集

本庄かおり（ほんじょう　かおり）

----------特任准教授（海外体験型教育企画オフィス）

【学歴】関西学院大学経済学部卒業（1986）、Boston University School of Public Health, Social Behavior and Health Dept. MPH 取得修了（1997）、Harvard University School of Public Health, Health and Social Behavior Dept. M.Sc. 取得修了（2002）、岡山大学大学院医歯薬総合研究科衛生学・予防医学分野博士（医学）取得（2005）【職歴】大阪大学大学院医学系研究科社会環境医学公衆衛生学教室特任研究員（2005-2007）、大阪大学大学院医学系研究科「医科学修士健康医療問題解決能力の涵養」教育プログラム特任助教（2007-2010）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2010-）【学位】博士（医学）、MPH【専攻・専門】社会疫学、公衆衛生学、健康社会行動科学、健康格差研究

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2015 Honjo K, Nakaya T, Hanibuchi T, Ikeda A, Iso H, Inoue M, Sawada N, Tsugane S, Japan Public Health Center-based Prospective Study Group. Impact of neighborhood socioeconomic conditions on the risk of stroke in Japan. J Epidemiol.;25(3):254-260.

2015 Hanibuchi T, Nakaya T, Honjo K , Ikeda A, Iso H, Inoue M, Sawada N, Tsugane S, Japan Public Health Center-based Prospective Study Group. Neighborhood contextual factors for smoking among middle-aged Japanese: A multilevel analysis. Health & Place; 31:17-23.

2015 「女性の貧困と健康」『公衆衛生』79（2）:116-120.

2015 「日本における健康の社会格差」『公衆衛生』79（1）:30-35.

2014 Honjo K, Iso H Response to letter regarding article “Socioeconomic status inconsistency and risk of stroke among Japanese middle-aged women”. Stroke: 45(12): e307

2014 Honjo K, Iso H, Inoue M, Sawada N, Tsugane S, for the JPHC Study Group. Socioeconomic status inconsistency and risk of stroke among Japanese middle-aged women. Stroke；45(9):2592-8. doi: 10.1161/STROKEAHA.

2014 「精神健康の社会格差:そのメカニズムを解明する 精神健康の社会階層間格差」『ストレス科学』28:4（4）: 239-245.

2014 Nakaya T, Honjo K, Hanibuchi T, Ikeda A, Iso H, Inoue M, Sawada N, Tsugane S, Japan Public Health Center-based Prospective Study Group. Associations of all-cause mortality with census-based neighbourhood deprivation and population density in Japan: a multilevel survival analysis. Plos one;9(6):e97802. doi: 10.1371/journal.pone.0097802. eCollection 2014.

2014 Honjo K, Iso H, Fukuda Y, Nishi N, Nakaya T, Fujino Y, Tanabe N, Suzuki S, Subramanian SV, Tamakoshi A, and for the JACC Study Group. Influence of municipal- and individual-level socioeconomic conditions on mortality in Japan. Int J Behav Med; 21(5):737-49.

◇講演・口頭発表

・学会発表

2014 年 7 月 17 日　第 114 回 GLOCOL セミナー / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（22）「後悔にもいろいろあるけど：「何もしなかった」vs「やってしまった」」（企画・司会進行）（詳細は p.16）

2014 年 8 月 20 日　International Society of Behavior Medicine Groningen, Holland. Poster Presentation　“Job type and risk of death among Japanese middle-aged women” Kaori Honjo,　Hiroyasu Iso,　Yoshihisa Fujino , Akiko Tamakoshi , For the JACC study group.

2014 年 11 月 7 日　埴淵知哉、中谷友樹、米島万有子、本庄かおり、ポスター発表「全国レベルでみた近隣と健康（1）―ウオーカビリティと身体活動」日本公衆衛生学会、宇都宮。

2014 年 11 月 7 日　中谷友樹、埴淵知哉、米島万有子、本庄かおり、ポスター発表「全国レベルでみた近隣と健康（2）―地理的剥奪と主観的健康感」日本公衆衛生学会、宇都宮。

2014 年 11 月 8 日　江啓発、八谷寛、本庄かおり、李　媛英、崔仁哲、磯　博康、張　燕、王超辰、上村真由、青山温子口頭発表「パラオ若年成人者層における生活習慣病リスク要因について」日本公衆衛生学会、宇都宮。

2014 年 11 月 8 日　本庄かおり、磯　博康、藤野善久、玉腰暁子、JACC 研究グループ、口頭発表「わが国の中高年女性における職業タイプと総死亡リスクの関連：JACC Study」日本公衆衛生学会、宇都宮。

2015 年 1 月 23 日　江口江里、磯　博康、本庄かおり、玉腰暁子、JACC 研究グループ口頭発表「Does education modify the association between healthy lifestyle behaviors and cardiovascular mortality?: The JACC study」日本疫学会、名古屋。

2015 年 1 月 23 日　本庄かおり、磯　博康、澤田典絵、井上真奈美、津金昌一郎、JPHC 研究グループ、口頭発表「社会的地位の不一致と脳卒中罹患リスク：JPHC 研究」日本疫学会、名古屋。

・講義・講演

2014 年 8 月 9 日　「健康の社会決定要因としてのジェンダー」第 5 回大阪公衆衛生セミナー：健康の社会決定要因、大阪：大阪大学最先端医療イノベーションセンター。

2014 年 10 月 21 日　「健康の社会決定要因としてのジェンダー」長崎大学医歯薬総合研究科　大学院セミナー、長崎：長崎大学。

2014 年 11 月 13 日　「社会的健康決定要因としてのジェンダー」東京大学公共健康医学専攻　講義「社会と健康」東京大学。

2015 年 2 月 13 日　企画・司会進行、第 122 回 GLOCOL セミナー / FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（24）「英語もダメ、大学も不合格だった私が、子育てしながら、国連職員へ」（詳細は pp.17-18）

◇教育活動

大阪大学大学院等高度副プログラム「グローバル健康環境」

大阪大学グローバルコラボレーション科目「グローバル健康環境」Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーション科目「環境問題への回路」オムニバスⅠ期

大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外フィールドスタディ A」　Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外フィールドスタディ B」　II 期

大阪大学医学系研究科「疫学総論」オムニバスⅠ期

大阪大学医学系研究科「疫学各論」オムニバスⅠ期

東京大学医学系研究科「社会と健康」オムニバス II 期

大阪大学 GLOCOL 海外フィールドスタディ「グローバル人材ゲートウェイ・プログラム：ボストン ハーバード大学・MIT 研修」学生引率

◇社会活動、センター外活動

日本公衆衛生学会評議員

日本疫学会評議員

Journal of Epidemiology Associate editor

大阪大学大学院医学系研究科兼任

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　基盤研究（C）「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」研究代表者

科学研究費補助金　基盤研究（A）「社会心理要因から循環器疾患に至るプロセス解明のための社会・健康科学融合研究」（研究代表者：磯　博康）分担研究者

科学研究費補助金　基盤研究（A）「オセアニア・南アジアの労働者。低所得における生活習慣病の実態と社会的危険因子」（研究代表者：名古屋大学　青山温子）分担研究者

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）分担研究者

科学研究費補助金　基盤研究（A）「世界精神保健日本追跡調査：地域住民における精神疾患の 10 年間のコホート研究」（研究代表者：東京大学　川上憲人）連携研究者

地球規模課題対応国際科学技術協力事業「薬剤耐性最近発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」（研究代表者：山本容正）連携研究者

◇海外調査活動

2014 年 8 月 19 日～31 日（オランダ）グローニンゲンで開催される 2014 International Congress of Behavior Medicine で研究発表ならびに研究打ち合わせ　その後、ロッテルダムにて Erasmus Medical Center Rotterdam で行われるセミナーに参加

2015 年 3 月 22 日～30 日（イギリス）科研費基盤 C「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」調査及び情報収集、共同研究者と研究打合せ

吉富志津代（よしとみ　しづよ）

----------特任准教授（グローバル共生グループ）

【学歴】京都外国語大学イスパニア語学科卒業（1979）、神戸大学大学院国際協力研究科修士課程修了（2005）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了（2008）【職歴】在神戸アルゼンチン総領事館（1979）、在神戸ボリビア名誉総領事館（1990）マリアテレサスペイン語スクール非常勤講師（1990）、在大阪ボリビア名誉総領事館準備室（1994）、株式会社エフエムわいわいプロデューサー（1996）、特定非営利活動法人多言語センターFACIL 理事長（1999）、財団法人入管協会インフォメーションセンタースペイン語相談員（2000）、関西学院大学非常勤講師（2005）、関西大学非常勤講師（2009）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター（2011-）【学位】国際学修士（神戸大学 2005）、人間・環境学博士（京都大学 2008）【専攻・専門】国際協力政策、公共政策、多文化共生、南米研究

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014　「多文化共生」『3.11 以前の社会学』生活書院

2014　「変容するボリビアの日本人学校」コラム異聞逸聞『月刊みんぱく』国立民族学博物館

2015　2014 年度 GLOCOL フィールドスタディ（インドネシア）「コミュニティ防災ー命を守るためのつながりを学ぶ」報告書

2015　「兵庫県医療通訳調査検討事業　医療通訳調査報告書」特定非営利活動法人多言語センターFACCIL

◇講演、口答発表

2014 年 4 月 29 日　公開講義「映画『HAFU』が示唆するもの」パリ第 7 大学内国立東洋言語文化大学（INALCO）フランス

2014 年 5 月 13 日　芦屋市職員研修『多言語情報の基礎』

2014 年 5 月 17 日　あーすフェスタかながわ 2014 外国籍県民フォーラム 基調講演「私たちの『まち』で、私たちは次の世代に何を伝えるのか？」

2014 年 5 月 28 日　長田商工会議所セミナー『NPO の多言語／多文化ビジネス ― 長田区のまちづくり提言へ』

2014 年 6 月 13 日　阪神シニアカレッジ国際理解学科　授業

①「外国人支援の実践 ― グローバル社会のコミュニティ防災」

②「市民国際協力の実践 ― NGO/NPO がめざす多文化共生社会」

2014 年 6 月 29 日　とよなか男女共同参画セミナー「地域を元気にする居場所づくり、出番づくり」

2014 年 8 月 1 日　医療通訳説明会「兵庫県の医療通訳システムの現状と課題」三木市国際交流協会

2014 年 8 月 24 日　「多文化共生フォーラム in Nagoya：多様性がもたらす豊かな地域社会へ」分科会『公教育のなかの挑戦』コメンテーター

2014 年 8 月 28 日　教員研修「多文化共生（教育）」真野小学校／真陽小学校

2014 年 9 月 23 日　トヨタ財団事業「わたしのことば、わたしの道 ― 外国につながる子どもたちの言語教育実践から」（詳細は p.81）

2014 年 9 月 24 日　医療通訳説明会「兵庫県の医療通訳システムの現状と課題」宝塚市国際交流協会

2014 年 11 月 8 日　多文化関係学会パネルディスカッション「マイノリティと災害ラジオ」福島市

2014 年 11 月 14 日　職員研修「やさしいにほんごによる情報提供」芦屋市国際交流協会

2014 年 11 月 15 日「異文化理解」兵庫県生きがい創造協会／ふるさとひょうご創生塾

2014 年 11 月 18 日　阪神シニアカレッジ国際理解学科　授業

①「外国人とのコミュニティづくり」

②「多言語・多文化共生社会」

2014 年 12 月 2 日　豊中市職員人権研修「誰も排除されない社会のために ― コミュニティ防災の視点で考える多文化共生」

2014 年 12 月 13 日　移民政策学会シンポジウム『外国にルーツをもつ若者たちのさまざまな発信で変える社会』大阪大学

2014 年 12 月 14 日　地域の国際化セミナー　基調講演「グローバル社会のコミュニティ防災」名古屋国際センター

2015 年 1 月 9 日　創造都市ポートランドセミナー　コーディネート

2015 年 1 月 11 日　加川広重 巨大絵画が繋ぐ 巨大絵画が繋ぐ東北と神戸パネルディスカッション『被災地発 未来へ拓く街づくり』

2015 年 1 月 20 日　多文化共生マネージャー研修『行政と NPO の協働 ― TCC の活動から』全国市町村国際文化研修所（JIAM）
2015 年 1 月 21 日　JICA 中米防災研修『災害とラジオ』
2015 年 1 月 22 日　岡山県地域国際化推進団体連絡協議会　研修会『誰も排除されない社会のために ― コミュニティ防災の視点で考える多文化共生』
2015 年 1 月 24 日　大阪大学未来共生セミナー「『日本における外国人への防災対策の現状とその問題点』― 災害時における多文化アプローチ」コーディネーター
2015 年 1 月 25 日　パネルディスカッション『東日本大震災被災地との絆』活動報告　～阪神淡路震災 20 年・多文化共生をめざして～「つどい」
2015 年 1 月 27 日　関西学院大学大学院ワークショップ「国際的な人の移動と社会統合」
2015 年 2 月 13 日　翻訳／通訳ボランティア研修　静岡県湖西市
2015 年 2 月 26 日　スロベニア移民研究所公開セミナー「Relations between Communities and Local Media in a Disaster: -Minority Perspective Seen from Examples-」（『災害時のローカルメディアとコミュニティの関わり ― 実践事例から考えるマイノリティの視点』）
2015 年 3 月 4 日　関西学院大学の研究会「イスラームの復興とイスタンブルにおけるライフスタイルの変容」
2015 年 3 月 28 日　「阪神・淡路大震災から東日本大震災へ ― 多言語支援の歩みと課題」大田区多文化共生推進センター

◇教育／実践活動

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「グローバルコラボレーションの理論と実践」
大阪大学グルーバルコラボレーションセンター「グルーバル共生実践演習」
大阪大学全額共通教育科目「現代社会を読み解く ― グルーバル化とコミュニティ」
大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム「超域学際・ボランティア実践論」
大阪大学グローバルコラボレーションセンター「海外フィールドスタディ・インドネシア／コミュニティ防災」企画・事前学習・実施
大阪大学グローバルコラボレーションセンターが主催してきた「足もとの国際化連続セミナー企画から発展して始まった「ミックスルーツ研究会」の実施（詳細は pp.73-74）
大阪大学グローバルコラボレーションセンターが共同主催とし、学会企画委員長として、JCAS（地域研究コンソーシアム）と連携して、移民政策学会 2014 年度冬季大会を阪大にて開催（詳細は pp.75-77）
大阪大学グローバルコラボレーションセンター「東日本大震災支援活動」総括として国連世界防災会議に参加（詳細は p.64）
京都外国語大学「NPO/NGO 活動入門」（春学期）、「コミュニティビジネス」「プロジェクト科目 ― 外国人コミュニティとエスニックメディア」（秋学期）
関西学院大学／関西学院大学大学院「多言語・多文化社会」（春学期後半／夏期集中講座）
トヨタ財団助成事業「二つ以上の言語環境で暮らしている外国につながる子どもたちの教育に関する提言」の実施（詳細は p.81）

◇社会活動、センター外活動

移民政策学会常任理事・企画委員長
大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員
財）兵庫県人権啓発協会人権問題研究アドバイザー
兵庫県県民生活審議会委員
財）箕面市国際交流協会評議員
兵庫県長期ビジョン審議会委員
ひょうご市民活動協議会共同代表
特定非営利活動法人多言語センター理事長
特定非営利活動法人エフエムわぃわぃ代表理事
特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター常務理事
西日本地区入国者収容所等視察委員
特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会評議員
東大阪市外国籍住民施策懇話会委員　　など

◇海外調査活動

2014 年 4 月 25 日～5 月 7 日（フランス）パリ大学日本語学部より、4 月 29 日に開催される日本における移民の若者をテーマとした映画『HAFU』に関するディベートのコメンテーターとして招聘

2014 年 5 月 18 日～25 日（アメリカ）トヨタ財団採択プログラム「外国人児童生徒の言語形成を保障するバイリンガル教育環境推進のための政策提言」のために、先駆的な二言語教育を実施しているミシガン州のひのきインターナショナルスクールを視察

2014 年 7 月 21 日～26 日（インドネシア）GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム（A）「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施にむけた準備

2014 年 8 月 31 日～9 月 9 日（インドネシア）GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム（A）「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施

2014 年 11 月 19 日～26 日（インドネシア）GLOCOL 海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）海外フィールドスタディ・プログラム（S）「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施地にて、「多文化共生」に関する神戸の実践活動の内容共有

2014 年 12 月 16 日～19 日（韓国）トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において連携する韓国の団体などとの打ち合わせ

2015 年 1 月 29 日～2 月 1 日（韓国）トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において、連携する韓国の団体などとの二回目の打ち合わせ

2015 年 2 月 23 日～3 月 8 日（スロベニア、トルコ）スロベニア移民局にてレクチャーと情報交換、トルコにてドイツへの移民家族の調査、および関西学院大学の研究セミナー「イスラームの復興とイスタンブルにおけるライフスタイルの変容」に参加

安藤由香里（あんどう　ゆかり）

----------特任助教（海外体験型教育企画オフィス）

【学歴】エジプト・オルマンスクールアラビア語修了（1994）、チュニジア・ブルギバ言語学研究所アラビア語修了（1995）、英国ウォリック大学大学院法学研究科開発法専攻修士課程修了（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2000）、パリ第 11 大学法学研究科博士課程／人権・人道法センター日仏共同博士課程コンソーシアム（2008）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士後期課程退学（2009）【職歴】国連フィジー選挙監視団（UNFEOM）選挙監視員（2000）、真法律事務所スタッフ（2002-2004）、名古屋外国語大学現代国際学部アシスタントインストラクター（2003-2005）、中央大学研究開発機構準研究員（2006）、トラベルジャーナル旅行専門学校非常勤講師（2006）、内閣府国際平和協力本部事務局研究員（2009-2011）、日本政府スーダン総選挙監視団選挙監視員（2010）、日本政府スーダン住民投票監視国際平和協力隊先遣隊・本隊（2010-2011）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2011-）【学位】法学修士（ウォリック大学 1999）、学術修士（名古屋大学 2000）【専攻・専門】国際人権法・難民法、国際協力

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2015　「退去強制による子の親からの分離（子の福祉・最善の利益）」新・判例解説編集委員会編『速報判例解説 Vol.16 法学セミナー増刊新・判例解説 Watch』日本評論社

2015　「翻訳：シェラリオネ FGM 事件における法人類学者の鑑定書英国移民難民上訴審判所 AF 対内務省大臣（2014.1.30 決定）」『国際公共政策研究』第 19 巻 2 号

2015　「海外プレ・インターンシップの教育効果に関する一考察」『大阪大学高等教育研究』第 3 号

2014　新・判例解説 Watch「退去強制による子の親からの分離（子の福祉・最善の利益）」https://www.lawlibrary.jp/pdf/z18817009-00-090301154_tkc.pdf

◇講演・口頭発表

2015 年 2 月 13 日 EUIJ 関西主催高校生向け講演会「EU における人種差別・不寛容撤廃への取り組み：イスラム嫌いを

中心に」金蘭千里高校

2015 年 2 月 23 日 大阪大学国際公共政策研究科国際シンポジウム「グローバリゼーションの時代の人種主義と不寛容」
http://www.osipp.osaka-u.ac.jp/en/event/Abstract%20and%20short-bio%20%2820150223%20Symposium%20-%20OSIPP%29.pdf

2015 年 3 月 7 日 ポスター発表「大学教職員のリスク管理シミュレーションのすすめ : 海外体験型教育推進の準備と心構え」大学教育改革フォーラム in 東海、名古屋大学

◇教育活動

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「難民問題から世界を見る」

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「海外インターンシップⅠ・Ⅱ」

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「海外フィールドスタディ・オランダ国際司法・平和の現場を知る」企画・引率

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「国連政策エキスパート・キャリア形成論」

2014 年 11 月 14 日 GLOCOL ブラウンバッグランチ・セッション「将来に活きるインターン・短期留学への挑戦」大阪大学の大学院生（詳細は pp.18-19）

2014 年 11 月 27 日 特別セミナーアラン・マッキー判事の難民法講座“Understanding the Refugee Convention and other International Protection Law” （詳細は p.71）

2014 年 12 月 4 日 GLOCOL ブラウンバッグランチ・セッション「語学力を活かして警察で働くとは」田島達也警部（大阪府警教養課通訳センター課長補佐）（詳細は p.19）

◇社会活動、センター外活動

弁護士とのネットワーク（難民インターン・コーディネート）

◇外部資金による研究

科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）研究分担者

◇海外調査活動

2015 年 3 月 14 日～23 日（オランダ）海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る」学生引率

小峯茂嗣（こみね しげつぐ）

----------特任助教（国際協力グループ）

【学歴】東海大学法学部法律学科卒業（1994）、横浜国立大学国際社会科学研究科国際経済法学系博士前期課程国際関係法専攻修了（2001）、横浜国立大学国際社会科学研究科博士後期課程国際開発専攻単位取得満期退学（2004）【職歴】早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師（インストラクター）（2004-2007）、成蹊大学文学部非常勤講師（2007）、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師（非常勤扱）（2007-2010）、東京外国語大学大学院総合国際学研究科平和構築・紛争予防専修コース非常勤研究員（2007-2010）、成蹊大学文学部非常勤講師（2008-）、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員准教授（非常勤扱）（2010-2013）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2010-）、大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻兼任教員（2013-）、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター ボランティアコーディネーター（2013-）【学位】国際経済法学修士（横浜国立大学 2001）【専攻・専門】平和構築、平和・紛争研究

【2014 度の活動報告】

◇出版業績

2014「ジェノサイドから 20 年のルワンダ」一般社団法人アフリカ協会『アフリカ』Vol. 54

◇講演・口頭発表

2014 年 7 月 26 日「ルワンダのジェノサイド―『民族対立』はいかにして作られたのか」地域研究コンソーシアム公開シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか」（詳細は pp.78-80）

2014 年 12 月 7 日「日本列島と朝鮮半島―北東アジアの国際関係からの視点」在日本朝鮮留学生同盟主催「日朝友好大学生フォーラム」

2015 年 3 月 15 日「ウガンダの内戦と子ども兵士問題」公益財団法人箕面市国際交流協会「映画『見えない子どもたち』をみて紛争について考えよう！」

◇教育活動

大阪大学グローバルコラボレーション科目「海外フィールドスタディ」
大阪大学グローバルコラボレーション科目「トランスカルチュラル・スタディⅠ」
大阪大学グローバルコラボレーション科目「トランスカルチュラル・スタディⅡ」
大阪大学工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻「ビジネスエンジニアリング研究」
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認「日本コリア未来プロジェクト」コーディネーター
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認「日本ルワンダ学生会議」コーディネーター
成蹊大学文学部「国際協力論」（後期）
成蹊大学文学部「国際協力論特講 B」（後期）

◇社会活動、センター外活動

NGO アフリカ平和再建委員会（ARC）運営委員（事務局長）
特定非営利活動法人インターバンド　代表理事

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」（研究代表者：大村悦二）研究分担者

◇海外調査活動

2014 年 4 月 4 日～17 日（ルワンダ共和国）科研費（挑戦的萌芽研究「ルワンダのガチャチャ裁判による和解醸成効果に関する研究」研究代表者 小峯茂嗣）の現地調査
2014 年 8 月 27 日～9 月 2 日（朝鮮民主主義人民共和国）「大学生・大学教員のための朝鮮ツアー」参加による、現地視察（平壌、開城、板門店）および大学研究者、大学生（平壌外国語大学）との交流
2014 年 9 月 4 日～13 日（バングラデシュ）海外フィールドスタディ「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」の学生引率
2014 年 11 月 11 日～23 日（ルワンダ）科研費挑戦的萌芽研究「ルワンダのガチャチャ裁判による和解醸成効果に関する研究」の現地調査
2015 年 2 月 15 日～3 月 8 日（ルワンダ）科研費挑戦的萌芽研究「ルワンダのガチャチャ裁判による和解醸成効果に関する研究」の現地調査

小河久志（おがわ　ひさし）

----------特任助教（海外体験型教育企画オフィス）（-2015.03）

【学歴】法政大学文学部地理学科卒業（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科地域文化学専攻博士前期課程修了（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2010）【職歴】国際交流基金アジアセンター次世代リーダーフェローシップフェロー（2004）、同志社大学一神教学際研究センターCOE 奨励研究員（2006-2008）、京都文教大学人間学部文化人類学科特任実習職員（2010-2012）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2012）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2012-2015）【学位】学術修士（神戸大学　2003）、文学博士（総合研究大学院大学　2011）【専攻・専門】文化人類学、東南アジア地域研究、災害社会学

【2014 度の活動報告】

◇出版業績

2014「ムスリムの信仰生活」綾部真雄（編）『タイを知るための 72 章』明石書店、pp.185-188。
2014「マレー系ムスリム」綾部真雄（編）『タイを知るための 72 章』明石書店、pp.226-229。
2014「ハジャイ」綾部真雄（編）『タイを知るための 72 章』明石書店、pp.346-349。
2015“Expansion and Control: Islamic Basic Education in Thailand under Multicultural Circumstances”, In I. Tokoro (ed),Islam and

Cultural Diversity in Southeast Asia, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp.71-91.

◇講演・口頭発表

2014 年 5 月 15 日“The 2004 Indian Ocean Tsunami image seen from the religious practices: Tsunami disaster and globalization in a Muslim community of southern Thailand”, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congresses, Makuhari Messe.

2015 年 3 月 13 日“Dividing Community: Recovery Process of the Indian Ocean Tsunami-affected Areas in Southern Thailand”, Third UN World Conference on Disaster Risk Reduction, Public Forum, Sendai Civic Auditorium.

◇教育活動

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「海外フィールドスタディ B」

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「マイノリティとグローバリゼーション」

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「東アジアの環境の現状と未来」（オムニバス）

京都外国語大学外国語学部「国際社会と地域 5 アジアⅠ」（前期）、「国際社会と地域 5 アジアⅡ」（後期）

法政大学リベラルアーツセンター「文化人類学Ⅰ」（前期）、「文化人類学Ⅱ」（後期）

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「学生海外渡航時のリスク管理（予防・対策）に関する研究」（研究代表者：大橋一友）研究分担者

国立民族学博物館　共同研究「NGO 活動の現場に関する人類学的研究 ― グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」（研究代表者：国立民族学博物館　信田敏広）研究分担者

総合地球環境学研究所　プロジェクト研究「東南アジア沿岸地域におけるエリアケイパビリティーの向上」（研究代表者：総合地球環境学研究所　石川智士）研究分担者

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究」（研究代表者：AA 研　床呂郁哉）研究分担者

国立民族学博物館共同研究「宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究」（研究代表者：武蔵大学　石森大知）研究分担者

人間文化研究機構イスラーム地域研究推進事業上智大学拠点研究「東南アジア・ムスリムと近代」研究協力者

◇海外調査活動

2015 年 2 月 8 日～17 日（ラオス）海外フィールドスタディ B「開発と社会・環境変化」学生引率

大野光明（おおの　みつあき）

----------特任助教（国際協力グループ）

【学歴】立命館大学国際関係学部卒業（2001）、立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫性博士課程修了（2012）【職歴】（財）日本国際協力センター職員（2001-2006）、独立行政法人国際協力機構（JICA）エチオピア事務所職員（出向）（2007-2009）、（財）日本国際協力センター職員（2009-2011）、日本学術振興会特別研究員（2011-2012）、立命館大学 GCOE「生存学」プロ倉宇創成拠点リサーチ・アシスタント（2011-2012）、四国学院大学非常勤講師（2012-）、日本学術振興会特別研究員（2012-2013）、立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員（2013-）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2013-）、同志社大学＜奄美－沖縄－琉球＞研究センター学外研究員（2013-）【学位】学術博士（立命館大学 2012）【専攻・専門】歴史社会学、社会思想史、社会運動論、マイノリティ論

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014　『沖縄闘争の時代 1960/70 ― 分断を乗り越える思想と実践』人文書院.（単著）

2014　『戦後史再考 ―「歴史の裂け目」をとらえる』平凡社.（共編著）

2014　「「戦後」をとらえかえしたベ平連運動」、立命館大学国際平和ミュージアム（編）『図録　秋季特別展　ピース☆

スタイル』

2014 「これからの市民運動、あるいは運動経験の継承ということ」立命館大学国際平和ミュージアム編『図録　秋季特別展　ピース☆スタイル』

2014 「軍事占領に向きあう ― 京都府京丹後市での米軍 X バンドレーダー搬入をめぐって」『インパクション』197 号.

2014 「軍事占領の現在形 ― 丹後・宇川地区での米軍基地建設の進行と抵抗運動」『PACE』9 号.

2015 「『国民国家論』継ぎ未来を問う」『毎日新聞』2015 年 1 月 9 日朝刊.

2015 「沖縄と京都　声上げつなぐ（知を拓く　研究最前線 4）」『京都新聞』2015 年 1 月 15 日朝刊.

2015 「沖縄闘争の時代から現在へ ― 拙著『沖縄闘争の時代 1960/70』（人文書院、2014）について」立教大学共生社会研究センター『PRISM』6 号.

2015 「ベ平連運動の時代から現在へ」『立命館平和研究』16 号.（共著）

◇講演・口頭発表

2014 年 4 月 7 日、5 月 6 日　「京都米軍基地　①　② ～大野光明さんに聞く～」、ラジオ放送「PEACE by PIECE」、京都三条ラジオカフェ.

2014 年 10 月 31 日　「〈新〉植民地主義論という光のもとで、「沖縄問題」を考える ― 連関と共振のなかにある「沖縄」」、立命館大学国際言語文化研究所、連続講座「西川長夫 ― 業績とその批判的検討」、立命館大学.

2014 年 11 月 8 日　「軍事化に抗するということ ― 京都府京丹後市での米軍基地建設問題をめぐって」、日本平和学会秋季研究集会、鹿児島大学.

2014 年 11 月 15 日　「解説」、立命館大学国際平和ミュージアム（秋季特別展『ピース☆スタイル』）、公開記念上映会「イントレピッドの 4 人」（1967 年、ベ平連製作）、立命館大学充光館地階 301 教室.

2014 年 11 月 29 日　「沖縄闘争の時代から現在へ、あるいは沖縄と京都へ」、『沖縄闘争の時代 1960／70　分断を乗り越える思想と実践』を書いた大野光明さんと一緒に話す会、カライモブックス.

2015 年 1 月 24 日　「京丹後米軍レーダー基地建設問題」、KBS 京都ラジオ「早川一光のばんざい人間」.

2015 年 1 月 25 日　「京都と沖縄の基地問題を考える」、琵琶湖とあしたの今に vol.2、でこ姉妹舎.

2015 年 2 月 21 日　「米軍基地と抵抗運動の歴史と現在」、立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会、映画『基地の町に生きる』上映会×トーク、立命館大学.

2015 年 2 月 22 日　「原発と差別、戦後日本を再考するために」、2・22 シンポジウム実行委員会、シンポジウム「原発と差別、戦後日本を再考する」、在日本韓国 YMCA アジア青少年センター.

2015 年 3 月 1 日　「現在進行形の軍事化を問う ― 京都府京丹後市における米軍基地建設をめぐって」、立命館大学平和主義研究会第 5 回「社会運動はどのように平和をつくるか ― 米軍基地・被爆体験・3.11 体験」、立命館大学.

◇教育活動

大阪大学グローバルコラボレーション「理論と実践」I 期

大阪大学全学教育推進機構「平和の問題を考える ― 多角化する国際協力」II 期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「マイノリティとグローバリゼーション」II 期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター　海外フィールドスタディ（ラオス）「開発と社会・環境変化」II 期

四国学院大学平和学特講（サマーセッション）

◇社会活動、センター外活動

同時代史学会　関西研究会委員

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　若手研究（B）「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学－太平洋を横断するネットワークの視点から」研究代表者

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「発展途上国の農業支援ものづくりを志向したフィールド教育の実施と教育効果の分析」（研究代表者：大村悦二）研究分担者

◇海外調査活動

2015 年 2 月 8 日～17 日（ラオス）海外フィールドスタディ B「開発と社会・環境変化」学生引率

2015 年 3 月 6 日～20 日（アメリカ）科研費若手研究 B「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学 ― 太平洋を横断するネットワークの視点から」調査及び情報収集

中山達哉（なかやま　たつや）

----------特任助教（国際協力グループ）（-2015.03）

【学歴】群馬大学教育学部卒業（2001）、筑波大学大学院生命環境科学研究科博士一貫過程卒業（2006）【職歴】筑波大学特別博士研究員（2006）、ダイセル化学工業短期派遣研究員（2006）、University of Dundee, Ninewells Hospital and Medical School, Microbiology and Gut biology group, Postdoctoral Fellow（2006-2008）、国際農林水産業研究所特任研究員（2008-2009）、大阪大学微生物病研究所感染症国際研究センター特任研究員（2009-2013）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教（2013-2015）【学位】生物工学博士（筑波大学 2006 年）【専攻・専門】感染症学、病原微生物学、食品衛生学

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2014. T. Nakayama* and K. Ezoe. Heat incubation inactivates streptococcal exotoxins and recombinant cholesterol-dependent cytolysins: suilysin, pneumolysin, and streptolysin O. Current Microbiology 69: pp690-8.

2015. T. Nakayama, S. Ueda, BTM Huong, LD Tuyen, C. Komalamisra, T. Kusolsuk, I. Hirai, and Y. Yamamoto. Wide dissemination of extended spectrum beta-lactamase-producing Escherichia coli in community residents in the Indochinese peninsula. Infection and drug resistance. 8:pp 1 -5.

2015. Characteristics of extended spectrum beta-lacatamase-producing Escherichia coli in retail meats and shrimp at a local market in Vietnam. LQ. Phong, S. Ueda, TNN. Hue, TVD. Khanh, TAH. Van, TTT. Nga, I. Hirai, T. Nakayama, R. Kawahara, TD Hung, QV Mai and Y. Yamamoto. Foodborn pathogen and disease.　In press

◇講演・口頭発表

2014 年 12 月 5 日「豚連鎖球菌産生コレステロール依存性細胞溶解毒素による腸管上皮細胞への影響について」第 108 回日本食品衛生学会　学術講演会

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　若手研究（B）「経口ルートによる豚連鎖球菌感染症の発症メカニズムの解明」研究代表者

◇海外調査活動

2014 年 4 月 15 日～19 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る現地サンプリング参加

2014 年 5 月 30 日～6 月 3 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る現地サンプリング参加

2014 年 6 月 18 日～24 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る現地サンプリング参加

2014 年 7 月 29 日～8 月 7 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る中間評価会議参加

2014 年 10 月 19 日～24 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る打合せ、調査研究

2014 年 11 月 24 日～27 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係るプログレス会議出席

2014 年 12 月 15 日～20 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ出席

2015 年 3 月 18 日～26 日（ベトナム）SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ出席

福田州平（ふくだ　しゅうへい）

----------特任研究員（グローバル共生グループ）

【学歴】東海大学文学部北欧文学科卒業（1998）、東京国際大学大学院国際関係学研究科修士課程修了（2000）、中部大学大学院国際関係学研究科博士後期課程修了（2004）【職歴】中部大学リサーチ・アシスタント（2001-2004）、中部大学人間安全保障研究センター非常勤研究員（2004-2006）、中部大学国際交流センター嘱託事務員（2006-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任研究員（2007-）【学位】博士（国際学）（中部大学 2004）【専攻・専門】国際関係論

【2014 年度の活動報告】

◇出版業績

2015　「フィラデルフィア万博における諸外国の参加をめぐって ― 日本と中国の展示をめぐる評価のディスコースとアメリカのアイデンティティおよびイデオロギー」『インターカルチュラル』13 号、pp.95-112。

2015　三橋利光（監訳）、松本行広（監訳）、武者小路研究会（訳）、武者小路公秀（著）『国際社会科学講義 ― 文明間対話の作法』（国際書院、2015 年 1 月）、第 1 章翻訳担当。

◇講演・口頭発表

2014 年 7 月 5 日「フィラデルフィア万博の開催における外国の参加」第 13 回日本国際文化学会全国大会、山口県立大学

2014 年 8 月 8 日「フィラデルフィア万博における日中展示の評価をめぐって（予備発表）」OUFC セミナー（鄭州会議予備発表会）、大阪大学豊中キャンパス。

2014 年 8 月 24 日「フィラデルフィア万博における日中展示の評価をめぐって」第 8 回現代中国と東アジアの新環境、中華人民共和国・鄭州大学。

2014 年 10 月 3 日「私の研究プロセス（リソースパーソン）」地域研究コンソーシアム地域情報資源部会・地域研究方法論部会合同研究会　「地域研究の情報の読み解き」、京都大学地域研究統合情報センター。

2015 年 2 月 18 日「1876 年フィラデルフィア万博と『縁』」地域研究コンソーシアム＜次世代ワークショップ企画＞「キャリア・パスとしての有期雇用を考える ―『縁』にかかわる世界の経験を通して」、東京大学東洋文化研究所。

◇教育活動

大阪大学法学研究科「現代中国研究」Ⅰ期

大阪大学法学研究科「現代中国研究特殊講義」Ⅰ期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「グローバル共生実践演習」II 期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「東アジアの環境の現状と未来」I 期

大阪大学グローバルコラボレーションセンター「リサーチ・プロポーザル作成演習」II 期

◇社会活動、センター外活動

大阪大学生活協同組合総代（吹田第一選挙区）

地域研究コンソーシアム運営委員

吹田市国際交流協会「ハロハロ SQUARE」の活動支援（詳細は p.65）

ひまわり共同保育園運営委員長

◇外部資金による研究

科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」研究代表者

◇海外調査活動

2014 年 7 月 28 日～8 月 2 日（アメリカ）科研費「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」の現地調査

2014 年 8 月 22 日～26 日（中国）科研費「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」の成果を報告するため、中国河南省鄭州市・鄭州大学で開催される「第 8 回現代中国と東アジアの新環境国際学術討論会」に出席

2015 年 3 月 22 日～31 日（中国）海外フィールドスタディ「観光化と地域の維持性（中国・雲南）」学生引率

Ⅳ. 実践支援活動

1. 東日本大震災支援活動関連

GLOCOL は、震災直後から東日本大震災の支援活動として、「NPO 法人多言語センターFACIL」（以下、FACIL）、「NPO 法人エフエムわぃわぃ」（以下、FM わぃわぃ）と連携して、被災者がひとりも排除されないために、少数者への視点にこだわった支援として「多言語情報提供」「コミュニティラジオ」「移民コミュニティ」という三つの柱での活動を続け、4 年目となる 2014 年度には、その集大成として、3 月 14 日～18 日に仙台市で開催された、第３回国連防災世界会議にて、ワークショップ、パブリックフォーラム、イグナイトステージなどを企画・実施した。これにフィリピン・ミンダナオ大学、フィリピンやインドネシアのコミュニティラジオ関係者も招聘し、連携している気仙沼のフィリピンコミュニティや阪大生などとともに活動報告・意見交換の機会とし、今後の復興のまちづくりに向けた方向性を確認した。

2. JICA 連携事業

昨年度に引き続き、主に JICA との連携協定にもとづいた事業を推進した。大阪大学は 2007 年 2 月に JICA との間で以下の連携協力協定を結んだ。GLOCOL はこの連携協力協定の内容を具体化する役割を担っている。

連携目的

(1) 国際協力に関する研究の推進
(2) 国際協力に資する人材の育成
(3) その他国際協力にかかわる事業の実施

連携協力

(1) 国際協力にかかわる研究の推進と成果の公開
(2) 国際協力にかかわる啓発的事業の実施
(3) 講師の相互派遣その他大阪大学と JICA 間の人的交流
(4) 国際協力のための専門家および調査団の派遣
(5) 国際協力のための研修プログラムの実施
(6) 学生の青年海外協力隊などへの参加に対する支援
(7) 学生の JICA インターンシップへの参加に対する支援
(8) 国際協力に携わる要員の教育・訓練に対する支援
(9) 施設の相互有効利用
(10) その他、双方が合意する連携プログラム

● JICA 関西夏期インターンシップ実習事業

大阪大学と JICA の連携協定にもとづき、国際協力に関心をもつ大学生・大学院生を対象に、JICA 関西国際センター（JICA 関西）にインターン実習生を派遣する事業を実施した。本事業の目的は、学生に実務経験の場を提供し、国際協力に携わる人材を育成することである。インターン実習生の公募は、GLOCOL が大阪大学での窓口となって行われた。応募資格をもつ対象者は、大阪大学の学部または大学院に在学中の者で、国際協力や開発援助に深い関心があり、将来的に国際協力に関連した仕事に携わる意志をもつ者とした。2014 年度に本プログラムにより派遣されたインターン実習生は、下記の 1 名であった。

法学部国際公共政策学科　3 年
実習期間：2014 年 8 月 25 日～9 月 5 日
実習内容：草の根技術協力事業、開発教育支援事業、広報イベント等の補助業務

３．学生支援活動

GLOCOL では、実践的研究を志す大学院生や若手研究者のキャリア形成を支援する目的で、いくつかの学生支援活動（若手研究者を含む）を行っている。

GLOCOL では、STA、TA、RA、アソシエイツ、招へい研究員などの採用を体系化し、招へい研究員を除くカテゴリーで明確な到達目標を掲げた公募をおこなうとともに、招へい研究員の採用においても、GLOCOL のミッションとの関連性に加え、キャリア形成の視点を重視している。

また個々のプロジェクトでは、「地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ」「GLOCOL プレゼンコンテスト」「ハロハロスクエア」（外国人児童生徒の学習支援に関する吹田市国際交流協会との共同事業）が、有償無償を問わず学生、大学院生のキャリア形成に資する目的でおこなわれている。

世界では、人材のグローバルな移動が常態化しつつある。日本国内の労働市場は、教育制度のグローバル化への対応の遅れもあって、その影響はいまだ限定的であるが、早晩、労働市場も、教育制度も、そうした人材の流動性の影響を免れ得ない。今後、大学は、グローバルな人材の移動の結節点としての役割を益々期待されていくことになろうが、教育を通して、こうしたトレンドに即した人材を育成することに加え、将来的に、国際機関や海外の NGO 等との間で多様なレベルでの人材交流をすすめることも必要である。国際協力等の実践に携わる実務家は、専門性に即してひとつの国際機関や海外の NGO 等から別の機関へと頻繁に移動するが、その合間に GLOCOL に籍をおき、GLOCOL から次の仕事にすすんでいくといった仕組みを用意できれば、同様の実践を志す学生にとって大いに資するであろう。もちろん、現状では、国際機関や海外の NGO 等で働く人たちが立ち寄ってくれるような組織になってはいない。今後、大学、さらには日本国政府のグローバル人材育成に向けての本気度が試されるところであろう。

前傾の目的の重要性にもかかわらず、2013 年度以降の次世代支援は、前述のものを除き、残念ながら停滞気味である。地域研究コンソーシアム（JCAS）との共催による次世代ワークショップ（グローバル共生・国際協力枠）は、予算の関係で公募できなかった。また、2013 年までに 3 回開催した GLOCOL プレゼンコンテストについても、第 4 回目の実施をみあわせているところである。プレゼンコンテストについては、審査を担当した専門家からも、京阪神の大学に参加者の枠組みを拡大してみてはといった提言もなされていただけに残念である。

来年度は、招へい研究員や TA、RA、アソシエイツといった比較的の予算のかからない方法を用いながら、実質的な成果をあげていきたいと考えている。

V. 学内連携事業

1. 未来戦略機構との連携

未来戦略機構は総長のリーダーシップのもと、部局横断的な教育・研究を推進するために2012年度より設置されている。未来戦略機構の説明には「専門領域の教育・研究はこれまで各部局で行われていましたが、現代社会には多様な面から解決するべき幾多の課題が立ちはだかり、専門領域を越えた新たな取り組みが求められています。そのため、未来戦略機構では総長を機構長として、中長期的視野に立ち大学全体を俯瞰しつつ、部局横断的に教育・研究を推進します。」と述べられている。未来戦略機構設置の主旨はGLOCOLの設置理念とつながるものがありGLOCOLは機構側の要請を受けて、機構の運営を通じての部局横断的な教育・研究に貢献した。

1）超域イノベーション博士課程プログラム

このプログラムは、文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラム」のオールラウンド型に採択されたプログラムであり、大阪大学未来戦略機構第一部門に位置付けられている。GLOCOLは本プログラムに対し、主として海外体験型教育プログラムの構築と実施に参画した。GLOCOLからは、宮原　暁教授、上田晶子特任准教授、敦賀和外特任准教授らが、兼任教員としてプログラム委員会に参加し、吉富志津代特任准教授が「超域学際・ボランティア実践論」の授業を担当、フィリピンでのフィールドスタディの運営・実施に携わった。

2）未来共生イノベーター博士課程プログラム

このプログラムは、大阪大学未来戦略機構第五部門に位置付けられている。GLOCOLは本プログラムの選択科目として、「グローバルコラボレーションの理論と実践」、「グローバル共生実践演習」、「多言語共生社会演習」を提供した。兼任教員として、吉富志津代特任准教授は産学官連携WG、常田夕美子特任准教授は国際連携WGの一員としてプログラム委員会に参加し、運営に携わった。

2. 全学教育推進機構との連携

大阪大学全学教育推進機構（CELAS）は、学部から大学院までの教養教育のさらなる充実、各部局を中心とした教育プログラムによる教育改革の全学的な展開、大学内の教育資源を活かした語学教育の充実、教育の質保証に向けた学習機能の強化等を図り、大学として組織的に教育を推進するため、「大学教育実践センター」を発展的に解消し、2012年4月1日に設置された。

全学教育推進機構は、大学院を含む教養教育や全学横断的な教育を企画する機能等を持った組織であり、企画開発部と実施調整部の2つの部を置き、企画開発部の下には6つの部門（学部共通教育部門、大学院横断教育部門、言語教育部門、海外教育部門、スポーツ・健康教育部門、教育学習支援部門）、実施調整部の下には3つの部会（基礎教育部会、教養教育部会、言語教育部会）が置かれている。

GLOCOLは、企画開発部の海外教育部門と大学院横断教育部門の2つの部門の運営に参画している。海外教育部門においては、国際教育交流センターと並んで主管部局となっており、GLOCOLセンター長が部門長を務めた。大学院横断教育部門においてGLOCOLは、グローバルコラボレーション科目、高度教養プログラム「知のジムナスティック」、高度副プログラムの一部を開発、提供している。（詳細はp.32）

３．兼任教員会議

GLOCOL 兼任教員との情報交換および連携促進のための機会として、毎年、兼任教員会議を開催している。兼任教員会議では、GLOCOL の活動報告、年次計画の報告を行っている。第 9 回の兼任教員会議は、GLOCOL の特色ある取り組みについて教育プログラムからの報告と国際協力グループ、グローバル共生グループ、海外体験型教育企画オフィスから、研究・実践・人材育成について報告があった。また、下記の方々より GLOCOL と連携しておこなわれた研究の成果報などを報告した。

【開催日・場所】

2014 年 12 月 9 日、コンベンションセンター　会議室 1（吹田キャンパス）

【概要】

・開会挨拶：平田收正（センター長）
・GLOCOL8 年間の実績：宮原　曉（副センター長）・栗本英世（元センター長）
・GLOCOL の特色ある取り組み ― 教育・研究・実践
　第 1 セッション：教育プログラム
　　環境問題への回路：思沁夫（特任准教授）
　　司法通訳翻訳：島薗洋介（講師）
　　コミュニケーションスキルズ系の報告：福田州平（特任研究員）
　第 2 セッション：研究・実践・人材育成
　　国際協力グループ：思沁夫（特任准教授）・大野光明（特任助教）
　　グローバル共生グループ：吉富志津代（特任准教授）
　　海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）：敦賀和外（特任准教授）
　第 3 セッション：連携と広がり
　　Nguyen Van Cong（カントー大学環境天然資源学部副学部長）
　　Martina Bofulin（GLOCOL 外国人招へい研究員 / Research Centre of the Slovenian Academy of Sciences and Arts (SASA), Slovenian Migration Institute）
　　三宅　淳（GLOCOL 兼任教員 / 大学院基礎工学研究科教授）
　　中尾卓司（GLOCOL 非常勤講師 / 毎日新聞社大阪本社社会部編集委員）
　　山田真弓（GLOCOL 招へい研究員 / 前 UNMISS（国際連合南スーダン共和国ミッション）RRP オフィサー）
・GLOCOL が歩んで来た道：大橋一友（前センター長）
・講評：岡村康行（理事/副学長） / 星野俊也（副学長）
・全体総括：平田收正（センター長）

4．フィールドスタディに関する学内連携

2014 年度、GLOCOL では計 8 本の海外フィールドスタディ・プログラムを実施した。これらのプログラムに参加した学生の所属は、文系・理系を問わず、さまざまな部局にわたった。参加学生の部局別の詳細については、p.25 を参照のこと。また、プログラム実施にあたっては、ASEAN センター（海外フィールドスタディ S「生物資源と環境」）および北米センター（カリフォルニア大学訪問プログラム）との連携をより一層深めることができた。

5．セミナー

学内の他部局と協力して主催、また、他部局が主催するセミナーなどを GLOCOL が共催や協力をして開催した。

● **国際会議**

東アジア"生命健康圏"構築に向けて：大気汚染と健康問題を考える日中国際会議

【開催日・場所】

2014 年 10 月 24 日、大学会館アセンブリーホール（豊中キャンパス）

【言語】

日本語・中国語（通訳あり）

【概要】

世界は地球温暖化・資源枯渇や生態的多様性の喪失をはじめ、大気汚染、土壌汚染、ゴミによる水質・生活環境の汚染、砂漠化などさまざまな環境問題に直面している。環境問題には地域に限定したものもあるが、多くは地域を越えて影響を及ぼし、グローバル化している。21 世紀の環境問題の主たる特徴は、グローバル環境リスクである。

しかし、グローバルな環境問題の拡大と環境問題を解決するための研究、実践、体制に大きな障害が存在し、環境問題の解決に向けての人類の知恵や優れた研究成果が十分に活かされているとは言えない。東アジアは環境問題のグローバル化が最も進んでいる地域であるにもかかわらず、国境を越えた取り組みは、国家制度、政治イデオロギーの問題、研究レベルの格差や研究体制の違いなどによって、深刻な停滞が生じていると言わざるを得ない。

例えば黄砂や大気汚染は、問題が議論され始めてかなりの時間が経過しているにも関わらず、却って事態は複雑化し深刻化の一途をたどっている。幾度も指摘されているように、東アジアでは政治イデオロギーの要因もあり、地域を横断した研究ネットワークの構築や、研究の新たな全体像を提示する枠組みが欠如している。とは言え、私たちはどの国に住もうが、どのような生活を送ろうとも、また何を研究しようが、生命健康の問題は、最も基本的な人権問題であるのみならず、地域の共通基盤を構築するための重要な指針である。

PM2.5 など東アジアの大気汚染問題は、国境を越えて大きな注目を集めているにも関わらず、最も深刻な北京の健康被害状況や地域の取り組みが今日どのような状況にあるのかは、ほとんど知られていない。今回のシンポジウムでは、長年、北京の健康被害について調査研究し、最前線で活躍する中国の研究者と大阪大学の文系・理系の研究者が一所に集い、専門領域や国境を越えて，具体的な取り組みや依拠するにたる情報やデータによる活発な議論をした。

<u>シンポジウム</u>

モデレーター：思沁夫（特任准教授）

パネラー：鄧芙蓉（北京大学医学部公衆衛生学院教授）「北京市における大気汚染と健康被害」

藤田宏志（環境省 水/大気環境局気環境課・課長補佐）「大気汚染問題の歴史的推移及びクリーン・エア・アジアの現状と課題：日中の国内外における PM2.5 問題と国際協力を中心に」

王小龍（中国農業大学人文発展学院法律系副教授）「法律システムの構築から中国の未来に向けた環境対策を考えよう」

松本充郎（国際公共政策研究科准教授）「日本における大気汚染問題への法的対応に関する一考察：四日市ぜん息から PM2.5 問題へ」

ディスカッサント：豊田岐聡（理学研究科教授）
上須道徳（環境イノベーションデザインセンター特任准教授）
田口宏二朗（文学研究科准教授）

ポスター発表

進行：思沁夫

発表者：姉崎正治（人間科学研究科 DC）、山本高郁（工学研究科）、三好恵真子（人間科学研究科）「世界の小規模金採掘（ASGM）の実態と Zero Mercury 化に向けての実践研究」

三好恵真子（人間科学研究科）、胡毓瑜（人間科学研究科 DC）「脈波におけるカオス解析から判別する精神疾患患者の特徴及び中国における心理問題への応用展開の可能性」

胡毓瑜（人間科学研究科 DC）、三好恵真子（人間科学研究科）「舟山群島新区海域における漁業資源の現状と海洋生態の保護・修復への展望：漁民の現行制度・生態に対する認識と意見に関する分析」

岸本紗也加（工学研究科）、馬庭泰介（工学研究科 MC）「モンゴル・ウランバートルから語る大気汚染」

川口奈穂（人間科学研究科 MC）「ゴラン高原におけるドルーズ教徒の生活空間とコミュニティのゆらぎ：境界に生きる人々」

日下部龍介（在中国日本国大使館広報文化センター）「中国北京市におけるソーシャルメディアを利用した健康観の形成過程」

松村悠子（人間科学研究科 DC）「新エネルギー開発を活かした地域振興の実現に向けて：沖縄県宮古島の事例からの一考察」

川原賢太（ほか 5 名）（工学研究科 MC）「Structuring the haze problems in Indonesia」

古谷浩志（理学研究科）、紀本岳志（紀本電子工業）、豊田岐聡（理学研究科）「謎の PM2.5 大気汚染を探る：先端質量分析技術の挑戦」

佐桑諒（人間科学研究科 MC）「原子力損害賠償制度の分析：古典的自由主義からの一考察」

橘高彫斗（人間科学研究科 DC）「生命が共有し得る価値とは何か：ラスキンの固有価値論を基礎として」

潘鈺林（人間科学研究科 DC）「中国蘭州市の大気汚染改善に関するフィールドワークからの分析評価」

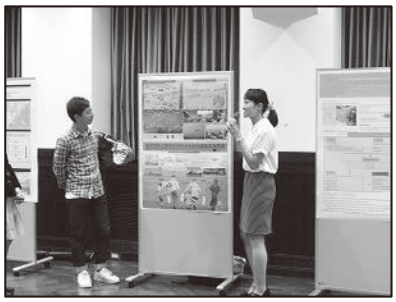
西川優花（人間科学研究科 MC）「イラン ザーヤンデルード川をめぐる水危機と人々の暮らし」

高月（国際公共政策研究科 MC）「中国杭州市の水質汚濁問題の現状と課題」

【備考】

主催：21 世紀課題群と中国（大阪大学未来研究イニシアティブ）

共催：GLOCOL、MULTUM で切り拓くオンサイトマススペクトロメトリー（大阪大学未来研究イニシアティブ）



● セミナー
国際機関で働くということ— 現場の経験から

【講演者】
慶長寿彰（世界銀行 シニア都市開発スペシャリスト）
木村寿香（アジア開発銀行民間部門業務局インフラストラクチャーファイナンス東アジアヘッド）
大谷順子（人間科学研究科准教授・東アジアセンター長（上海オフィス））

【開催日・場所】
2014 年 11 月 7 日、ステューデント・コモンズ セミナー室 2（豊中キャンパス）

【概要】
国際機関とはどういうところなのだろうか。そんな疑問にこたえるべく、世界銀行シニア都市開発のスペシャリストと、アジア開発銀行民間部門業務局でファイナンスを担当されている方、そして阪大の海外拠点である東アジアセンター長をお呼びして、現場の経験から国際機関で働くということのお話を伺った。

【講師紹介】
慶長寿彰、世界銀行 シニア都市開発スペシャリスト
青森県八戸市生まれ。 東京大学工学部都市工学科卒。東京大学大学院工学系都市工学専攻修士課程を経て 1988 年八戸市庁入庁。1992 年八戸市庁を辞職し、オクラホマ大学大学院に就学（公共政策・行政経営学修士を取得）。1994 年にワシントン DC の世界銀行本部に入行。八戸市庁都市開発部で地方都市の街づくりを実践した経験を活かして、世銀入行後は主に南アジアと東欧の地方自治体の育成、都市環境対策、災害復興などを支援。2001 年 6 月から 1 年間豪州ブリスベン市庁都市経営局に出向し、市の持続可能な都市経営戦略を担当。2002 年世銀に復帰。2007 年より 2 年間のスリランカ駐在中は津波復興と紛争地域の復興に従事。2012 年 1 月から 3 月まで世銀から休暇を取り、福島大学災害復興研究所の客員研究員。2014 年 9 月より世銀ルーマニア事務所に滞在し、ドナウ・デルタ地域の総合開発戦略作成に従事。今まで担当した主な国は、バングラデシュ、パキスタン、スリランカ、ブータン、タジキスタン、カザフスタン、マケドニア、アルバニア、ルーマニア等。

木村寿香、アジア開発銀行民間部門業務局インフラストラクチャーファイナンス東アジアヘッド
一橋大学卒業後、ロンドン・ビジネススクールで金融、ロンドン大学インペリアルカレッジで環境経済学の修士をそれぞれ取得。ロンドンで Ernst & Young を経て、欧州復興開発銀行（EBRD）勤務。ロシア、ポーランド、アゼルバイジャン、トルクメニスタン等でエネルギー案件のプロジェクトの案件形成・実施管理を行った後、2006 年にアジア開発銀行（ADB）に転籍、中国とモンゴルの民間インフラ案件へのファイナンスを担当。風力発電、省エネファイナンス、天然ガスパイプライン、地域暖房、都市ごみ発電、汚水の再生利用、農村の下水処理案件を通じて大気と水汚染問題解決に取り組む。最近は都市と農村のインフラ格差問題、および河川交通のエネルギー効率改善に注力している。北京駐在。

大谷順子、大阪大学大学院人間科学研究科准教授・大阪大学東アジアセンター長（上海オフィス）
大阪大学歯学部卒、ハーバード大学大学院 公衆衛生学修士（MPH 国際保健学）・MS（人口学）、ロンドン大学熱帯衛生医学校(LSHTM)・ロンドン経済政治大学院（LSE）博士（PhD 社会政策学）。ハーバード国際エイズ政策センター、米国疾病予防管理センター（CDC）、結核予防会結核研究所国際協力部、世界銀行、世界保健機関（WHO）中国代表事務所（北京）およびジュネーブ本部勤務後、2005 年 4 月帰国、九州大学助教授を経て、現職。主な著書に『国際保健政策からみた中国—政策実施の現場から』九州大学出版会、2007 年。『人間の安全保障と中央アジア』（編）、花書院、2010 年『事例研究の革新的方法』九州大学出版会、2006 年。『災難後的重生』（中文版）南天書局（台湾）2010 年『Older People in Natural Disasters』Kyoto University Press &Melbourne: Trans Pacific Press, 2010. 他、著書・論文多数。

【備考】
主催：人間科学研究科グローバル人間学系
共催：GLOCOL、東アジアセンター（上海オフィス）

● 公開講座
アラン・マッキー判事の難民法講座

【講演者】
アラン・マッキー判事（英国移民審判所元判事、国際難民法判事協会元理事長）
【開催日・場所】
2014 年 11 月 27 日、国際公共政策研究科 6 階会議室（豊中キャンパス）
【言語】
英語（通訳あり）
【概要】
難民法の特殊性、難民認定手続の信憑性評価等、難民法の重要点を解説いただいた。大学等で学ぶ方のみならず、弁護士等、難民法に関心のある実務者に開放する公開講座とした。
プログラム
開会の挨拶：国際公共政策研究科長　村上正直教授
講義 1 「難民・他の国際的保護に関する法・原則の特殊性」
Lecture1 "Unique nature of refugee and other international protection law and principles"
講義 2 「信憑性評価および迫害をうける現実的なおそれの国際基準」
Lecture2 "Credibility assessment and real chance test in international standard"
開会の挨拶：村上正直教授
通訳：岡田仁子氏（ヒューライツ大阪）・有江ディアナ氏（大阪大学）
【備考】
主催：国際公共政策研究科稲盛財団寄附講座
共催：GLOCOL、東京大学難民移民ドキュメンテーション・プロジェクト（CDR)

● セミナー
中国への開発援助について ― 国際機関で働くということ ―

【講演者】
小西歩（アジア開発銀行東アジア局長）
大谷順子（人間科学研究科准教授・東アジアセンター長（上海オフィス））
【開催日・場所】
2014 年 12 月 12 日、産学連携本部 D 棟-2F　ミーティングルーム（吹田キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
国際機関で活躍中のお二人をお呼びして、世界が注目する中国の開発援助について、お話を伺った。
【備考】
主催：人間科学研究科グローバル人間学系
共催：GLOCOL、東アジアセンター（上海オフィス）

● 国際産学連携シンポジウム
東南アジアにおける産学協働推進　第１回　ベトナムの大学との連携

【開催日・場所】

2015 年 3 月 5 日、中之島センター3F 講義室 304

【言語】

英語、日本語

【概要】

2015 年中に相次いで、ODA による大学強化支援や大学設置が見込まれ、大阪大学とは長く活発な交流の歴史を有するベトナムの 2 つの大学から関係者を招へいし、大阪大学の教育・研究上のカウンターパートとの議論を踏まえ、これまでの協力関係のさらなる展開として、「阪大モデル」としての国際産学連携のあり方を模索した。

プログラム

開会の辞：伊藤　正（ナノサイエンスデザイン教育研究センター 副センター長）

講演：「メコンデルタにおける環境問題と解決に向けた日本との協働の可能性」

Dr. Nguyen Van Cong（カントー大学環境・天然資源学部 副学部長）

「国際産学連携の拠点としての日越 R&D センター構想」

Dr. Le Viet Dung（カントー大学 副学長（国際担当））

コメント：平田收正（センター長）、
住村欣範（准教授）

「ナノテクノロジーとエネルギー：ベトナムにおける展開」

Dr. Nguyen Hoang Luong（ハノイ国家大学自然科学大学ナノ＆エネルギーセンター・センター長）

「ハノイにおける産学連携拠点の構想」

Dr. Le Van Chieu（ハノイ国家大学本部プロジェクト管理部・副部長）

コメント：Ryan Arevalo（工学研究科 D2）、
池　道彦（工学研究科教授）

全体討論

コーディネーター：三宅　淳（基礎工学研究科教授）

閉会の辞：星野俊也（副学長（海外拠点、国際問題担当））

【備考】

主催：GLOCOL、大阪大学未来研究イニシアティブ・グループ支援事業「メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成（発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して）」代表者：三宅　淳

Ⅵ. 学外連携事業

1．社学連携

1）足もとの国際化連続セミナー

この事業では、セミナーという発信の機会を設け、その企画から運営までのプロセスにおいて「足もとの国際化」を促進することを目的としている。2010 年度からは、ミックスルーツの若者たちのエンパワーメントとネットワークづくりのためのセミナーを企画してきた。今年度からは、「ミックスルーツ研究会」という定例会として、ミックスルーツの若者自身が中心となり活動を継続していくためのサポートをした。

● ミックスルーツ研究会　第 1 回

【開催日・場所】
2014 年 7 月 12 日（SMBC コンシューマファイナンス（株）プロミス心斎橋お客様サービスプラザ）
【概要】
1. 研究者・活動家ネットワークの構築、目的確認
2. 若手研究者を育成するために必要なサポートの概要
3. 夏期・冬期を中心とした海外の大学との連携体制
4. 若手研究者・ビジターの発表
【備考】
主催：GLOCOL
共催・企画：ミックスルーツ・ジャパン

● ミックスルーツ研究会　第 2 回

【開催日・場所】
2014 年 8 月 29 日（SMBC コンシューマファイナンス（株）プロミス梅田お客様サービスプラザ）
【概要】
テーマ：「宗教、保守、多文化：日本社会の方向性」
講師：ダンカン・ウィリアムズ准教授（南カリフォルニア大学日本センター所長、日本宗教・文化研究センター所長）
言語：英語（質疑応答は日本語可）
【備考】
主催：GLOCOL
共催・企画：ミックスルーツ・ジャパン

また、12 月 13 日開催の移民政策学会 2014 年度冬季大会において、GLOCOL も共同主催として、シンポジウム 「外国にルーツをもつ若者たちのさまざまな発信で変える社会」にて、これまでのミックスルーツ研究内容の総括としての発表をする機会を作った。すでに地域社会でそれぞれの手法で発信を続けている外国にルーツをもつ若者たちからのインパクトのある報告、それが社会に与える影響の意味を、コメンテーターとともに学術的・実践的な視点での議論がなされた。参加者は約 120 名。（詳細は pp.75-77）

2）ワン・ワールド・フェスティバル

● ブース出展

【開催日・場所】

2015 年 2 月 7 日、8 日、関テレ扇町スクエア・北区民センター・扇町公園

【概要】

ワン・ワールド・フェスティバルにおいてブースを出展し、GLOCOL が中心になって行っている地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品安全管理におけるモニタリングシステムの構築」および関連する研究やフィールドスタディに関する資料の展示と説明を行った。

ブースへの来場者は約 55 名で、内訳は、学生、国際協力団体、JICA、旅行会社、高校と多岐にわたり、話の内容も GLOCOL が実施している教育・研究プログラム全般に渡った。特に今回は阪大 OB の来場が多く、国際協力において、OB の力がどのように生かされうるのかということについて貴重な情報を得ることができた。

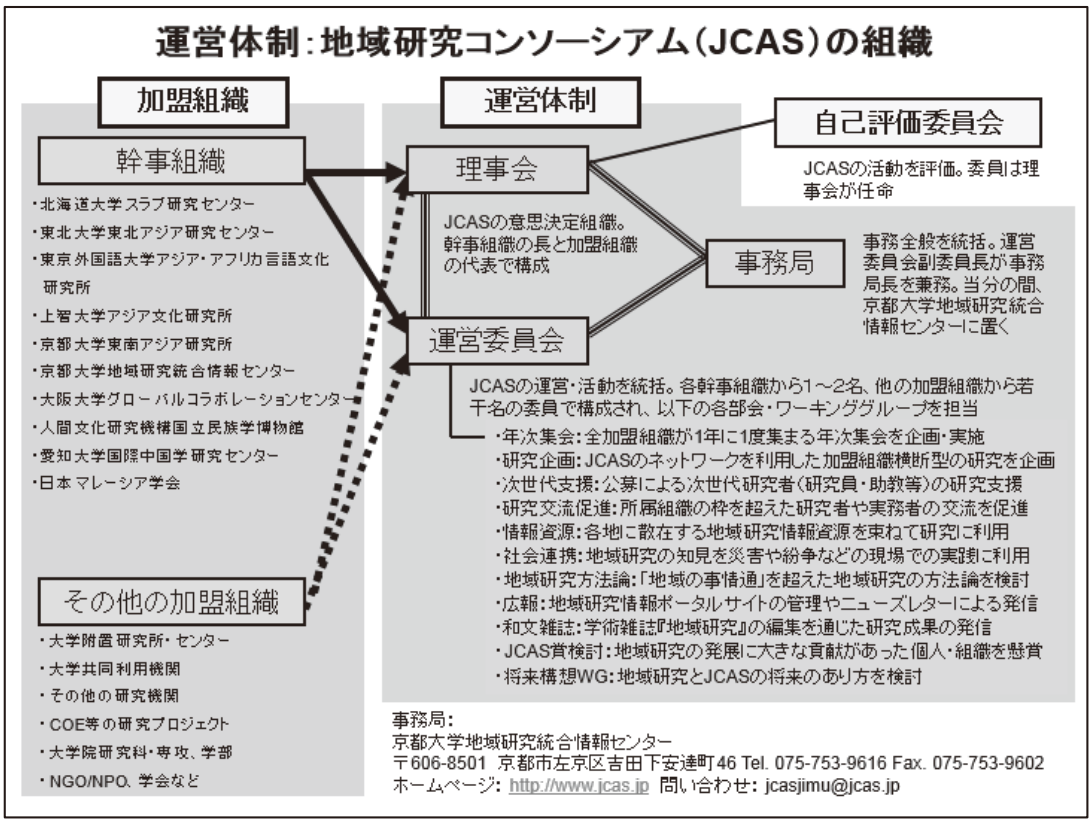
【備考】

主催：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会

２．他機関との連携

● 地域研究コンソーシアムへの参加

地域研究コンソーシアム（JCAS）は、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会、そして地域研究と密接に関わる民間組織などからなる、新しい型の組織連携である。GLOCOL は、発足当初から幹事組織の一つとして、理事会、運営委員会に参加し、社会との連携をめざした実践的な地域研究をともにおこなってきた。JCAS と GLOCOL の活動の親和性は高く、2007 年の発足以来培ってきた GLOCOL の事業と、それを通して得られたノウハウのうちのいくつかを発展させるうえで、重要な鍵を握ると考えられる。2014 年 12 月 13 日には、地域研究コンソーシアムの学会連携企画としてシンポジウムを開催した。



● 移民政策学会 2014 年度冬季大会

【開催日・場所】

2014 年 12 月 13 日、ステューデント・コモンズ（豊中キャンパス）

【概要】

ミニシンポジウム（於：セミナー室 2 / マッチング型セミナー室）

・テーマ：日本の難民政策の現状と将来 ― 「混合移住」の圧力のもとで

ファシリテータ：滝澤三郎（東洋英和女学院大学）

パネリスト：

1. 君塚　宏（法務省入国管理局難民認定室長）「世界と日本の難民問題、難民申請激増の背景・課題及びその対策、外国人受け入れの基本方針」
2. 渡邊彰悟（全国難民弁護団連絡会議事務局長・弁護士）「難民認定基準の明確化と透明性の強化、補完的保護の導入の意義」
3. 橋本直子（国際移住機関（IOM）プログラム・マネジャー）「日本における外国人の「人道的受入」と「人道

的保護」の可能性」

・テーマ：「新成長戦略における外国人政策のゆくえ」

ファシリテータ：井口　泰（関西学院大学）

報告者：大木義徳（三井物産戦略研究所）・明石純一（筑波大学）

自由報告（於：セミナー室 2 / マッチング型セミナー室 / 開放型セミナー室）

・セッション 1：国際労働力移動に関するもの

司会：近藤 敦（名城大学）

報告者：

1. 吉田公記　（法政大学大学院）「イギリス国民党の後退と移民をめぐる言説の変容」
2. 松下奈美子（名古屋産業大学）「高等教育の普及にともなう大卒高度人材の国際労働移動に関する考察 ― インド人 IT 技術者の移動を一例に」
3. 宣元錫（中央大学）「「便利屋」になっていく途上国のエンジニア ― フィリピン人の聞き取りから」
4. 佐藤由利子（東京工業大学）「地方留学促進政策と留学生の社会統合の課題 ― 南オーストラリア州の事例から」

・セッション 2：日本の移民に関するもの　於：2 階マッチング型セミナー室

司会：菅原 真（名古屋市立大学）

報告者：

1. 藤浪　海（一橋大学大学院）「南米系移民２世の分化する進路選択 ― 移民ネットワーク論からみる世代間階層移動とジェンダー」
2. 平井辰也（日本アジア医療看護育成会）「インドネシア EPA 看護師受け入れの現状 ― 入国管理政策の問題点」
3. 山本かほり（愛知県立大学）「朝鮮学校生にとっての＜祖国＞の意味」
4. 藤巻秀樹（北海道教育大学）「日韓・日中関係悪化が在日韓国・中国人に及ぼす影響調査」

・国際セッション

司会：井口　泰（関西学院大学）

報告者：

1. The Bilingual Illustrated Book Project in Hamamatsu: A Means to Connect Brazilia n Families with University Students of Brazilian Origin as Role Models
   IKEGAMI Shigehiro (Shizuoka University of Art and Culture)
   Nancy Naomi UEDA (Shizuoka University of Art and Culture)
2. Report: Exploring Wisdoms for Mutual Trust and a Sustainable Future through Migration, Diversity and Integration -with Resilience to Global Risks- (Proposal accepted on 7 November 2014 for the 21st International Metropolis　Conference 2016 in Aichi-Nagoya)
   IGUCHI Yasushi (Kwansei Gakuin University)

シンポジウム（於：2 階セミナー室 1）

・テーマ：外国にルーツをもつ若者たちのさまざまな発信で変える社会

司会・ファシリテータ：吉富志津代（GLOCOL）

パネリストによる報告：

1. エドワード須本（ミックスルーツ・ジャパン代表）「横の繋がりとアイディア・人材資源の活用と育成」
2. トーマス友基「トモダチ作戦 ― ゆっくりじっくり歩んできて見えたこと」
3. 松原ルマ ユリ アキズキ「"レモン""ヒョジュンへ""わたしのことば、わたしの道"など、これまでの映像発信の意義」
4. パクウォン（遊合芸能 親舊達チングドゥル）「老若男女国籍問わずみんなで遊び合う街と芸能の祭り"遊合祭"」

コメンテータ：落合知子（神戸大学）・小林芽里（浜松 NPO ネットワークセンター）
総括コメンテータ：池上重弘（静岡文化芸術大学）

【備考】
共催：移民政策学会
地域研究コンソーシアム
大阪大学グローバルコラボレーションセンター
大阪大学未来戦略機構第五部門

３．学会役員、民間団体役員など

GLOCOL スタッフは、各種の学会役員、民間団体役員などを務めている。2014 年度の活動は以下のとおり。

学会役員など
薬学教育評価機構評価委員長（平田收正）
薬学教育協議会薬学教育者 WS 実施委員長（平田收正）
日本華僑華人学会常任理事（宮原　曉）
地域研究コンソーシアム運営委員長（宮原　曉）
日本公衆衛生学会評議員（本庄かおり）
日本疫学会評議員（本庄かおり）
移民政策学会常任理事・企画委員長（吉富志津代）

民間団体役員など
Wildlife and Poverty Research Centre, Bhutan 理事（上田晶子）
中国環境保護 NGO「自然之友」理事（思沁夫）
ツァガンボルガソ遊牧民環境保護組合顧問（思沁夫）
ロシアブリヤード共和国民間組織（NGO）「エヴェンキ文化保護・人材育成会」教員（思沁夫）
財）兵庫県人権啓発協会人権問題研究アドバイザー（吉富志津代）
財）箕面市国際交流協会評議員（吉富志津代）
ひょうご市民活動協議会共同代表（吉富志津代）
特定非営利活動法人多言語センター理事長（吉富志津代）
特定非営利活動法人エフエムわぃわぃ代表理事（吉富志津代）
特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター常務理事（吉富志津代）
特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会評議員（吉富志津代）
NGO アフリカ平和再建委員会（ARC）運営委員・事務局長（小峯茂嗣）
特定非営利活動法人インターバンド代表理事（小峯茂嗣）

4．セミナー・イベントなど

● 公開シンポジウム
世界はレイシズムとどう向き合ってきたか地域研究とジャーナリズムの現場から

【開催日・場所】
2014 年 7 月 26 日、中之島センター10F 佐治敬三メモリアルホール
【言語】
日本語
【概要】
韓国人や中国人を標的とした民族差別、排外主義を煽動するヘイト言辞がネット空間に溢れている。東京・大阪などでは、しばしば憎悪とデマを拡散させることを目的としたデモや演説が行われるようになった。人が傷つき、憎しみ合い、剥き出しの暴力が飛びかうことにならないか、日本社会の将来を多くの人が心配し始めている。

レイシズム、ヘイト行動は、世界の多くの場所で人と人が諍い、争う原因となってきた。それは時に、民衆どうし、隣人どうしが暴力を応酬し、大勢の人の命が失われる悲劇をまねいた。一方で殺しあいや虐殺が発生した地域では、対立を和らげ、憎悪が発生・増幅していった原因を探って再発を防ごうという努力がなされている。各地で起こった民族、人種、宗派の違いによる対立・葛藤や、その克服の事例を世界の現場でそれらを目撃してきた地域研究者とジャーナリストにより報告された。日本でもくすぶり始めたレイシズムと憎悪犯罪。世界の経験から我々は何を学ぶべきか。地域研究者とジャーナリストは、立場や方法の違いを超えて課題に取り組む必要があり、このシンポジウムにより未来に向けた協働の第一歩になったと確信している。

プログラム
開会の辞〜趣旨説明：山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）
第 1 部　世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：現場からの報告
・「ルワンダのジェノサイド：「民族対立」はいかにして作られたのか」小峯茂嗣（GLOCOL）
・「インドネシア・アチェ：和平後に台頭する排外主義」佐伯奈津子（早稲田大学アジア研究機構）
・「コソボ、クルディスタン、イラクの民族・宗教対立」坂本　卓（アジアプレス・インターナショナル）
・「「反日デモ」から考える中国」米村耕一（毎日新聞外信部）
第 2 部　日本はレイシズムとどう向き合うのか：さまざまな立場
・コメント：金　千秋（NPO 法人エフエムわぃわぃ）、康　有新（大阪大学博士前期課程）、武田　肇（朝日新聞大阪社会部）
・総合討論
閉会の辞：宮原　曉（GLOCOL）
司会：西　芳実（京都大学地域研究統合情報センター）、石丸次郎（アジアプレス・インターナショナル）
進行：立岩礼子（京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所）

【講師紹介】
小峯茂嗣

GLOCOL 特任助教。1994 年以降、虐殺後のルワンダの平和構築支援や、アジア諸国の民主化支援のための国際選挙監視活動に NGO として関わる。また大学教員として、アジアやアフリカの開発途上国や紛争経験国における海外実習プログラムを企画しており、早稲田大学、東京外国語大学を経て、2010 年に現職に着任し、現在に至る。ルワンダを事例に、暴力を経た社会における国民和解のための法政策について研究中。

講演要旨：「ルワンダのジェノサイド：「民族対立」はいかにして作られたのか」
1994 年にルワンダで起きたジェノサイド。約 80 万人が犠牲になったといわれている。当時は多数派フツと少数派ツチの民族対立により、フツがツチを虐殺したという言説がまかり通っていた。しかしフツとツチは同じ言語を使い、民族間の通婚も盛んだった。エスニックな対立が顕在化した背景としては、80 年代の経済危機や国際社会からの民主化の圧力による政権の求心力の低下と、反政府勢力との内戦の勃発がある。このような政治

権力をめぐる闘争の過程で、ルワンダの「民族対立」は作られてきたのである。

佐伯奈津子

インドネシア民主化支援ネットワーク／早稲田大学アジア研究機構招聘研究員。インドネシアの資源開発と紛争、人権問題について、日本のかかわりを中心に調査し、提言活動をおこなう。とくに紛争地だったアチェにおいて、人権侵害被害女性の聞き取り調査や自立支援のほか、スマトラ沖地震・津波被災者への支援活動を実施している。『アチェの声：戦争・日常・津波』（コモンズ、2005 年）、『見えないアジアを歩く』（三一書房、2008 年）、『現代インドネシアを知るための 60 章』（明石書店、2013 年）など。

講演要旨：「インドネシア・アチェ：和平後に台頭する排外主義」30 年以上の内戦が終結して約 10 年がたつインドネシア・アチェでは、「紛争中のほうがよかった」という声が聞かれるようになった。紛争下では不可視になっていた排外主義が台頭しているためだ。異なる民族、宗教、文化、政治的見解などを背景とする他者と共生できる社会をより平和的だと考えるならば、なぜアチェ和平合意は平和をもたらし得なかったのだろうか。アチェで台頭する排外主義について、その現状と課題について検討する。

坂本　卓

ジャーナリスト、アジアプレス所属。専門はクルド問題。コソボ、アフガニスタン、イラク、クルディスタンなど紛争地や戦場などで、衝突のはざまにおかれた住民の視点を軸にしたルポを続ける。NHK、日本テレビ、テレビ朝日のほか、Channel4（英国）、Al Hurra（アラビア語衛星）などでドキュメンタリーを発表。雑誌、新聞などにも写真ルポを寄稿。共著に、匿されしアジア　（風媒社）、21 世紀の紛争（岩崎書店）など。

講演要旨：「コソボ、クルディスタン、イラクの民族・宗教対立」コソボ紛争は、セルビア人とアルバニア人が共存してきた村の隣人関係を引き裂いた。クルディタンでは民族抑圧への反発が武力闘争につながった。いまイラクで先鋭化する宗派間の対立は、果て無き憎しみの連鎖に向かおうとしている。国家や政治はときに対立を煽り、コミュニティと人びとが作り上げてきた調和や理性を踏みにじる。人種・民族・宗教の対立の背景はどこにあるのか。相互和解への取り組みから私たちが学ぶべきことは何か。

米村耕一

毎日新聞外信部記者。西日本新聞社で写真記者を経験した後、ペン記者に転向。福岡県田川支局時代に韓国語学習を開始。1997 年夏に退社し、2 カ月ソウル留学。同年秋に毎日新聞西部本社に入り、福島支局などを経て、2004 年から政治部。小泉政権時代の首相官邸などを取材した。2008 年 9 月から 1 年間、中国大連で中国語研修。2010 年 4 月から 3 年間、北京勤務。慶應大学総合政策学部卒。

講演要旨：「「反日デモ」から考える中国」北京駐在記者として 2010 年、2012 年の反日デモを取材した。昨年春に帰国し、毎日新聞でスタートした「隣人：日中韓」の取材チームに加わっている。2012 年のことを振り返ると、北京の一般市民の中には、本気で日中間の武力衝突を予想している人がいた。その後も東シナ海を巡る日中のつばぜり合いは続いている。日中は、将来にわたって衝突を回避できるのだろうか。

西　芳実

京都大学地域研究統合情報センター准教授。インドネシア地域研究、アチェ近現代史。主な研究テーマは多言語・多宗教地域の紛争・災害対応過程。著書に『災害復興で内戦を乗り越える―2004 年スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（京都大学学術出版会、2014 年）等。JCAS 社会連携部会を担当し、JCAS 関連の共編著書に『原発震災被災地復興の条件：ローカルな声』『地域研究とキャリア・パス：地域研究者の社会連携を目指して』『「情報災害」からの復興：地域の専門家は震災にどう対応するか』『中東から変わる世界』（いずれも JCAS Collaboration Series）がある。

石丸次郎

ジャーナリスト/アジアプレス。1962 年大阪出身。朝鮮世界の現場取材がライフワーク。ソウル留学後、在日韓国・朝鮮人問題などを取材。北朝鮮取材は国内に 3 回、朝中 国境地帯には約 95 回。これまで 900 超の北朝鮮の人々を取材。2002 年より北朝鮮内部にジャーナリストを育成する活動を開始。北朝鮮内部からの通信「リムジンガン」 の編集・発行人。主作品に「北朝鮮難民」（講談社）など。「北朝鮮に帰ったジュナ」（NHK ハイビジョンスペシャル）など

【備考】

主催：地域研究コンソーシアム（JCAS）、アジアプレス・インターナショナル、京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）、京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所（IELAK）、調査報道 NPO アイ・アジア（iASIA）、GLOCOL

共催：京都大学地域研究統合情報センター共同研究「官公庁や民間企業やマスコミと接合される地域研究の方法論の検討」（研究代表者：立岩礼子）

● GLOCOL セミナー（116）
「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場 ― フィールドワークを問う

【開催日・場所】

2014 年 9 月 8 日、ステューデント・コモンズ セミナー室 1（豊中キャンパス）

【言語】

日本語、英語（通訳あり）

【概要】

一般財団法人ヘルス・サイエンス・センターの研究助成（研究代表者:星野和実）を受けて行われたもので、新たなフィールドワーク、他者との関係性、他者の客観的理解、共感的理解について、学際的比較が行われた。

プログラム

主催者挨拶：平田收正（GLOCOL）

企画趣旨：宮原　曉（GLOCOL）

話題提供 1：「医療社会学の立場から」Winston Tseng（カリフォルニア大学バークレー校社会健康科学部、健康行動科学研究所）

話題提供 2：「文化人類学の立場から」島薗洋介（GLOCOL）

話題提供 3：「地域保健学の立場から」安梅勅江（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

話題提供 4：「生涯発達心理学の立場から」やまだようこ（立命館大学衣笠総合研究機構）

総合討論・指定討論：星野和実（GLOCOL）

【備考】

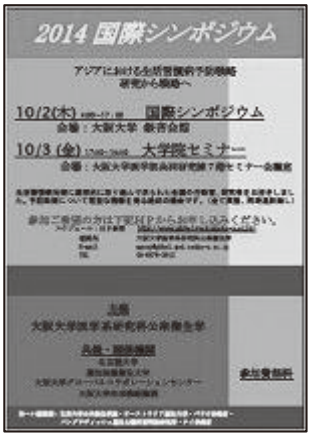
主催：GLOCOL

共催：日本発達心理学会ナラティヴと質的研究分科会

● **セミナー**
わたしのことば、わたしの道 ～ 外国につながる子どもたちの言語教育の実践から

【開催日・場所】
2014 年 9 月 23 日、神戸市勤労会館 2 階多目的ホール（神戸市中央区雲井通 5-1-2）
【言語】
日本語
【概要】
さまざまな課題を抱える現在の教育環境において、多様性を活かすことで見えてくる大きな可能性のために、外国にルーツをもち二つ以上の言語環境で暮らす子どもたちにとっての言語形成について報告があった。
プログラム
基調講演：「・・・・世の中は日本語だけじゃない！」サニー・フランシス（タレント／ラジオ DJ）
パネルトーク：若者が語る「わたしのことば、わたしの道」重井アマンダ、MC ナム、祖艶、松原ルマ ユリ アキズキ
モデレーター：小林芽里（浜松 NPO ネットワーク事務局長）
コメンテーター：サニー・フランシス、松田陽子（兵庫県立大学）
映像上映：母語、バイリンガル教育を考える
(1)日系ブラジル人 3 世の映像作家・松原ルマ ユリ アキズキによるドキュメンタリー
(2)アメリカ・ミシガン州で日本語と英語でのバイリンガル教育を実施しているチャータースクール「ひのきインターナショナルスクール」紹介
PR：県内における教育実践の紹介
神戸市及び周辺地域において、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、韓国朝鮮語など、母語を視野に入れた教育の実践者によるアピール。
関係機関への提言内容についての意見交換
司会進行：吉富志津代（ワールドキッズコミュニティ代表／GLOCOL）
【備考】
共催：ワールドキッズコミュニティ、関西母語支援研究会、GLOCOL、関西ブラジル人コミュニティ、ひょうごラテンコミュニティ、ベトナム夢 KOBE、神戸コリア教育文化センター、たかとりコミュニティセンター
後援：兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、公益財団法人兵庫県国際交流協会、公益財団法人神戸市国際協力交流センター
実施・企画：バイリンガル提言プロジェクト「わたしのことば、わたしの道」実行委員会
助成：トヨタ財団

● 2014 国際シンポジウム・大学院セミナー
アジアにおける生活習慣病予防戦略：研究から戦略へ



【開催日・場所】
2014 年 10 月 2 日、銀杏会館（吹田キャンパス）・3 日、医学部共同研究棟 7 階セミナー会議室（吹田キャンパス）

【言語】
英語

【概要】
生活習慣病対策に意欲的に取り組んで来られた各国の行政官や研究者をお招きして、予防政策について有益な情報を得る絶好の機会となった。

【備考】
主催：医学系研究科公衆衛生学
共催：名古屋大学、藤田保健衛生大学、GLOCOL、大阪大学未来戦略機構
招へい機関：北京大学公共衛生学院・オーストラリア国立大学・パラオ保健省・バングラデシュ国立心臓財団病院研究所・タイ保健省

● 海外大学院留学説明会

【開催日・場所】
2014 年 12 月 22 日、大講義室（豊中キャンパス）

【言語】
日本語

【概要】
海外の大学院に学位取得を目的として留学を考えている学生にむけて、留学の動機、日本の大学院と海外の大学院の違い、出願方法、学位取得までの道のり、留学先での日常生活、卒業後の進路や就職等の説明会をおこなった。

プログラム
第 1 部：現役留学生、留学経験者による講演
高野陽平（ジョージア工科大学大学院地球大気科学科博士課程在籍）
ブダ真里江（ケンブリッジ大学心理学部講師・同大学認知神経科学博士、ノッティンガム大学心理学部卒）
勝谷郁也（ライス大学大学院電気コンピュータ工学科博士課程在籍、大阪大学修士卒）

第 2 部：パネルディスカッション、質疑応答
上記講演者に加え、
瀬戸山晃一（院法学研究科招聘教授、ウィスコンシン大学マディソン校ロースクール M.L.I., LL.M., S.J.D.プログラム留学）
岡本一秀（ジョージア工科大学大学院航空宇宙工学科博士課程在籍）
杉田米行（大阪大学大学院言語文化研究科教授、ウィスコンシン大学マディソン校歴史学研究科 US history 博士）

【備考】
主催：米国大学院学生会
後援：全学教育推進機構、GLOCOL、船井情報科学振興財団、米国大使館

● GLOCOL セミナー（121）
第 67 回日米学生会議　募集説明会

【開催日・場所】
2015 年 1 月 15 日、ステューデント・コモンズ 開放型セミナー室（豊中キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
日米学生会議は、日本と米国の学生、各 36 名が約一ヶ月にわたって共同生活を送りながら、世界の様々な問題に関する活発な議論を行うと共に、日米両国の参加者間の相互理解を深めることを目的とする国際学生交流プログラムである。当会議は今年度 80 周年を迎え、故宮沢喜一元首相やキッシンジャー元米国国務長官なども日米学生会議 OB であり、極めてレベルが高く歴史ある学生会議との評価を受けている。この日米学生会議をより深く知ってもらう為、説明会を実施した。

【備考】
主催：第 67 回日米学生会議実行委員
協力：GLOCOL

● セミナー
日本における外国人居住者に対する多職種多文化支援

【開催日・場所】
2015 年 3 月 20 日、大阪会場 : STUDIO（豊中キャンパス）、東京会場 : 東京オフィス多目的室
【言語】
日本語、発表の要約を英訳
【概要】
一般社団法人日本心理臨床学会の研究助成を受けて、守秘義務を有する対人援助専門職および、対人援助専門職を目指し事例の守秘を履行できる学生や大学院生を対象に、大阪会場（司会）と、東京会場（話題提供者、指定討論者）をテレビ会議システムにより同時中継でおこなった。

プログラム
開会の挨拶・司会：宮原　曉（GLOCOL 副センター長・教授）
話題提供 1 :「日本における外国人居住者に対する多職種多文化支援」星野和実（GLOCOL 招聘教授・臨床心理士）
話題提供 2 :「日本における多文化クリニックの精神科臨床」阿部　裕（明治学院大学心理学部教授・四谷ゆいクリニック院長・精神科医）
話題提供 3 :「日本における難民に対する法的支援」山本哲史（東京大学大学院総合文化研究科・グローバル地域研究機構・持続的平和研究センター・難民移民ドキュメンテーション・プロジェクト CDR　准教授）
指定討論 :「外国人居住者に対する多職種多文化支援モデルの評価」井上孝代（明治学院大学名誉教授、臨床心理士）
閉会の挨拶：宮原　曉
【備考】
主催：GLOCOL
共催：四谷ゆいクリニック、東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構・持続的平和研究センター・難民移民ドキュメンテーション・プロジェクト（CDR）、株式会社風間書房、日本発達心理学会ナラティヴと質的研究分科会

Ⅶ. 出版、情報発信

● GLOCOL ブックレット 17
宮原　曉（編）『「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場：フィールドワークを問う』
2015 年 3 月 25 日発行

● 年報 2013

● GLOCOL リーフレット

● FIELDO リーフレット

● GLOCOL 海外体験型教育プログラム
リーフレット　Go to FIELDO

● GLOCOL 教育プログラム 2014
Imagine the Global

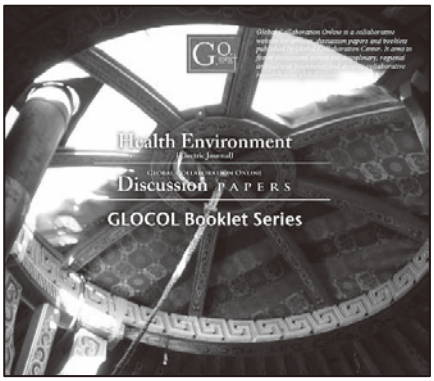
● Website

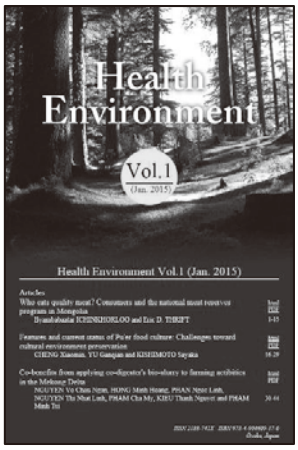
GLOCOL の独自のウエブサイトを運営している。セミナーやシンポジウムなどの広報だけでなく、終了後の報告などもサイトに掲載し、FIELDO で募集・開催している海外フィールドスタディや海外インターンシップなどの情報も掲載している。GLOCOL が担当する授業の科目一覧やシラバスなどの資料も掲載している。

また、グローバルな活動を志す阪大生へむけた情報提供ページとして、GLOCOL が企画・主催する海外インターンシップやフィールドスタディ、セミナー等に関する情報に加えて、学外の機関・団体が実施するインターンシップやフィールドスタディ／スタディツアー、海外の大学の夏季・冬季短期プログラムに関する情報を掲載するメンバーサイトを活用して情報を発信している。

オンラインペーパーのサイトを立ち上げて、Health Environment のオンラインジャーナルとディスカッションペーパー、GLOCOL ブックレットを公開している。ここに掲載された pdf は、大阪大学レポジトリにも登録している。

GLOCOL サイト日本語版：http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/
GLOCOL サイト英語版：http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/en/
オンラインペーパー：http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/go/
ディスカッションペーパー：http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/go/dp/
Electric Journal Health Environment：http://www.healthenvironment-journal.net/





● **議事要旨公開**

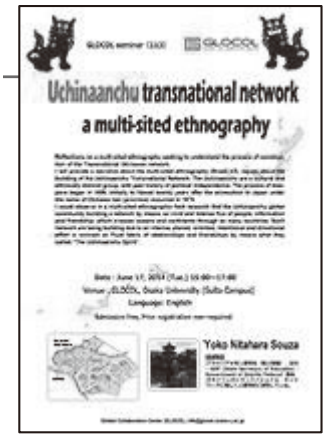
大阪大学第一期中期計画の「178）部局運営の透明性を保つため、教授会、各種委員会等における審議の議事録を作成し公表する」にもとづき、GLOCOL においてもセンター会議議事要旨を GLOCOL ホームページ上に公開している。

Ⅷ. 資料

1．セミナー、シンポジウム等開催一覧

2014 年 6 月 17 日

GLOCOL セミナー（113）
「Uchinaanchu transnational network: a multi-sited ethnography」



【講演者】
Yoko Nitahara Souza（GLOCOL 外国人招へい研究員）
【場所】
GLOCOL センター長室（吹田キャンパス）
【言語】
英語
【概要】
GLOCOL 外国人招へい研究員としてブラジルから招へいしたニタハラさんより、文化的にも民族的にも特色のある沖縄の人のつながりについてお話をいただいた。

【講師紹介】
ブラジリア大学人類学科（博士課程）、SEE - GDF (State Secretary of Education - Government of Distrito Federal）教員。オキナワ人のトランスナショナル・ネットワークに関して人類学的に研究している。
【備考】
主催：GLOCOL
参加者：約 5 名

2014 年 7 月 8 日

GLOCOL セミナー（115）
「学生だからできる国際協力の方法：素人としての「弱み」を可能性に反転させる」

【講演者】
日下　渉（古屋大学大学院国際開発研究科准教授）
【場所】
A 棟 206 号（箕面キャンパス）
【言語】
日本語
【概要】
2013 年 11 月の中部フィリピンにおける台風被災の現地を訪問し、精力的に調査、報告活動を進めている若手研究者である日下渉先生をお招きし、現地での支援活動の現状と問題点等についてお話しいただき、今泉光司監督『2013 年 11 月 8 日　レイテ島、台風ヨランダ上陸』（30 分）も上映した。
【講師紹介】
学位：博士「比較社会文化」（九州大学）、専門分野：政治学、フィリピン研究、研究テーマ：フィリピンにおける差異と共同性の構築、主著：『反市民の政治学: フィリピンの民主主義と道徳』

【備考】
主催：GLOCOL
参加者：約 15 名

2014 年 7 月 12 日
足もとの国際化連続セミナー「ミックスルーツ研究会（1）」
於：プロミス心斎橋お客様サービスプラザ（詳細は p.73）　参加者：約 20 名

2014 年 7 月 17 日
FIELDO BBL セッション（13）「海外渡航時の健康管理について」
於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.18）　参加者：約 25 名

2014 年 7 月 17 日
GLOCOL セミナー（114）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（22）
「後悔にもいろいろあるけど：「何もしなかった」vs「やってしまった」」
於：医学部保健学科第 3 講義室（吹田キャンパス）（詳細は p.16）　参加者：約 40 名

2014 年 7 月 26 日
シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」
於：中之島センター10F 佐治敬三メモリアルホール（詳細は pp.78-80）　参加者：約 110 名

2014 年 8 月 29 日
足もとの国際化連続セミナー「ミックスルーツ研究会（2）」
於：プロミス梅田お客様サービスプラザ（詳細は pp.73-74）　参加者：約 10 名

2014 年 9 月 8 日
GLOCOL セミナー（116）「「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場 ― フィールドワークを問う」
於：ステューデント・コモンズ セミナー室 1（豊中キャンパス）（詳細は pp.80-81）　参加者：約 35 名

2014 年 9 月 23 日
セミナー「わたしのことば、わたしの道 ～ 外国につながる子どもたちの言語教育の実践から ～」
於：神戸市勤労会館 2 階多目的ホール（詳細は p.81）　参加者：約 50 名

2014 年 10 月 2 日～3 日

国際シンポジウム・大学院セミナー「アジアにおける生活習慣病予防戦略：研究から戦略へ」

於：銀杏会館 / 医学部共同研究棟 7 階セミナー会議室（吹田キャンパス）（詳細は p.82）参加者：約 70 名

2014 年 10 月 22 日

GLOCOL セミナー（117）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（23）
「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」

於：基礎工学国際棟シグマホール（豊中キャンパス）（詳細は p.17）　参加者：約 120 名

2014 年 10 月 24 日

国際会議「東アジア "生命健康圏" 構築に向けて ― 大気汚染と健康問題を考える日中国際会議」

於：大学会館アセンブリーホール（豊中キャンパス）（詳細は pp.68-69）　参加者：約 50 名

2014 年 11 月 7 日

セミナー「国際機関で働くということ ― 現場の経験から」

於：ステューデント・コモンズ セミナー室 2（豊中キャンパス）（詳細は pp.70-71）　参加者：約 40 名

2014 年 11 月 14 日

FIELDO BBL セッション（14）「将来に活きるインターン・短期留学への挑戦」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は pp.18-19）　参加者：約 5 名

2014 年 11 月 15 日

GLOCOL セミナー（118）「リアリティを記述する方法としてのエスノグラフィーの可能性」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.33）　参加者：約 10 名

2014 年 11 月 27 日

公開講座「アラン・マッキー判事の難民法講座」

於：国際公共政策研究科 6 階会議室（豊中キャンパス）（詳細は p.71）　参加者：約 40 名

2014 年 11 月 28 日

GLOCOL セミナー（119）「第 45 回 サンガレン・シンポジウム説明会」

【場所】
STUDIO（豊中キャンパス）
【言語】
英語
【概要】
サンガレン大学の学生団体が運営しており、「学生版ダボス会議」とも呼ばれるシンポジウムが毎年 5 月にスイス・サンガレン市にて政官学各界のリーダー約 600 人と世界各国の学生 200 人等が参加して行われている。このサンガレン・シンポジウムには、シンポジウムのテーマに関するエッセイ・コンテストに応募（大学院生・ポスドクで 1985 年以降に生まれた学生のみ応募可能）し選抜された 100 名の学生が主催者側の経費負担で参加することができる。このサンガレン・シンポジウムの概要及びエッセイ・コンテストの応募について、主催するサンガレン大学学生団体の実行委員による説明会を開いた。

【備考】
主催：GLOCOL
参加者：約 5 名

2014 年 12 月 4 日

FIELDO BBL セッション（15）「語学力を活かして警察で働くとは」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.19）　参加者：約 20 名

2014 年 12 月 12 日

セミナー「中国への開発援助について ― 国際機関で働くということ」

於：ステューデント・コモンズ セミナー室 2（豊中キャンパス）（詳細は pp.71-72）　参加者：約 25 名

2014 年 12 月 13 日

シンポジウム「移民政策学会 2014 年度冬季大会」

於：ステューデント・コモンズ 2 階セミナー室（豊中キャンパス）（詳細は pp.75-77）　参加者：約 120 名

2014 年 12 月 15 日

GLOCOL セミナー（120）

「GLOCOL を越えて ― グローバル共生の進化型を求めて」

【講演者】

Martina Bofulin（JSPS/Osaka University）

Maja Veselič（JSPS/Sophia University）

【場所】

STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

英語

【概要】

日本学術振興会（JSPS）の外国人特別研究員として GLOCOL に所属しているスロベニア出身の研究者のコーディネートにより、「日本における中国系移民家族の生存戦略」と、「語り部による東日本大震災の記憶」をそれぞれテーマとする研究を報告した。

【備考】

主催：GLOCOL

参加者：約 5 名

2014 年 12 月 22 日

「海外大学院留学説明会」

於：大講義室（豊中キャンパス）（詳細は p.82）　参加者：約 50 名

2015 年 1 月 14 日

FIELDO BBL セッション（16）「海外渡航時の健康管理について」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.19）　参加者：約 10 名

2015 年 1 月 15 日

GLOCOL セミナー（121）「第 67 回日米学生会議　募集説明会」

於：ステューデント・コモンズ 開放型セミナー室（豊中キャンパス）（詳細は p.83）　参加者：約 15 名

2015 年 2 月 7 日、8 日

ワン・ワールド・フェスティバル「ブース出展」

於：関テレ扇町スクエア・北区民センター・扇町公園（詳細は p.74）　参加者：約 55 名

2015 年 2 月 13 日

GLOCOL セミナー（122）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（24）

「英語もダメ、大学も不合格だった私が、子育てしながら、国連職員へ」

於：医学部保健学科第 3 講義室（吹田キャンパス）（詳細は pp.17-18）　参加者：約 35 名

2015 年 3 月 5 日

国際産学連携シンポジウム　東南アジアにおける産学協働推進「第 1 回 ベトナムの大学との連携」

於：中之島センター講義室 304（詳細は p.72）　参加者：約 30 名

2015 年 3 月 10 日

セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会

「第 1 回 千葉理論から Chiba Theories へ ―

グローバル化時代の法と社会を考えるために」

【講演者】

石田慎一郎（首都大学東京）

【場所】

STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

GLOCOL では、法学研究科とともにこれまでの高度副プログラム「司法通訳翻訳」を発展させ、グローバル化時代のニーズに即した新たな教育プログラム「グローバル化時代の法と社会」の開設を予定している。このセミナー・シリーズ「グローバル化時代の法と社会」では、法と文化、法と国際協力、法と言語（司法通訳）等の新たな教育プログラムの根幹となるテーマについて、毎回、話題提供者を招き、法と社会、あるいは法と法文化に関する様々なトピックについて、これまでの枠組みにとらわれない自由な議論をおこなってみたいと考えている。第 1 回目では、法哲学・法社会学・法人類学の分野でにおけるグローバル化時代の法と社会を考えるための主要な方法のひとつとして国際的によく知られている千葉正士についてお話いただいた。本報告では、 (1)法主体、三ダイコトミー、アイデンティティ法原理を鍵概念とする千葉理論（千葉の法文化論、法の多元的構造論）の意義について、報告者が調査地としている東アフリカの事例分析を絡めて探究。(2)日本そして世界の千葉スクールの現状を紹介し、様々な Chiba Theories の展開可能性を観察。(3)千葉理論に対するいくつかの疑義や批判に応答するかたちで、さらには千葉理論の歴史的文脈を踏まえながら、千葉正士が目指した〈人間と法〉研究のエッセンスについて報告いただいた。

【備考】

主催：GLOCOL

参加者：約 10 名

2015 年 3 月 20 日

セミナー「日本における外国人居住者に対する多職種多文化支援」

於：STUDIO（豊中キャンパス）（詳細は p.83）　参加者：約 25 名

2015 年 3 月 21 日

セミナー・シリーズ：グローバル化時代の法と社会 第 2 回

「Human Smuggling in the Age of Globalization: The Case of the Illegal Chinese Immigrants in the United States」

【講演者】

馬　暁華（大阪教育大学准教授）

【場所】

STUDIO（豊中キャンパス）

【言語】

日本語

【概要】

セミナー・シリーズ「グローバル化時代の法と社会」の第 2 回目は、馬先生をお迎えして、中国人密入国あっせん組織の実態や活動、内部構造について学び、密入国の実態を理解することを目的とした。中国人不法移民が世界中に広まった経緯と、あっせん業がどのように成り立っているかについて、紹介いただき、中国人不法移民が数多く存在するアメリカでの事例に焦点を絞っての考えを報告いただいた。

【備考】

主催：GLOCOL

参加者：約 5 名

2．海外出張一覧

※ 出張（研修）期間、氏名、用務先・用務内容（経費）

2014 年

4 月 15 日～19 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る現地サンプリングに参加するため（受託事業費）

4 月 16 日～21 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」にかかる、タイビン省における現地調査、ホーチミン市、メコンデルタ、ハノイにおける研究打ち合わせ（受託事業費）

4 月 25 日～5 月 7 日、吉富志津代、フランス・パリ大学日本語学部より、4 月 29 日に開催される日本における移民の若者をテーマとした映画『HAFU』に関するディベートのコメンテーターとして招聘（他機関経費）

4 月 4 日～17 日、小峯茂嗣、ルワンダ共和国・科研費（挑戦的萌芽研究「ルワンダのガチャチャ裁判による和解醸成効果に関する研究」研究代表者：小峯茂嗣）の現地調査（科研費）

5 月 18 日～25 日、吉富志津代、アメリカ・トヨタ財団採択プログラム「外国人児童生徒の言語形成を保障するバイリンガル教育環境推進のための政策提言」のために、先駆的な二言語教育を実施しているミシガン州のひのきインターナショナルスクールを視察（他機関経費）

5 月 30 日～6 月 3 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る現地サンプリング参加（受託事業費）

5 月 31 日〜6 月 9 日、思沁夫、モンゴル・りそなアジア・オセアニア財団環境プロジェクト助成事業「モンゴル国オンギ川流域における柳林保護および越冬用飼料（草）の栽培に関する協力行動」（奨学寄附金）

5 月 31 日〜6 月 5 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」にかかる、タイビン省における現地調査、ハノイ市での研究打ち合わせ、科学研究費補助金「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」にかかるメコンデルタでの予備調査、ホーチミン市でのセミナーのための打合せ（受託事業費）

6 月 18 日〜24 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る現地サンプリング参加（受託事業費）

6 月 22 日〜27 日、宮原　曉、タイ・The 6th Asian Ministerial Conference on Disaster Risk Reduction の各セッションの議論に参加（科研費）

7 月 19 日〜8 月 8 日、上田晶子、ブータン・科研基盤 C「ブータンの農村社会内における経済的格差の要因」に関する調査。超域プログラムのフィールドスタディの下見、調整（科研費・他部局経費）

7 月 21 日〜26 日、吉富志津代、インドネシア・GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム（A）「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施にむけた準備（運営費交付金）

7 月 27 日〜8 月 5 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」科研費 B「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」（薬学）（受託研究費・科研費）

7 月 28 日〜8 月 2 日、福田州平、アメリカ・科研費「フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究」の現地調査のため（科研費）

7 月 29 日〜8 月 7 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る中間評価会議に参加するため（受託研究費）

7 月 4 日〜9 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」LRI「複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証（メコン川流域をモデルケースとして）」（受託事業費・他機関経費：日本化学工業協会（LRI））

7 月 5 日〜9 日、平田收正、ベトナム・LRI「複合的な環境汚染に対する新規網羅的モニタリングシステムの開発とその実効性の検証（メコン川流域をモデルケースとして）」（他機関経費：日本化学工業協会（LRI））

8 月 19 日〜31 日、本庄かおり、オランダ・オランダ　グローニンゲンで開催される 2014 International Congress of Behavior Medicine で研究発表ならびに研究打ち合わせ　その後、ロッテルダムにて Erasmus Medical Center Rotterdam で行われるセミナー参加（科研費・運営費交付金）

8 月 1 日〜9 月 4 日、常田夕美子、インド・科研「現代インドにおける都市村落混住地域とグローカルネットワーク－社会空間の視点から」の調査・資料収集（科研費）

8 月 22 日〜26 日、福田州平、中国・科研（フィラデルフィア万博に注目した米中日国際文化関係の研究）の成果を報告するため、中国河南省鄭州市・鄭州大学で開催される「第 8 回現代中国と東アジアの新環境国際学術討論会」に出席（科研費）

8 月 24 日〜9 月 23 日、思沁夫、中国、ロシア・科研費基盤 C「トナカイ放牧と自然保全の持続可能な関係：エヴェンキ人のローカルナレッジの再評価」に関する研究調査及び情報収集、北京大学で開催の国際会議での発表（科研費）

8 月 24 日〜9 月 6 日、島薗洋介、フィリピン・学生指導及び研究調査（運営費交付金）

8 月 27 日〜9 月 2 日、小峯茂嗣、朝鮮民主主義人民共和国・「大学生・大学教員のための朝鮮ツアー」参加による、現地視察（平壌、開城、板門店）および大学研究者、大学生（平壌外国語大学）との交流（運営費交付金）

8 月 31 日〜9 月 4 日、住村欣範、ベトナム・科研費挑戦的萌芽研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」に係る現地調査、論文博士制度に係る現地指導（科研費・JSPS 論文博士事業）

8 月 31 日〜9 月 9 日、吉富志津代、インドネシア・GLOCOL 海外フィールドスタディ・プログラム（A）「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」実施（運営費交付金）

8 月 4 日〜14 日、宮原　曉、フィリピン・科研費挑戦的萌芽研究「東西交流史の新たな視覚：メキシコ史研究から見る東・東南アジアの文化変容」の調査、資料収集及びワークショップ開催（科研費）

8 月 4 日～6 日、平田收正、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る中間評価会議に参加（受託研究費）

9 月 12 日～23 日、島薗洋介、イギリス・科研費若手研究 B「代理懐胎の人類学：英国における代理懐胎の実態と当事者の語りの研究」の調査（科研費）

9 月 14 日～23 日、宮原　曉、中国・科研費基盤 B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の香港、広州、泉州での華僑出身地域における現地調査調査（科研費）

9 月 4 日～13 日、小峯茂嗣、バングラデシュ・海外フィールドスタディ「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」の学生引率（他機関経費）

10 月 11 日～15 日、宮原　曉、フィリピン・レイテ島での災害復興支援における現地調査（運営費交付金）

10 月 11 日～15 日、島薗洋介、フィリピン・レイテ島での災害復興支援における現地調査（運営費交付金）

10 月 19 日～24 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る打合せ、調査研究（受託研究費）

10 月 19 日～24 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性細菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る打合せ、調査研究（受託研究費）

11 月 11 日～23 日、小峯茂嗣、ルワンダ・科研費挑戦的萌芽研究「ルワンダのガチャチャ裁判による和解醸成効果に関する研究」の現地調査（科研費）

11 月 14 日～20 日、平田收正、中国・雲南大学、普洱学院との共同研究及び学生引率（他部局経費：小林製薬助成）

11 月 14 日～21 日、思沁夫、中国・雲南大学、普洱学院との共同研究及び学生引率（他部局経費：小林製薬助成）

11 月 19 日～26 日、吉富志津代、インドネシア・GLOCOL 海外体験型教育企画オフィス（FIELDO）海外フィールドスタディ・プログラム (S)「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」の実施地にて、「多文化共生」に関する神戸の実践活動の内容を共有る（他機関経費）

11 月 20 日～23 日、島薗洋介、フランス・フランス国立科学アカデミーより依頼を受け、国際コロキアムへ参加（他機関経費）

11 月 22 日～30 日、敦賀和外、ミャンマー・国連フォーラム　ミャンマースタディプログラムに参加し、ミャンマーにおける国連の活動を視察、関係者との意見交換を行うとともに、ミャンマーにおける海外体験型教育プログラムの実施可能性を探る。（運営費交付金）

11 月 24 日～27 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係るプログレス会議に出席するため（受託研究費）

11 月 24 日～26 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」（受託研究費）

11 月 27 日～12 月 1 日、住村欣範、ベトナム・科研費 B「ベトナムの 2 大河川最下流域における毒性化学物質による食品汚染に関する調査研究」（科研費：薬学研究科）

11 月 5 日～11 日、島薗洋介、フィリピン・レイテ島での災害復興支援における現地調査（運営費交付金）

11 月 8 日～15 日、常田夕美子、バングラデシュ・JICA パートナーシップセミナーへの参加のため（他機関経費）

11 月 9 日～16 日、宮原　曉、アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校を訪問し、今後の研究プロジェクトについて、Health Research for Action Center の研究者を含め研究打合せ（運営費交付金）

12 月 15 日～20 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせに出席するため（受託研究費）

12 月 16 日～19 日、吉富志津代、韓国・トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において連携する韓国の団体などとの打ち合わせのため（他機関経費）

12 月 20 日～29 日、常田夕美子、インド・オディシャー州における女性の口頭伝承の調査および資料収集のため（運営交付金）

12 月 24 日〜28 日、住村欣範、ベトナム・ベトナムにおける産学連携の可能性に関する調査（委任経理金）

2015 年

1 月 20 日〜21 日、住村欣範、ベトナム・科研費萌芽的研究「照葉樹林文化圏の近代化過程における食品の保存方法に関する複合的研究」調査（科研費）

1 月 22 日〜24 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明とモニタリングシステムの構築」の調査・情報収集（受託研究費）

1 月 29 日〜2 月 1 日、吉富志津代、韓国・トヨタ財団助成金事業『バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成を考慮した教育環境整備のためのネットワーク構築事業』において、連携する韓国の団体などとの二回目の打ち合わせ（他機関経費）

2 月 15 日〜3 月 8 日、小峯茂嗣、ルワンダ・科研費挑戦的萌芽研究「ルワンダのガチャチャ裁判による和解醸成効果に関する研究」の現地調査（科研費）

2 月 1 日〜26 日、常田夕美子、インド・科研費基盤 C「現代インドにおける都市村落混住地域とグローカルネットワーク－社会空間の視点から」の調査・資料収集（科研費）

2 月 8 日〜17 日、大野光明、ラオス・海外フィールドスタディ B「開発と社会・環境変化」学生引率（運営費交付金）

2 月 8 日〜17 日、小河久志、ラオス・海外フィールドスタディ B「開発と社会・環境変化」学生引率（運営費交付金）

3 月 14 日〜23 日、安藤由香里、オランダ・海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る」学生引率（運営費交付金）

3 月 17 日〜21 日、住村欣範、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理におけるモニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ出席（受託研究費）

3 月 18 日〜26 日、中山達哉、ベトナム・SATREPS「薬剤耐性菌発生機構の解明と食品管理における耐性菌モニタリングシステムの開発」に係る研究打ち合わせ出席（受託研究費）

3 月 21 日〜31 日、思沁夫、中国・海外フィールドスタディ「観光化と地域の維持性（中国・雲南）」学生引率（運営費交付金）

3 月 22 日〜30 日、本庄かおり、イギリス・科研費基盤 C「性別役割分業規範の健康影響とそのメカニズムに関する社会疫学研究」調査及び情報収集、共同研究者と研究打合せ（科研費・運営費交付金）

3 月 22 日〜31 日、福田州平、中国・海外フィールドスタディ「観光化と地域の維持性（中国・雲南）」学生引率（運営費交付金）

3 月 24 日〜4 月 4 日、宮原　曉、ベトナム、フィリピン・科研費基盤 B「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」の調査及び情報収集（科研費）

3 月 2 日〜11 日、敦賀和外、東ティモール・海外フィールドスタディ「東ティモールにおける適正技術の可能性」学生引率（運営費交付金）

3 月 6 日〜20 日、大野光明、アメリカ・科研費若手研究 B「沖縄の反基地運動と米軍黒人兵の連帯の力学－太平洋を横断するネットワークの視点から」調査及び情報収集（科研費）

3 月 7 日〜17 日、思沁夫、中国・中国大陸における少数民族の集落形成に関する研究調査及び情報収集（他機関経費）

2 月 23 日〜3 月 8 日、吉富志津代、スロベニア、トルコ・スロベニア移民局にてレクチャーと情報交換、トルコにてドイツへの移民家族の調査、および関西学院大学の研究セミナー「イスラームの復興とイスタンブルにおけるライフスタイルの変容」に参加（運営費交付金）

３．活動記録

2014.04.08	スタッフ会議（1）
2014.04.16	海外フィールドスタディ(S) 2014 年度募集
2014.04.22	センター会議（1）
2014.04.28	スタッフ会議（臨時）
2014.05.12	海外プレ・インターンシップ 2014 年度募集
2014.05.13	スタッフ会議（2）
2014.05.19	海外インターンシップ 2014 年度募集
2014.05.19	JICA 関西夏期インターンシップ 2014 年度募集
2014.05.27	センター会議（2）
2014.06.10	スタッフ会議（3）
2014.06.24	センター会議（3）
2014.06.17	GLOCOL セミナー（113）「Uchinaanchu transnational network: a multi-sited ethnography」
2014.06.25	GLOCOL・RA 公募プログラム　募集
2014.07.08	FD セミナー（1）「個人情報保護・情報セキュリティについて」
2014.07.08	スタッフ会議（4）
2014.07.08	GLOCOL セミナー（115）「学生だからできる国際協力の方法 : 素人としての「弱み」を可能性に反転させる」
2014.07.12	足もとの国際化連続セミナー「ミックスルーツ研究会(1)」
2014.07.15	FD セミナー（2）「サイエンティストによる途上国研究へのアプローチ」
2014.07.17	FIELDO BBL セッション（13）「海外渡航時の健康管理について」
2014.07.17	GLOCOL セミナー（114）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（22）「後悔にもいろいろあるけど :「何もしなかった」vs「やってしまった」」
2014.07.22	センター会議（4）
2014.07.26	公開シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか : 地域研究とジャーナリズムの現場から」
2014.07.29	FD セミナー（3）「学生海外派遣時のリスク管理シミュレーション」（阪大教職員対象）
2014.08.02-24	海外プレ・インターンシップ助成：日米学生会議（アメリカ）
2014.08.04-09.08	海外フィールドスタディ S「生物資源と環境」（タイ）
2014.08.09-18	海外プレ・インターンシップ助成：OVAL Japan（韓国）
2014.08.19-09.13	海外プレ・インターンシップ助成：ジャパンタンザニアツアーズ株式会社（タンザニア）
2014.08.29	足もとの国際化連続セミナー「ミックスルーツ研究会(2)」
2014.08.31-09.09	海外フィールドスタディ A「コミュニティ防災 ― 命を守るためのつながりを学ぶ」（インドネシア）
2014.09.03-13	海外フィールドスタディ A「開発途上国の生活環境の改善に貢献するモノづくりを提案する」（バングラデシュ）
2014.09.08	GLOCOL セミナー（116）「「いたみ」「かなしみ」「他者」の現場 ― フィールドワークを問う」
2014.09.09	スタッフ会議（5）
2014.09.16	センター会議（5）
2014.09.19	海外フィールドスタディ（B）2014 年度募集
20149.20-10.31	海外インターンシップ助成：Qatar Petrochemical Company（カタール）
2014.09.23	セミナー「わたしのことば、わたしの道 ～ 外国につながる子どもたちの言語教育の実践から ～」
2014.09.30	スタッフ会議（臨時）

2014.10.02-03	2014 国際シンポジウム・大学院セミナー「アジアにおける生活習慣病予防戦略：研究から戦略へ」
2014.10.06	2014 年度　海外インターンシップ・プログラム（大阪大学未来基金グローバル化推進事業「海外研修プログラム助成金」採択事業）募集
2014.10.13-11.11	海外プレ・インターンシップ助成：LULI, Ecole Polytechnique（フランス）
2014.10.14	FD セミナー（4）「不正使用防止計画推進への取り組みについて」
2014.10.14	スタッフ会議（6）
2014.10.14	GLOCOL 科目 冬季集中講義「アカデミック・スキルズ」履修者募集
2014.10.22	GLOCOL セミナー（117）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（23）「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」
2014.10.24	「東アジア"生命健康圏"構築に向けて ― 大気汚染と健康問題を考える日中国際会議」
2014.10.28	センター会議（6）
2014.10.30	海外インターンシップ・プログラム助成説明会・インターンシップ体験談報告会
2014.10.30	海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る（オランダ）」募集
2014.11.06	海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る（オランダ）」説明会
2014.11.07	セミナー「国際機関で働くということ ― 現場の経験から」
2014.11.11	スタッフ会議（7）
2014.11.13	FD セミナー（5）「最近のタイ王国の教育事情 ― 高大連携によるグローバル人材育成のために」
2014.11.13	海外フィールドスタディ報告会「海外フィールドスタディを通じた学びと気づき」
2014.11.14	FIELDO BBL セッション（14）「将来に活きるインターン・短期留学への挑戦」
2014.11.15	GLOCOL セミナー（118）「リアリティを記述する方法としてのエスノグラフィーの可能性」
2014.11.22-12.04	海外フィールドスタディ「国際機関研修プログラム」（イタリア）
2014.11.25	センター会議（7）
2014.11.25	海外フィールドスタディ「観光化と地域の維持性（中国・雲南）」募集
2014.11.27	公開講座「アラン・マッキー判事の難民法講座」
2014.11.28	GLOCOL セミナー（119）「第 45 回 サンガレン・シンポジウム説明会」
2014.12.01-12	GLOCOL 写真展「アフリカをさるいて学ぶ」
2014.12.04	FIELDO BBL セッション（15）「語学力を活かして警察で働くとは」
2014.12.09	スタッフ会議（8）
2014.12.09	兼任教員会議
2014.12.11	公開授業「アフリカをさるいて学ぶ ― 郷土史と世界史の狭間で」
2014.12.12	セミナー「中国への開発援助について ― 国際機関で働くということ」
2014.12.13	シンポジウム「移民政策学会 2014 年度冬季大会」
2014.12.15	GLOCOL セミナー（120）「GLOCOL を越えて ― グローバル共生の進化型を求めて」
2014.12.15	「国連防災会議での GLOCOL 主催イベント参加者募集」
2014.12.16	センター会議（8）
2014.12.17	GLOCOL 海外インターンシップ助成を利用した、カリフォルニア大学訪問の募集
2014.12.22	「海外大学院留学説明会」
2014.12.25	海外フィールドスタディ「東ティモールにおける適正技術の可能性」募集
2015.01.13	スタッフ会議（9）
2015.01.14	FIELDO BBL セッション（16）「海外渡航時の健康管理について」
2015.01.15	GLOCOL セミナー（121）「第 67 回日米学生会議　募集説明会」
2015.01.20	FD セミナー（6）「GPA 導入に伴うシラバス上の成績評価基準について」

2015.01.27	センター会議（9）
2015.02.04-03.24	海外インターンシップ助成：特定非営利活動法人 JIPPO（フィリピン）
2015.02.07-08	ワン・ワールド・フェスティバル「ブース出展」
2015.02.08-17	海外フィールドスタディ「開発と社会・環境変化」（ラオス）
2015.02.10	スタッフ会議（10）
2015.02.12	GLOCOL・TA　公募
2015.02.13	GLOCOL セミナー（122）/ FIELDO グローバル・エキスパート連続講座（24）「英語もダメ、大学も不合格だった私が、子育てしながら、国連職員へ」
2015.02.16	「WHO 神戸センター訪問スタディツアー」
2015.02.17	センター会議（10）
2015.02.17-23	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.02.17-03.01	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.02.18	GLOCOL 運営協議会（14）
2015.02.19-02.28	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.02.19-03.04	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.02.21-03.02	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.02.22-03.02	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.02.22-03.02	海外インターンシップ助成：カリフォルニア大学
2015.03.02-11	海外フィールドスタディ「東ティモールにおける適正技術の可能性」（東ティモール）
2015.03.05	国際産学連携シンポジウム　東南アジアにおける産学協働推進「第 1 回　ベトナムの大学との連携」
2015.03.10	スタッフ会議（11）
2015.03.10	セミナー・シリーズ　グローバル化時代の法と社会「第 1 回　千葉理論から Chiba Theories へ ― グローバル化時代の法と社会を考えるために」
2015.03.14-23	海外フィールドスタディ「国際司法・平和の現場を知る」（オランダ）
2015.03.17	センター会議（11）
2015.03.20	セミナー「日本における外国人居住者に対する多職種多文化支援」
2015.03.21	セミナー・シリーズ　グローバル化時代の法と社会「第 2 回　Human Smuggling in the Age of Globalization: The Case of the Illegal Chinese Immigrants in the United States」
2015.03.22-31	海外フィールドスタディ「観光化と地域の維持性」（中国・雲南）
2015.03.23	海外フィールドスタディ 2015 年度募集

年報　2014

発行日　2015 年 10 月 1 日（非売品）
編集責任者　島薗洋介
編集実務　宮地薫子
編集発行　大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）
〒565-0871　大阪府吹田市山田丘 2-7
TEL：06-6879-4442　FAX：06-6879-4444
http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/

OSAKA UNIVERSITY

GLOCOL
GLOBAL COLLABORATION CENTER

大阪大学グローバルコラボレーションセンター
GLOBAL COLLABORATION CENTER
OSAKA UNIVERSITY
http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/